

東北学院大学における改革の経緯と現状 IV

(2013.4～2019.3)

2019年3月31日

東北学院大学

学長 松本宣郎

目 次

1	はじめに ～これまでの6年間を振り返る.....	1
2	改革のあゆみ.....	5
2-1	ガバナンス改革.....	5
①	教学改革推進委員会の設置.....	5
②	学校教育法改正に伴う学内組織の改定.....	5
2-2	中長期計画の策定と実施.....	6
①	中期達成目標 2013-2018.....	6
②	中長期計画「TG Grand Vision 150」の策定と第I期中期計画の進捗状況.....	9
2-3	アーバンキャンパス構想～大学総合キャンパス整備事業の推進.....	20
①	大学総合キャンパス整備構想の策定.....	20
②	土樋キャンパス北地区新校舎（ホーイ記念館）の建設.....	20
③	五橋キャンパスの設置.....	21
2-4	『東北学院大学の基本方針 2017』（総合マニフェスト）の刊行.....	22
2-5	教育の質的転換.....	23
①	私立大学等改革総合支援事業.....	23
②	教育活動.....	24
1)	理念・目的・教育目標及び教学上の3つの方針.....	24
2)	カリキュラムの改正.....	25
(1)	TG ベーシックの導入と見直し.....	25
(2)	「地域教育科目」の導入.....	26
(3)	共通（必修）英語の見直しと英語教育センターの設置.....	26
(4)	キャップ制の導入.....	26
3)	年間の授業計画（シラバス）.....	27
4)	授業方法の改善.....	27
5)	入学前教育の実施.....	28
6)	授業改善のための学生アンケート結果の活用.....	28
7)	卒業時意識調査の実施.....	28
8)	GPA 制度の導入.....	29
9)	『東北学院の歴史』を利用する自校史教育科目の設置と授業への取り組み.....	29
10)	FD 活動の推進.....	30
11)	「就職に強い大学」ブランドイメージ強化のための教育プログラム開発.....	31
12)	履修証明プログラム「地域コーディネートスキルプログラム」の開始.....	32
13)	コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムの開講.....	32
2-6	教育・研究組織の改編.....	32

①	法科大学院の募集停止.....	32
②	工学部の改組.....	33
③	文学部教育学科の開設.....	33
④	英語教育センターの設置.....	33
⑤	オーディオビジュアルセンターの廃止.....	33
⑥	「学生総合保健支援センター」の設置.....	34
⑦	ラーニング・コモンズ（学習支援施設）の設置.....	34
2-7	内部質保証と点検・評価及び認証評価.....	34
①	内部質保証体制の構築.....	34
②	点検・評価の実施.....	34
③	公益財団法人大学基準協会による「認証評価」の受審と大学基準への適合認定.....	35
④	Institutional Research 活動.....	35
2-8	外部評価.....	36
①	外部評価委員会.....	36
②	東北学院大学の教学に関する懇話会.....	37
③	西南学院大学との相互評価に関する協定.....	37
2-9	学生支援.....	37
①	奨学金制度.....	37
1)	スポーツ奨学金.....	37
2)	予約継続型給付奨学金（3L奨学金）の新設.....	38
②	東北学院コンシェルジュ（TGC）.....	38
③	朝定食の提供.....	38
④	障がいのある学生への支援.....	38
⑤	退学者を防ぐ対策.....	39
2-10	社会貢献・地域連携.....	39
①	宮城県教育委員会との連携協力.....	39
②	国土交通省東北地方整備局との連携協力.....	40
③	岩手県宮古市との連携協力.....	40
④	仙台市との「災害時における帰宅困難者の支援に関する協定」の締結.....	40
⑤	一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との連携協力協定の締結.....	41
⑥	みやぎ移住・定住推進会議への会員登録.....	41
⑦	株式会社ロフトとの連携協力.....	41
⑧	ベガルタ仙台との連携協力.....	41
⑨	「地（知）の拠点整備事業」（COC：Center of Community）及び「地（知）の拠点大学による地方創成推進事業」（COC+）による地域社会との連携及び貢献.....	41

⑩	河北新報社との連携協力によるシンポジウム「震災と復興 東北の地域力」	42
⑪	小学校教員のための中学校英語教員免許状取得認定講習	43
⑫	地域（近隣町内）住民との交流活発化	43
	1) 青葉土樋町内会と東北学院大学主催による「敬老お食事会」の開催	43
	2) 留学生の地域イベントへの参加	43
	3) わが街フェスティバルの開催	44
	4) キャンパス見学ツアー@土樋の開催	44
⑬	公開講座	44
⑭	音楽への招待「時代の音」レクチャーコンサート・シリーズ	45
⑮	連続講座「震災と文学」	45
⑯	『震災学』の発行	45
2-11	教育・研究環境	45
	① 「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」	45
	② 「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」	46
	③ 私立大学研究ブランディング事業	46
	④ 私立大学等改革総合支援事業	47
	⑤ 学長研究助成金	47
	1) 地域に関わる研究又は知的支援活動	47
	2) 職員業務研究	47
	3) 学長教育改革研究助成金	48
2-12	図書館	48
	① 機関リポジトリの構築	48
	② 「アクティブ・コート」の開設	48
	③ 新図書館システムの稼働	49
	④ 東北学院大学学長杯争奪ビブリオバトルの開催	49
2-13	国際交流	49
	① 国際交流協定の締結	49
	② ASEAN からの留学生拡大ーラオスの大学生受入れー	50
	③ 交換留学生受入れプログラムの改編	50
2-14	入試改革	50
	① 新しい「アドミッション・ポリシー」の策定と実行	50
	② アドミッションズ・オフィスの設置	50
	③ 大学入試制度改革への対応と志願者確保の方策	50
	④ Web 出願方式の推進	51
	⑤ 青函進学フェアの実施	51
	⑥ 厳格な入学定員管理	51

⑦	入学定員増減措置.....	51
⑧	学部における新たな入試の導入.....	52
2-15	東日本大震災と東北学院大学.....	52
①	文化財レスキュー活動.....	52
②	東北学院デジタルアーカイブ『東日本大震災の記録 Remembering 3.11』.....	52
③	震災記録集『After 3.11 東日本大震災と東北学院』.....	52
④	災害ボランティア活動.....	52
2-16	管理運営.....	53
①	職員人事制度.....	53
②	事務職員の出向.....	53
③	大学事務組織の改編.....	53
④	統合事務システムの稼働.....	54
⑤	特任講師制度.....	54
⑥	副学長の増員.....	54
⑦	教学組織の見直し（大学の将来像）.....	54
2-17	歴史的建造物の重要文化財・有形登録文化財への登録.....	60
①	旧宣教師館（デフォレスト館）の重要文化財指定.....	60
②	本館等の登録有形文化財登録.....	60
2-18	広報・情報公開.....	60
①	プレゼンス広報.....	60
3	医学部新設の検討.....	61
4	おわりに.....	63
5	あとがき.....	65
改革の年表.....		67
東北学院大学 学長 メッセージ集.....		72
2013（平成 25）年度		
	入学式告示.....	72
	学長就任にあたって.....	75
	2014 年年頭所感「新しい歌を！」.....	76
	学長見聞録 vol.1.....	78
	卒業式告辞.....	78
2014（平成 26）年度		
	学長見聞録 vol.2.....	81
	「熱くもなく、冷たくもなく」.....	81
	学長見聞録 vol.3.....	84

「クリスマスー民全体に与えられる大きな喜びー」	84
学長見聞録 vol.4.....	86
「十字架のことば」	86
2015（平成 27）年度	
「迎える者がいた」	90
「十字架のことば」	90
「教会人として、キリスト教学校人として」『季刊教会』 No98.....	95
法学部創設 50 周年記念誌挨拶.....	97
「視点 隔ての中垣は取り除けるか」『七十七ビジネス情報』第 71 号.....	98
2016 年 年頭所感「創立 130 周年を迎えて」	100
「大学論の周辺」日本私立大学連盟『大学時報』No366.....	101
ホーイ記念館献堂式式辞（2016 年 3 月 28 日）	105
「生きる意味」	107
2016（平成 28）年度	
「時評 波濤を越えて」『私学経営』No.502.....	109
東北学院創立 130 周年記念式式辞	111
学長見聞録 vol.5.....	113
「キリストの平和」	113
2017 年 年頭所感「2017 年 年頭のことば」	118
「千年も一時」	119
学長見聞録 vol.6.....	122
2017（平成 29）年度	
「古代教会と『学校』ーローマ帝国と初期キリスト教史の一側面ー」	123
「歴史は積み重なる」	127
2018 年 年頭所感「すべてのことに感謝しなさい」	130
「放蕩息子・その父、そして兄」	132
2018（平成 30）年度	
入学式告示.....	135
学長見聞録 vol.7.....	137
「赦してやりなさい」	138
「クリスマス：贈り物の物語」	141
教養学部 30 周年記念誌.....	142
卒業式告辞.....	143
学長見聞録 vol.8.....	145
「一緒にあるいてくださるイエス」	146

1 はじめに ～これまでの6年間を振り返る

学長 松本 宣郎

2013年4月に学長に就任した。東北大学教員勤務の末期に研究科長と評議員の数年の経験、宮城学院では法人経営の経験がありはしたが、大学マネジメントについては未知数で不安も小さくなかった。当面は2人の副学長から教わって全体状況を把握し、すでに進行していた、特にTGベーシックの定着など教育内容の改革の動きを進めるままに任せ、学長の仕事を明確にすべく努力した。

建学の精神という言葉を初めて強く意識した。幸い私自身、改革長老教会の、つまり長老主義カルヴァン派の教会人であったから本学の建学の精神には親和性があった。私としては建学の精神に立つ証左として、礼拝の固守と、キリストが傍らにいて学院と私を守ってくださるという信仰への固着を決意した。加えて、長老主義の（神学ではなく）教会政治の特性は、長老による合議制である。学長として副学長その他の首脳層を合議体メンバーとして政策決定を行っていくことがそれにならう方針であるし、私のスタンスにピタリと一致するものだった。この選抜されたスタッフによる合議に基づく大学教学経営の方針は一貫して維持したつもりである。

時代は大学への政財界からの期待、というより圧力が強まる形で、教育の質的転換と迅速な決定を果たす組織改革が求められていた。学校教育法改正による学長ガバナンスの強化、学生の主体性育成、多方面にわたる学生支援、FD、SDの推進等々が、すでに流れを察知して動いていた学内指導層によって、外圧による、とはいえ着々と進められた。学長としては日本私立大学連盟の理事に選任されたことから、入手情報の学内周知を心がけた。

社会への発信力を高めることが現在の大学に求められていることを意識し、その面で本学が十分ではないと考え、「中期計画・中期目標」というかつて国立大学法人化の時期に大学に設置させられたアイテムを思い出し、本学にはこの種の明確な基本方針が意識されていないと理事会で発言し、当時の常任理事たちも同じ意見で、まず法人に企画課を設置するなど、少し時間がかかったが、2016年度から開始されたTG Grand Vision 150へと結実した。以後、年度ごとの事業計画は、原則としてこのビジョンに即して策定されることが期待されることになったわけである。企画課の設置により、全体的な事業計画のPDCAサイクルの見直しの遂行機関も明確になった。

大学の教学の営みのスピード感を高め、また全学の動きをリアルタイムで把握し、必要な措置を迅速に取らなければならないということも私たちの共通認識だった。従来から会議数は少なくはなかったが、同じ問題を下から積み上げるのはよいとしても、繰り返しがほとんどで、踏み込んだ審議決定を行う場がないように思われた。あわせて、学長室というものの存在が本来重要性をもつものでありながら、万般の業務引受機関になって飽和状態のようにも感じられたこともあった。そこで学部長会、部長会の既存審議組織に加えて「教学改

革推進委員会」を新設して、これを問題発見、調査報告、審議、提案の中核機関とした。この委員会の構成員は学長・副学長・学部長・学長室長・総務部長とし、加えて学務・学生・宗教の各部長を常時陪席メンバーとした。学長室の事務部門を再編強化し、地域共生推進課と IR 課を設けて整理した。さらに、法人からの強い要請もあり、常任理事・常勤監事らが教学改革推進委員会に陪席することとなり、法人と大学の意味疎通を非常によくさせることになった。

また、この委員会の先議機関として、それまで学部長会の直前に置かれていた学長・副学長・総務部長による会議を取りやめ、学長の判断で随時招集する四者（現在は五者）会議を始めた。教学改革推進委員会とともに新しい協議の場では構成員のフリーな発言が慣行となった。学長ガバナンスを支える合議組織の強化をさらに進めた。当初在任していた副学長の任期が終わると同時に彼らを学長特別補佐として教学改革推進委員会に加えた。大学首脳の担う仕事の急増は深刻であったから、副学長の増員は必須だった。これは学長任期二期目に実現させ、おりしも大学基準協会による認証評価が始まった時期でもあり、新副学長は点検・評価担当とした。

これで教学経営の推進組織は定まった。しかし、実はこれと平行して、就任二年目から理事長職を担うことになったから、法人全体の経営の進め方についても考えねばならなくなった。しかし、幸いなことに法人の務めはずっと自律的に続けられており、大学のような流動的な諸課題対応があまりなかったから、学校法人としての経営体制を整えればよかった。しかし、それは、ガバナンスの弱さと時代状況の認識の不足、という伝統的(?)特性の払拭の実行でもあった。常任理事3人と法人事務局長からなる「経営戦略会議」をすぐに発足させ、原則週1回開催し、情報の収集と課題の共有、諸部署への指示を行うこととした。理事長と学長兼任の利点は生かされたと思う。理事長特別補佐の任命を積極的に行ったことも新しい施策であった。

以上を経営面での6年間の振り返りとし、ここから学長として経験し、感じたことを記すこととする。

東北最大の私立大学として、ことに仙台における本学の存在感の大きさを就任直後から実感した。実に多数の同窓生が仙台を中心に存在し、各界各層に浸透している。入学、卒業の時期にはメディアにも必ず取り上げられる。歴史の長さ、わけでも東北学院中学校・高校が、大学より60年以上古い歴史をもつこと、土樋キャンパスの建物、宣教師館がよく知られていることなど、東北学院の認知度と人気、評価の背景は複合的である。

その一方で、主として学内の見解だったのだが、東北学院大学は何もしない大学だ、何もしなくとも受験生は集まり、経営は安定し、就職率もよい、これらに安住して、競争的な社会状況に無感覚である、という指摘もよく口にされていた。実際はその中間、というところではあったろう。

これを直接受けてというのではなく、この時点、現今の社会状況の中で東北学院大学ほど

ういう方向に向かったらいいのかを副学長・教学改革推進委員会の仲間としばしば論議した。特に成果の上がることができたわけではないが、常に大学の質向上、外部の評価上昇を意識し続けただけでも良かったと思っている。

地域と社会貢献の面で本学の実績をさらに強調したいと考えた。これは学長室の方向性と一致した。仙台市、多賀城市との関係をより密にし、CSWの資格講座などの提案があればすべて学長としてサポートした。東日本大震災後の本学の復興支援の働きは本報告書でも触れているが、全学的に力を注ぎ、一般の評価も受けたことである。COCとCOC+事業の採択のための学長室を中心とした努力は半端なものではなかったが、本学の地域社会貢献の流れがあったから実現できたものであり、学長として関わられたのは幸いであった。

講座「震災と文学」「時代の音」、小学校教員の英語教員免許状取得の講座、加えて工学部の多賀城市との協力、教養学部の地区との交流など、本学各部署の地域貢献の取り組みは継続されており、心強い限りである。旧仙台市立病院跡地に建設する五橋キャンパスそのものは、大学のプレゼンス強化をも企図したものであるが、基本的コンセプトは、やはり地域に開放的で、地域とともに生きる大学、というものなのである。

本学の評価にプラスする出来事としてはこのほか、2016年春に完成させたホーイ記念館がある。新しい大学キャンパスのコンセプトを盛り込み、ラーニング・コモンズ、一般開放のパン屋カフェなどを備え、建物と周辺環境整備と併せて、土樋キャンパスの本館前の通りの景観を一変させた。また、文学部が2018年度に開設した教育学科も、英語教員免許状を有する小学校教員の養成という社会的期待に応えるものであったし、同じ文学部から立ち上げられた研究ブランディング事業も本法人が誇る重要・有形文化財の一つ、ラーハウザー記念礼拝堂ステンドグラスに脚光を浴びさせることになった。

学生に関しては、教育改革の面ではそもそも本学の積み上げてきたスキームの継続に任せ、副学長らがそれを担ってくれた。因みに大学入試についても私自身は単に学長としてのルーティンの役割を果たすだけで、ことに合否判定に関して私は前任校でもほとんど実態に関与したことがなく、本学の職人技とすら見える作業を敬意を持って見守るだけでよかった。

したがって、学長としては学生のキャンパスライフの快適さが守られることをまず念じ続けた。毎年 of 退学生の多さには胸が痛み、対策を模索した。しかし、打つ手立ては具体的には講じえず、ただ実数は年々低下していることにほっとしたに過ぎない。これについては単位を取り残して留年する際の学納金割引を導入することも有効だと思う。実際に学務部長には単位取得の柔軟性を検討してもらっているが、早い解決が望まれる。

学生の課外活動に関しては困った事象も少なからず生じた。できるだけ学生の立場に寄り添うことを旨とした。ことに外部に対しいかなるスタンスをとるかが喫緊の課題であることを認識し、できるだけ隠し立てしないことを原則として種々対応した。概ね適切な対処が果たせたと思う。危機管理の問題を法人、大学ともに重視して準備していた結果であるが、関係した方々の働きには感謝のほかない。

学生との接点も持っていたいと思い、就任 2 年目から歴史学科の 3 年生向け特殊講義の授業を担当した。テーマは古代ローマ帝国史、受講生は平均 30 名。アクティブ・ラーニングを工夫する余裕はなく、せいぜい写真資料を多数提示する程度だったが、レポートはなるべくコメントをつけて返却することを心がけた。学生による授業評価が年々上昇したことを密かな誇りと考えている。青山学院大学、北海学園大学との総合定期戦や大学祭、学生表彰、ビブリオバトル、コンシェルジュなど、できるだけ学生と触れる機会を設けたつもりである。挨拶してくれる学生がおり、卒業式ではたくさんの卒業生から記念撮影を求められ、うれしく思った。

大学の大きな組織再編と新設の事業については特別の成果はなかった。このことの背景には、一つには、私の就任早々突如出来た医学部設置構想の挫折がある。責任を負うことになって、交渉ごとも行ったが、大学教員のほとんどが反対であることを感じ取り、すぐに終息策を考え、ことは一時の狂騒曲で終わった。私は、こと医学部設置への反対は教員として無理からぬことと理解しつつ、底流として本学教員には、新学部設置のような大きな改革への忌避あるいは敬遠する意識の強さを認識したのである。もちろんそのような意識の強いことは副学長たちからも得ていたことではあった。こういうわけで、その後首脳サイドでは 2023 年度五橋キャンパス完成と軌を一にしての新学部構想を打ち出し、実現させたいと考えているが、教員・教授会の、全学的改革への十分な合意形成を慎重に行わなければならないとの私自身の判断はより重いままなのである。

最後に、学長としての学内と社会への発信についてふれておく。学長として新聞、業界誌、マスコミなどからの取材や執筆依頼には、精選しつつ積極的に対応した。仲介してくれる学長室・広報部や教員個人のおかげでテレビや FM ラジオにも出演した。講演もかなり行ったが、古代キリスト教の歴史を映像で紹介するテーマがほとんどで、大学改革などの学長的現代的テーマでのものはなかった。この点いささか残念ではある。

大学ホームページに学長のサイトを開いてもらったことはありがたかった。就任後すぐにブログでの発信を始めた。大学の公式な出来事をなるべく具体的に紹介した。あわせて庭の花や旅行先のスナップ写真なども上げてみた。時事的な、たとえば憲法問題など、発言したいテーマもあったが、それらは極力避けた。ただ、戦争と平和に関しては、平和護持の立場から敢えて発言した。大学の不祥事と言えるものについても、社会に対する大学の責任という立場から、公式ホームページとはまた別途に遺憾の意を表すことにはためらわなかった。私のブログがどの程度見ていただけたか、あまり承知してはいないが、学長へのいささかの親しみを持っていただいた方が少しでもおられたなら望外の幸せである。

6 年という長きにわたって本東北学院大学学長として働くことが出来たことを光栄に思う。建学の土台であるキリストの支えなくして、ここまで歩むことは出来なかった。感謝あるのみである。そして外部から飛び込んできた学長を快く迎え、詳細公正な情報を教え、改革をともに論じ、実行を支えてくれた副学長総計 6 名、各学部長、各部長、総務課はじめ全職員スタッフ、教授会構成員、学生諸君、に改めて深甚の謝意を表するものである。

2 改革のあゆみ

2-1 ガバナンス改革

① 教学改革推進委員会の設置

本学は、2014年学校教育法の改正に先立って、学長の教学マネジメント体制を強化し教学上の改革を強力に推進するための組織として、2013年12月に関係規程を整備し、「本学の全体に関わる教学改革の基本方針を立て、学内関係機関にその具体的実施を指示し、又は必要な措置を講じることにより、本学における不断の教学改革を推進することを目的とする」（第2条）教学改革推進委員会を設置した。この委員会は、学長、副学長、学部長、学長室長、総務部長から構成され、大学の教学事項に関わるあらゆる問題を扱い、改革の方向性を示し、学内関係組織に具体的検討を指示する、いわば大学改革の司令塔の役割を果たすものである。また、この委員会には、宗教部長、学務部長、学生部長のほか、法人役員（常任理事、事務局長）、広報部長、理事長特別補佐（労務支援担当）、監事も常時陪席し意見交換している。これにより、これまでやや遅れがちであった本学の教学改革は、学長のリーダーシップのもとに大きく進捗することになった。

2014年度から2018年度までこの委員会において協議され実現した主な事項をいくつか挙げれば、以下のように示される。①GPA制度の導入、②履修証明プログラムの導入、③学生総合保健支援センターの設立、④工学部改組、⑤教育学科新設、⑥授業改善のための学生アンケートによる授業改善と学長表彰制度の創設、⑦インスティテューショナル・リサーチ（IR）課の創設、⑧工学部及び英文学科を除く全学科定員増と編入学定員の見直し、⑨特任講師制度の導入、⑩教学に関する懇話会の設置、⑪Learning Management System（manaba）の導入、⑫入学前教育の全学実施とそれに基づく基礎学力テストの実施、⑬副学長の増員、⑭英語教育改革と英語教育センターの設置、⑮予約継続型給付奨学金（3L奨学金）の創設、⑯英語外部試験利用入試の導入、⑰アドミッション・オフィスの設置、⑱3つのポリシーの改定と学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）の策定及び授業における成績評価の方針の策定、⑲卒業後アンケートの実施、⑳西南学院大学との相互評価に関する協定の締結、㉑東北学院大学の将来像。なお、これら以外に継続的に協議している事項は数多くあり、例えば、①キャンパス整備と関連した学生寮の整備、②グローバル化対応戦略、③退学者対策、④スポーツ改革、⑤入試改革などがある。

② 学校教育法改正に伴う学内組織の改定

2014年6月に「学校教育法の一部を改正する法律」、8月に「学校教育法施行細則の一部を改正する省令」に対応するため、9月に理事会の下に学校教育法改正に伴う規程等整備委員会を設置し、2014年12月に答申が行われた。その内容は、1. 学長の最終決定権の担保と副学長の権限、2. 教授会の設置とあり方、3. 教授会の審議と学長の参酌、4. 教授会の審議事項、5. 教員人事と学長権限、6. 学生懲戒手続きとなっている。具体的には、教授会の

権限を見直し審議機関として位置づけ、従来の全学教授会を廃止し、新たに全学協議会及び全学教員会議を設置した。こうした組織改革を経て、学長の決定権限が明確にされ学長ガバナンスが十全に機能することになった。同時に2014年度から理事長・学長の兼任体制となり、法人・大学の一体化が進み、一層のガバナンス体制が構築されることになった。

また、2015年3月に学長を委員長とする部長会の規程を改正し、同年4月より従来陪席であった法人役員（理事長、院長、常任理事、法人事務局長）を部長会の正式メンバーとし、意志決定における法人と大学の一層の一体化を図った。さらに、2016年9月より各事務部門の課長を陪席させ、情報共有にも努めている。

2-2 中長期計画の策定と実施

① 中期達成目標 2013-2018

本学は、今後5年をめどに全学的に取り組むべき重点目標を明確にした「東北学院大学中期達成目標 2013-2018」を学長の主導の下に2013年10月に策定した。内容は、7つの大項目、24の小項目からなる。大項目は次のとおりである。

- 1) 建学の精神に基づくキリスト教教育をさらに充実させる。
- 2) TG ベーシックを中核とする新教養教育課程を着実に実施する。
- 3) 学生の主体的学修、アクティブ・ラーニング促進にむけて、教育の質的転換を推進する。
- 4) グローバル化などの社会的変化を見据え、学部学科、カリキュラムのあり方を見直す。
- 5) 地域社会と協働し、震災復興に貢献する人材育成、教育研究活動を推進する。
- 6) 土樋キャンパスの整備を進め、キャンパス統合計画を立案する。
- 7) 大学の社会的評価を高めるための行動計画を立案し、その成果を戦略的・組織的に広報する。

以後、次年度にその進捗状況をチェックし次の重点項目策定に繋げるために、学長による振り返りとそれに基づく新たな重点項目の公表という仕組みが構築された。これによって、中期計画のPDCAサイクルが実現することになった。以下、2014年度の振り返りを示す。

- ①キリスト教教育に関して、東北学院高等学校、東北学院榴ヶ岡高等学校との一貫化を進め、それを前提に、TG 推薦入学者に対しては特別措置を取ることとした。
- ②平成27年度から実施される文学部及び教養学部の新教育課程においても、先行4学部と同じTG ベーシックの授業科目を置いた。
- ③FD 研修のテーマとしてアクティブ・ラーニングを繰り返し取り上げたほか、土樋キャンパス北地区新校舎（仮称）に整備するラーニング・コモンズの運営方法等について検討した。
- ④「グローバル化に対応した教育に関する基本方針」を策定したほか、工学部の学科改組に着手した。

- ⑤「地（知）の拠点整備事業（COC）」に申請し採択された。また、その実施に対応するため、学長室に地域共生推進課を新設することを決定した。
- ⑥土樋キャンパス北地区新校舎（仮称）の工事は順調に進められている。
- ⑦法人部門の企画委員会と協力して「新しい TG ブランドの構築」に向けた戦略の検討を開始した。

2015 年度の重点項目及びその振り返りについては以下の通りである。

1. 2018 年度設置を目指し、魅力的な新学部を構想する。

学部学科再編については、現在構想中である。まずは、学長、副学長、特別補佐を中心とする会議においてテーマを設定し、それに基づいて各学部学科がどのように将来を構想しているのかを問うことから開始した。各学部からの報告を踏まえて具体的に進めている。

目下のところでは、工学部の学科再編として 2017 年 4 月に電気電子工学科（名称変更）と情報基盤工学科（届出）の新設を決定した。4 学科体制は変わらず、各学科の定員はそれぞれ 110 名となる。また、2018 年度に文学部に定員 50 名の教育学科を設置する計画を進めている。英語のできる小学校教員の養成を行う小学校教員養成課程である。併せて中・高の英語教員免許が取得可能となる。これは、文部科学省が 2020 年から小学校において英語を教科化することを受けての取り組みであり、従来からの「英語の学院」としての伝統に基づく「試み」である。

2. 東北学院大学のプレゼンスを高める。

- (1) 広報手段の多角化
- (2) 地域への貢献
- (3) 外部資金獲得による研究活性化

(1)では、広報の一元化がある程度実現し経費も増加して、メディアへのアピール度も増している。結果的に今年度の志願者数は 404 名増加した。

(2)では、株式会社ロフトやベガルタ仙台などと提携するとともに、COC、COC+の採択によって地域貢献を進めている。これらの宣伝効果は大きく、また教養学部の金菱清教授による『霊性の震災学』はマスコミに大きく取り上げられた。

(3)では、研究環境改善委員会を設置し、改善に資するように間接経費の扱い方の変更や個人研究費の使用内規の改正を行った。科研費の申請率は横ばいであった。研究不正防止については、3 月の全学教員会議において学術振興会参事による講演会を開催した。

3. 学生のキャンパスライフ支援の強化

- (1) 学生のためのキャンパス整備
- (2) 障がいを持つ学生のための支援組織

(1)では、職員によるコンシェルジュ（泉キャンパス）活動が新生に大きく役立っている。また、土樋キャンパスの中央図書館に「アクティブ・コート」を設置し、学生の自主的学修を促す仕組みを整えた。多賀城キャンパスには工学部武道場を新設した。土

樋キャンパスの新棟「ホーイ記念館」にはラーニング・コモンズが設置され、本格的に2016年9月より稼働する。特任助教を2名新規採用し、専任職員2名、嘱託職員4名の体制でスタートする。さらに、施設拡充委員会において老朽化した施設の改修・改善に努めることにしている。生活面では学生寮として共立メンテナンスと協力して一定数の提携寮を仙台市内に用意した。

(2)では、平成26年度の学長裁量経費による職員の研究成果を聞くことができた。成果は次の4件である。①離籍者（退学・除籍）を減らす方策の調査・研究、②東北学院大学における障害学生支援体制の拡充及び整備についての研究、③工学部女子学生による多賀城キャンパス改善調査、④宮城県以北（北海道及び東北地方）からの受験生確保とキャンパスの国際化。②については2016年度から障害者差別解消法の施行に伴い、方策を考えなければならない喫緊の課題であった。それを踏まえて、2016年4月より「学生総合保健支援センター」を設置することとなった。また、泉キャンパス、多賀城キャンパスにおいて、障がいのある学生が入学してきたこともあり、キャンパスのバリアフリー化を進めるとともに、別室で受講可能とするシステムも導入した。

4. 建学の精神の振り返り

『東北学院史』の完成に向けて東北学院史資料センターの歴史編纂委員会で作業が進んでいる。『東北学院史』は自校史教育のテキストとして活用するとともに、教養教育科目として設置する計画である。大学礼拝について、出席学生数が堅調に推移している。創立130周年記念事業として、土樋キャンパス礼拝堂のステンドグラスの来歴調査やその結果の発表講演会、クリスマス・イルミネーションの強化等も行われる予定である。

5. 教育の質的転換の推進

文部科学省の私立大学等改革総合支援事業（タイプ1「教育の質的転換」、タイプ2「地域発展」）のポイントをクリアし補助金を獲得した。タイプ1においてクリアした点は、シラバスのチェック体制、学生による授業評価結果の活用、教員の評価制度の設定、GPA制度の導入等である。なお、IRの充実、アクティブ・ラーニングの実施、ナンバリング、教育改革に取り組む予算措置、入試改革等が残されている。タイプ2では、教育課程の編成における自治体・地元産業界からの意見聴取、雇用保険法に基づく教育訓練給付制度の対象講座の開設、社会人学生の育児支援等が課題として残されている。グローバル化対応としては、今年度に本学の国際交流の基本方針を策定した。

FD研修会として、7月にはディープ・アクティブラーニングをテーマに京都大学の松下佳代教授の講演会を開催した。また、11月にはTGベーシックの振り返りを行い、検討課題を抽出し改善に向けて進むことにした。教育の質的転換の具体的な方策としての諸手段、例えばGPAの活用、ポートフォリオ、ルーブリック、PBL、ラーニングアウトカム評価等の導入については検討中である。教育の充実という点では、ラーニング・コモンズの設置とともに、英語教育センターの設置が挙げられる。特任講師を3名採用し、英語教育の底上げを図ることにした。また、履修証明プログラムとして、2015

年度前期に「地域コーディネートスキルプログラム」を実施した。中高大一貫教育の実施に向けての第一歩として、東北学院高等学校と東北学院榴ヶ岡高等学校からの入学予定者に対して、キリスト教と情報の2科目について大学入学後の上級クラス編成のためのテストを行った。

この「東北学院大学中期達成目標 2013 ～ 2018」は、2015年度に「TG Grand Vision 150」を設定し、その第Ⅰ期の開始年度を2016年度と定めて重点項目を明示したことにより、「TG Grand Vision 150」の中に発展的に解消されることになった。

② 中長期計画「TG Grand Vision 150」の策定と第Ⅰ期中期計画の進捗状況

日本の私立学校は、少子化の時代にあつて、今、大変厳しい状況に直面している。少子化の影響は、2018年度から大学受験生の激減によって現実となるが、中学校・高等学校受験生の減少はすでに前倒しで、それぞれの学校に押し寄せている。本院も、このような危機的状況に対峙し、存続と発展を図るために、組織体制の見直しと新組織の構築を行った。その一環として、2014年度に法人事務局庶務部に新たに企画課を設置した。また、同時に設置した東北学院企画委員会に対して、理事長より当面の課題として新たな中長期事業計画立案の指示があつた。これを受けて、同委員会では、各設置学校における現状と課題の点検を行い、2015年7月に「TG Grand Vision 150」（案）を策定し、理事長に答申した。この「TG Grand Vision 150」は、7月23日の理事会で承認された。これは、20年後の創立150周年に向け、本院がさらに発展していくことを目指したものである。また、これまでの伝統の中から新しい東北学院を創造することを目指しており、それが基本戦略としての「新しいTGブランドの確立」である。東北学院が現在持っているブランド力に新しい要素を付加し、東北学院のブランド力をさらに強化していこうというものである。その中核となるのは、「教育の質保証」と「学生・生徒第一主義」であり、「地域や社会のニーズへの対応」である。

2015年8月末には各設置学校及び各部署から「TG Grand Vision 150」の理念に基づいて、「第Ⅰ期中期計画（2016～2020）（素案）」が企画委員会に提出された。企画委員会は、それらを整理し、学長、両校長及び園長のガバナンスが十分発揮されるような過程を経た上で、「第Ⅰ期中期計画（2016～2020）（案）」を策定した。この第Ⅰ期中期計画は、2016年3月3日の理事会において承認された。

2016年度は、「TG Grand Vision 150（東北学院中長期計画）」に基づく「第Ⅰ期中期計画（2016～2020年）」の実行初年度にあたり、その工程を踏まえ、第2年度にあたる2017年度実行計画の策定を行った。具体的には、各部門において第Ⅰ期中期計画に基づき策定した2017年度実行計画案について、TG Grand Vision 150の基本構想の柱となる5つの領域ごとに取りまとめ、東北学院企画委員会の審議・承認の後、「2017年度事業計画（企画委員会案）」として財務会議に回付し、2017年度予算編成に係る重点項目となった。また、2016年度事業計画の検証については2016年8月に提出された2016年度実行計画に基づ

き、改めて各部門において進捗状況の確認を行い、東北学院企画委員会で集約し、点検・評価を行っている。

大学部門では、各年度の重点項目の策定とその振り返りを従来の「中期達成目標 2013-2018」と同様に、年度当初 4 月に開催される全学教員会議において学長が重点項目を公表し、年度末 3 月に開催される全学教員会議でその振り返りを行う仕組みを構築し、P D C A サイクルを機能させている。さらに、2019 年度からは、2018 年度末の学長の重点項目振り返りを各学科から選出された教員によって客観的にチェックする仕組みを構築した。2019 年 4 月に開催される全学教員会議において教員による重点項目再評価結果が報告されることになっている。これによって P D C A サイクルの一層の機能強化が図られることになった。以下に、これまでの各年度の重点項目とその振り返り（学長による評価）を示す。

2016 年度

重点項目（計画）の進捗状況について、松本学長は 2017 年 3 月 15 日開催の全学教員会議において資料を配付して、以下「→」のように、A（達成）、B（半ば達成）、C（未達）評価を付し総括した。

1. 教育・研究

文科省指示に対応し、ディプロマ・カリキュラム・アドミッションの 3 つのポリシーを策定。→3 つのポリシーについては 2 月に完成をみた。A 評価である。

①教育の質的転換

1. 学生の満足度を増す。学生による授業評価（総合評価）平均 4 以上
2. 建学の精神を守り、深める。大学の礼拝出席者総数延べ 130,000 人
3. 『東北学院史』の執筆を年度内に完成させる
4. カリキュラムのスリム化を検討
5. 「入学前教育プログラム」の検討と一部実現

→教育の質的転換では、建学の精神を守り、深めるという点で、大学の礼拝出席者総数を目標 13 万人としていたが延べ 9 万人弱に留まったため、B 評価とした。引き続き礼拝出席を推し進めて頂きたい。学生だけではなく、教職員の礼拝出席を強く求めたい。授業改善のための学生アンケート結果は全学平均で 4 点を超えたので A 評価である。『東北学院史』はパイロット版が年度内に完成した。LMS (Learning Management System : manaba) は経済学部で先行導入し、その結果、学修成果が大きいことから 2017 年度に全学導入することにした。また、「入学前教育プログラム」についても経済学部で LINES を先行導入したことを受けて、2017 年度から全学導入することになっている。総じて順調に計画を進めることができている。

②グローバル化の推進

1. 海外提携大学を新たに 2 校
2. 本学からの派遣留学生を 15 名（長期。現在 10 名）

3. 海外からの受け入れ留学生を 30 名（現在 20 名）

→グローバル化の推進では、海外提携大学として台湾の世新大学の 1 校、本学からの派遣留学生は 14 名、受け入れ留学生は 23 名であり、目標には若干届かなかったため、B 評価である。

③研究支援活動の充実・強化

1. 科学研究費等の獲得推進。教員の 50%が科研申請（現在 30%）

2. 私立学校改革支援事業への対応強化。タイプ 1, 2 を確実にとり、タイプ 3（企業との提携）獲得を実現

→研究支援活動の充実・強化では、科学研究費等の獲得推進を図り採択を増加したかったが、実際には教員の 3 割しか科研費を申請しておらず、C 評価とした。積極的な申請に向けて猛省を促したい。私立大学等改革総合支援事業については、タイプ 1（建学の精神を生かした大学教育の質向上）、タイプ 2（特色を発揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり）を獲得したが、タイプ 3（産業界など多様な主体、国内の大学等と提携した教育研究）を獲得できなかった。B 評価とした。

2. 社会貢献

①COC 事業の推進と成果の還元

②COC+事業の具体化

③130 周年記念事業としての公開イベント

④ホーイ記念館の地域開放事業

⑤ボランティア活動の「見える化」

→重点項目については総じて達成できており、とりわけ、ホーイ記念館の地域開放事業では、街の通りの景観が変わり良くなったなどのことから、A 評価とした。

3. 教育環境

①市立病院跡地購入計画を進める

②2, 3, 4 号館の解体撤去に順次着手

③以上と並行して、土樋五橋＝都市仙台中心の大学としてのキャンパス構想の策定

④学生支援

1. ホーイ記念館ラーニング・コモンズのスムーズな始動

2. 学生総合保健支援センターを十全に機能させる

3. 就職キャリア支援の一層の強化。卒業生の就職先情報の完全な把握。COC+の目指す「地元就職率 10%上昇」の実現

4. 退学者数の減少。2014 年度から 15 年度は 30 人減（268 人）。16 年度はさらに 20 人減を目指す。

5. 学生のキャンパス滞留時間を拡大する（現在 5 時間→6 時間）

6. スポーツ振興を検討

→①市立病院跡地購入については、計画通り取得することができたため、A 評価とした。

②キャンパス整備に向けて着実に進めていくが、2、3、4号館の解体撤去については予定を変更している。④学生支援では、諸施策が順調に進んでおり、退学者数が40名減少したため、A評価とした。

4. 組織運営

①文学部教育学科（小学校教員養成・英語教育重点化）設置推進

②学科再編・新学部構想。情報収集と学部の枠を超えた構想検討

③IR組織の設置

④事務組織の見直し。情報共有・連絡の迅速化

→①文学部教育学科（小学校教員養成・英語教育重点化）設置推進では、文科省への設置申請を行う段階まで来たことから、A評価とした。②学部学科の再編についてはC評価である。③IR組織の設置はIR課を設置したことからA評価とするが、どのようにIR課を機能させるかは今後の課題である。

5. 学生募集・広報

①大学入試改革

1. Web入試全面採用。2017年度入試受験者数（2016年度：10,933人）10%増、受験生増加のための戦略を教学改革推進委員会レベルで検討

2. 広報課と連動した募集広報戦略の展開

②東北学院大学のプレゼンスの上昇

1. メディア業者との対話継続

2. ヴィジュアルな、あるいは書物による、本学の具体的研究成果をより積極的に発信

→①大学入試改革では、WEB出願を全面採用し、2017年度の入試受験者数が10%増（約1,200名増）となったため、A評価とした。②東北学院大学のプレゼンスの上昇では、十分な方策を打ち出せておらず、C評価とした。また、ヴィジュアルな、あるいは書物による、本学の具体的研究成果をより積極的に発信するでは、はっきり「見える化」されていないため、C評価とした。

2017年度

前年度と同様に、以下の重点項目の進捗状況について、松本学長は2018年3月16日開催の全学教員会議において以下「→」のように、A（達成）、B（半ば達成）、C（未達）、D（未着手）評価を付し総括した。

2017年度重点項目

「TG Grand Vision 150」の基本計画に沿って、大学の改革に努め、発展を目指す。最大の課題として「アーバンキャンパス」整備事業を掲げ、土樋キャンパスの整備、五橋キャンパスへの既存キャンパスからの移転・統合計画を策定する。また、予定されている公益財団法人大学基準協会による認証評価への対応も重要である。併せて、大学が諸分野にどのような姿勢を持っているかを示す「総合マニフェスト」を策定し、冊子としてまとめたい。→法

人と一体化した「大学キャンパス整備推進本部」及び「キャンパス整備準備室」によりほぼ順調に進み、五橋キャンパスの基本設計が完成した。A 評価である。

→公益財団法人大学基準協会による認証評価を受審し、夏から秋にかけて作業に協力し 10 月に現地調査、年が明けて「適合」認定を受け、社会貢献、学生ボランティア、震災復興支援など 5 点を特に評価された。A 評価である。

→2018 年 3 月に『東北学院大学の基本方針 2017』として完成させた。A 評価である。

以下、5 つのドメインごとに重点項目を示し、数値目標も適宜設けるものとする。

(1) 教育・研究

①建学の精神に基づくキリスト教教育の継続→全体的には B 評価である。

a) 高大接続検討会議（中高大一貫教育事業実施委員会）の継続→C 評価である。

・ 高大連携・高大接続教育の推進による、中・高・大一貫キリスト教教育プログラムの実施→検討委員会が開催できず進捗しなかったため、C 評価である。

・ TG 推薦入学者の「キリスト教学」授業の再検討→現在授業自体不振でその原因を調査し、改革を計画中であり、B 評価である。

b) 大学の授業科目「キリスト教学」の検証→若干授業評価は上昇した。C 評価である。

c) 礼拝出席者数 年間 10 万人復帰→2016(平成 28)年度の出席者が 9 万人台であったが、2017(平成 29)年度は 10 万人台に達した。A 評価である。

d) 法人と協力し、教学改革の一貫として、キリスト教教育に資するための「宗教センター（仮称）」の設置検討を開始→院長から意見具申があり検討中である。A 評価である。

②教育の質的転換

a) ICT 教育、e-learning (Learning Management System) の全学的な展開→manaba が普及し、ホーイ記念館ラーニング・コモンズが活況である。A 評価である。

b) 学修成果を多角的・客観的に測定するための方法の採用・開発（外部英語検定試験を入試科目に導入）→外部英語検定試験を文学部で導入・実施した。B 評価である。

カリキュラム・マップの作成 授業科目のナンバリング→完成、実施した。A 評価である。

c) 大学院教育改革の推進

・ 早期卒業プランの策定 大学院生の増加→早期卒業は完全ではないが一部で実施している。大学院生は微増したが、文系で不振が続く。C 評価である。

d) 教員の資質向上活動（FD）の継続実施→活発に実施し、ほぼ全教員が出席した。A 評価である。

e) 策定された 3 つのポリシーと入学制度・授業カリキュラム等の整合性検証→学務部で一部着手した。B 評価である。

f) 大学入試改革アクションプラン策定（2017 年度に出された文部科学省の入試構想に対応）→教学改革推進委員会に WG を設置し鋭意検討中である。C 評価である。

③グローバル化対応の推進

a) 私立大学等改革総合支援事業「タイプ 4」申請に踏み切る。そのための諸施策実施→あ

る程度実施するもポイントは低い。B 評価である。

b)受け入れ留学生増加に向けた支援体制の強化→受け入れ交換留学生は、2016 年度 21 名から 2017 年度 28 名に、受け入れ私費留学生は 2016 年度 7 名から 2017 年度 10 名に増加した。B 評価である。

・英語教育の充実（英語による授業の増設）、留学生寮の本格的検討→英語教育センターを設置し、特任講師を採用して、初年次英語教育のクラス編成替え等を行ったことにより成果が上がっている。そのほかは未着手である。C 評価である。

c)海外留学の促進及び学生派遣に係る支援体制の強化→長期派遣交換留学生は、2016 年度 14 名から 2017 年度 19 名に増加したが、短期派遣留学生は、2016 年度 83 名から 2017 年度 62 名に減少した。B 評価である。

d)協定校の増加と目標値の設定（新たに 1 大学）→韓国の東義大学、ソウル神学大学校との 2 校と国際交流協定を結んだ。A 評価である。

④教員の研究支援体制の強化

a)教員評価制度の構築→未着手であり、D 評価である。

b)学長研究助成制度に加えて外部資金獲得の推進へ（教員の科研費申請率 50%）→2016 年度と変わらず、30%のままであった。D 評価である。

c)私立大学研究ブランディング事業の着実な推進→ステンドグラスの修復が完成し、関連するシンポジウムや一般公開の水曜礼拝（夜間）を開催した。A 評価である。

(2) 社会貢献

①公開講座・シンポジウムの充実と広報の強化。これら諸事業の全学的・社会的広報強化。成果報告の「見える化」→ほぼ活発に行われた。メディアでもしばしば取り上げられた。A 評価である。

②「地(知)の拠点整備事業(COC)」・「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」による地域社会との連携及び貢献→COC に対する文部科学省の評価は B であった。COC+ も展開が不十分な面があった。B 評価である。

③ボランティアセンター（仮称）の設置・展開→未着手であり、D 評価である。

④『震災学』等、震災関連事業の見直し。新規事業の検討→『震災学』については公益財団法人大学基準協会による認証評価において、また外部評価委員会からも高い評価を得て、継続を決定した。A 評価である。

⑤履修証明プログラムその他（小学校教員のための中学英語教員免許状取得支援）の社会貢献事業の展開→履修証明（CSW）プログラムは定着した（修了者 14 名）。中学校英語教員免許状取得者は 19 名であった。宮城県より感謝される。A 評価である。

(3) 教育環境

①法人と一体となつての総合キャンパス整備事業に伴う土樋キャンパスの整備、五橋キャンパスへの既存キャンパスからの移転・統合計画の策定と推進

a)総合キャンパス整備事業の展開→冒頭で言及したように、A 評価である。

b)土樋キャンパスラーニング・コモンズの効果的な運営（TG ベーシック、ことに日本語能力向上の支援等）→特任講師を活用し、効果的な運用が進んだ。A 評価である。

c)土樋キャンパス諸施設設備の改善→自動ドア化を行い、トイレを刷新した。B 評価である。

②学生支援

a)給付奨学金の更なる充実→予約型給付奨学金制度を創設し、2018 年度から実施した。A 評価である。

b)退学者減少のための更なる対策→退学者数が暫定ながら 276 名から 245 名に減少した。A 評価である。

c)学生総合保健支援センターの充実と障がい者支援の強化→A 評価である。

d)就職キャリア支援 アクションプラン策定→2017 年度就職率はこれまでで最高の約 97%であり、諸支援事業は活発に行われたものの、アクションプランは未着手であり、B 評価である。

e)大学スポーツ活動についてのアクションプラン策定→現状を分析したのみであり、C 評価である。

(4) 組織運営

①教学組織・運営の見直し

a)小学校教員（英語）養成を目的とした教育学科設置の準備→文部科学省からの設置認可を得て開設した。A 評価である。

b)新学部・学科構想の策定→副学長を座長とする WG による検討を開始した。B 評価である。

(ア)専門職業人養成、資格授与の種類拡大→未着手であり、D 評価である。

(イ)教員基準値の見直し→未着手であり、D 評価である。

(ウ)大学院研究科の強化、改組を含む組織の見直し→未着手であり、D 評価である。

c)産学連携推進センターの再編と強化→検討を開始した。B 評価である。

d)副部長制の見直し→検討を開始したものの進捗していない。C 評価である。

②事務組織の見直し

a)職員の資質向上活動（SD）の強化→SD 活動を活発に行っており、公益財団法人大学基準協会の認証評価では高い評価を受けた。A 評価である。

・学長裁量経費による職員研究の継続と成果の還元→応募はあったが内容を検討した上で不採用とした。更なる応募を期待し、B 評価である。

b)情報収集・分析による政策提言（IR）機能の強化→A 評価である。

・データベースの構築 エンロールメント・マネジメントの実施→未着手であり、C 評価である。

c)災害対策の強化（危機管理マニュアル改良）→B 評価である。

d)非専任職員の効果的配置による事務組織の強化→B 評価である。

e)『2016 年度点検・評価報告書』における改善方策の実施→改善に向けて着実に進めている。A 評価である。

(5) 学生・生徒募集、広報

- ①文部科学省による高大接続にかかる大学入試改革に対応する本学入試問題の検討（英語試験の一部外部検定利用。入試問題チェックを外部委託）→一定程度実現した。B 評価である。
- ②アドミッションズ・オフィスの設置→規程改正し、アドミッションズ・オフィスとアドミッション・オフィサーを設置した。A 評価である。
- ③大学に関する多角的広報活動の推進→B 評価である。
 - ・オープンキャンパスの強化、充実→A 評価である。
- ④メディアの革新に対応した新しい広報の開発→C 評価である。
 - ・TG 広報アクションプランの策定→未着手であり、D 評価である。

2018 年度

前年度と同様に、以下の重点項目の進捗状況について、2019 年 3 月 15 日開催の全学教員会議において以下「→」のように、A（達成）、B（半ば達成）、C（未達）、D（未着手）評価を付し総括した。

2018 年度重点項目

<全体的重点項目>

- a.本年度も TG Grand Vision 150 の基本計画に沿って、大学の改革に努め、発展を目指す。→A 評価である。
- b.東北、仙台に位置し、地域と共生し貢献する大学としてのプレゼンスを高める。→A 評価である。
- c.「キラリと光る地方大学」として、本学独自の存在価値を示し、かつ本学にしかできない地域貢献を実践し、発信する。それを視野に入れた私立大学等改革総合支援事業（タイプ 5「プラットフォーム形成」〈大学間、自治体、産業界との連携〉）に取り組む。→C 評価である。
- d.「アーバンキャンパス」構想を進捗させる。法人と一体となって五橋キャンパスの実施設計を進め、泉、多賀城キャンパスからの移転事業計画を進める。土樋キャンパスの整備について検討を継続する。これらについて教職員への情報提供に配慮する。→A 評価である。

→総じて A 評価が付いているが、大学のキャンパス整備や大学としてのプレゼンスを高めるなどについては、それなりに進んだのではないかという評価だが、私立大学等改革総合支援事業（タイプ 5「プラットフォーム形成」〈大学間、自治体、産業界との連携〉）については、今年度は申請できなかったため、C 評価となっている。COC は 2018 年度で終了し、2019 年度には COC+が終了するが、そういうものを全部まとめた上で、2020 年度

どのようにするか、このプラットフォームを来年度中に申請する方向で進めることとなる見込みである。

<領域別重点項目>

以下、領域別重点項目の実施にあたって各部署は、なるべく数値目標を設定するなど、達成度が検証可能なものとする。→D 評価である。これは実施にあたって各部署は、なるべく数値目標を設定するなど、達成度が検証可能なものとするということであったが、実は各部署に対する指示ができなかったため、具体的な進捗が見えなかった。ただし、法人の企画委員会で毎年度 TG Grand Vision 150 に基づくそれぞれの重点項目については、各部署から提出された後、チェックを行っているので、そういう意味では PDCA は機能している。

(1) 教育・研究

①各学校一貫の、建学の精神に基づくキリスト教教育

- a) 高大接続検討会議（中高大一貫教育事業実施委員会）の継続→B 評価である。
 - ・TG 推薦入学者の「キリスト教学」（アドバンストクラス）の再検討→C 評価である。
- b) 1 年次必修、3 年次選択必修のキリスト教関係科目の検証と改善方策の検討→A 評価である。
- c) 法人と協力して、キリスト教教育に資するための「宗教センター（仮称）」の設置検討を継続→C 評価である。

②教育の質保証

- a) 学位授与の方針に対応した学修成果を多角的・客観的に測定するための方法・指標（ポートフォリオ、ルーブリックなど）の開発と運用、そのための研修会実施→C 評価である。ポートフォリオ、ルーブリックなど様々な教育の高度化などが進められなければならなかったが、今年度は十分進んでいない。
- b) 大学院教育改革の推進（大学院学生の増加）→C 評価である。
- c) 教員の資質向上活動（FD）の改善、実施内容の新企画検討→B 評価である。
- d) 現在文科省で進行中の大学入試改革に対応した本学の入試プランの策定→C 評価である。
- e) TG ベーシックセンターの設置検討、TG ベーシックを含む非専門科目の教育課程及びその運用の見直し→C 評価である。
- f) 大学基準協会認証評価への対応強化と協会認証評価委員の選出・派遣→A 評価である。

③補助金事業の推進と将来計画戦略

- a) 「地（知）の拠点整備事業（COC）」補助終了後における事業の検討→B 評価である。「地（知）の拠点整備事業（COC）」は、補助終了後も継続実施する。
- b) 私大研究ブランディング事業の着実な推進→A 評価である。私大研究ブランディング事業に関しては来年度も継続することになった。
- c) 私立大学等改革総合支援事業への着実な対応→A 評価である。私立大学等改革総合支

援事業のタイプ1については今年度補助金が獲得できた。

④グローバル化対応の推進→新たな海外の大学との連携として、ドイツと韓国との連携ができたので良かったのだが、他の部分が具体的に進んでいないので、グローバル化に対する推進策を来年度は具体的に考える必要がある。

a) 本学の「国際化の基本方針」に基づく新プラン検討→C 評価である。

b) 受け入れ留学生増加に向けた支援体制の強化→B 評価である。

・英語教育の充実（英語による授業の増設）→B 評価である。

・留学生寮の本格的検討→D 評価である。

c) 海外留学の促進及び学生派遣に係る支援体制の強化→B 評価である。

d) 新たな海外大学との協定→A 評価である。

e) ホーイ記念館の国際交流スペース機能の再検討→D 評価である。

④教員の研究支援体制の強化

a) 教員評価制度の構築→D 評価である。

b) 外部資金獲得の推進（教員の科研費申請率 50%）→D 評価である。外部資金獲得の推進として、科研費申請率 50%の目標を立てたが、達成できていない。

(2) 社会貢献→ここは大学基準協会の認証評価でも高い評価を受けたところだが、重点項目として今までやってきたことを見直し、今後、新しいものにどのように取り組むかが課題であったが、具体的に展開できていないので B 評価である。

①公開講座・シンポジウムの見直しと広報の強化→B 評価である。

・「震災と文学」継続。成果が不十分な企画の見直し→B 評価である。

②「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+（プラス）プラス+）」による地域社会との連携及び貢献。特に地元就職率の増加に向けた取り組みの強化→B 評価である。

③ボランティアセンター（仮称）の設置・展開の検討→D 評価である。ボランティアセンター（仮称）の設置も計画されていたが、まだ準備が進んでいない。

④『震災学』等、震災関連事業の見直しと新規事業の検討→C 評価である。

⑤履修証明プログラムその他（CSW、小学校教員のための中学英語免許状取得支援等）の社会貢献事業の継続→A 評価である。

(3) 教育環境

①アーバンキャンパス構想の推進→アーバンキャンパス構想の推進では、五橋キャンパスの校舎の建設に向けてかなり進んだという状況にある。

a) 五橋キャンパスにおける工学部教育設備の検討→A 評価である。

b) 土樋キャンパス諸施設設備の改善→B 評価である。土樋キャンパス諸施設設備の改善では、特に5号館・6号館のトイレがかなり改修、改善され、バリアフリー化も進んでいる。

②学生支援

a) 給付奨学金の検証と改善→A 評価である。給付奨学金に関しては、新しい仕組みが導

入されたこともあって、改善が進んだ。

- b) 「学生の満足度」に関する検証と改善→B 評価である。
- c) 大学スポーツ活動に関するアクションプランの策定→B 評価である。
- d) 学生表彰制度や正課学修との連携による学生の主体的諸活動活性化策の検討→B 評価である。
- e) 退学者減少対策を継続する→B 評価である。退学者減少対策を継続するでは、2018 年度から休学した際の学納金を入学金と同じにする形で引き下げている。

(4) 組織運営

① 教学組織

- a) 新学部・学科構想の策定→B 評価である。新学部・学科構想については、徐々に検討が進められている。
- b) 専門職業人育成、資格授与プログラムの拡大・強化→D 評価である。
- c) 教員基準値の見直し→A 評価である。教員基準値の見直しについては、2018 年度中に全学組織運営委員会を開催し、原案を確定した。2019 年 4 月の教授会議題となる。
- d) 大学院研究科の改組を含む組織の見直し→D 評価である。大学院研究科の改組を含む組織の見直しについては、なかなか進まず、定員を充足している研究科が少ない。
- e) 産学連携推進センターの再編と強化→D 評価である。
- f) 副部長制度の見直し→D 評価である。
- g) センター、研究所、資料室の再編の検討→C 評価である。

② 事務組織

- a) 職員の資質向上活動 (SD) の継続・強化→A 評価である。職員の資質向上活動 (SD) については、大学基準協会の認証評価でも高い評価を受け、継続的に人事部で進めていくことになる。また、学長裁量経費によって、職員業務研究を行っているが、その中で成果が出ているものもある。
 - ・学長裁量経費による職員研究の継続と成果の還元・活用→C 評価である。
- b) IR 課の機能強化→B 評価である。IR 課の機能強化については、機能が向上してきているので、これから実績が上がっていくものと期待している。
 - ・統合データベースの構築 エンロールメント・マネジメントへの着手→B 評価である。
- c) 災害対策の強化。危機管理対応マニュアルの整備→B 評価である。

(5) 学生・生徒募集、広報→学生・生徒募集、広報については、アドミッションズ・オフィスもできて、入試制度改革についても議論している。全体的には、広報戦略についても進んではない。

①本学の「キラリと光る」カリキュラムの選定と発信→B 評価である。

②アドミッションズ・オフィスの整備、アドミッション・オフィサー機能の本格化→A 評価である。

③入学定員厳守時代における受験生確保戦略の構築→B 評価である。

- ④大学に関する多角的広報活動の推進・強化→C 評価である。
- ⑤メディアの革新に対応した新しい広報の策定・促進→C 評価である。

2-3 アーバンキャンパス構想～大学総合キャンパス整備事業の推進

① 大学総合キャンパス整備構想の策定

2013年3月7日開催の理事会において決定した「東北学院大学総合キャンパス整備基本構想」は、現在の3か所に分散している大学キャンパスを仙台市中心部にあり、アクセスの良い土樋キャンパスを核とした土樋地区にできる限り統合するとともに、キャンパスの魅力を高め、本学の競争力を向上させることを目的としたものである。この構想には将来の不確定要素が含まれているため、構想全体については確定されていなかった。同年4月11日開催の第2次大学キャンパス整備基本構想委員会において、大学総合キャンパス整備構想の中で、既に計画が確定している土樋キャンパス北地区（東北大学から取得した片平南地区の一部7,950㎡）に建設予定の新校舎の設計条件を整理し、整備機能を決定した。また、同年8月2日開催の同委員会において、泉キャンパスの土樋キャンパスへの統合（案）について検討した。同年9月17日開催の同委員会では大学総合キャンパス整備事業工程（案）について、同年10月16日及び11月21日開催の同委員会では学都仙台と東北学院大学のグランドデザイン（案）について、2014年2月6日開催の同委員会では仙台市立病院跡地を利用したキャンパス統合（案）について検討した。

② 土樋キャンパス北地区新校舎（ホーイ記念館）の建設

2013年4月24日開催の東北学院施設・設備等整備委員会において、大学土樋キャンパス北地区新校舎（仮称）の整備機能を承認した。同年5月15日開催の東北学院入札実施委員会において、プロポーザル方式入札の採用、プロポーザルにおける要件定義と評価方法、入札に参加する設計業者などを決定した。同年6月13日にプロポーザル現場説明会を実施し、9月26日にプロポーザルのプレゼンテーションを実施した。参加設計業者は4社であった。プロポーザルの評価は、総合評価方式により、専門家を交えた審査委員会によって行った。同年10月2日開催の東北学院入札実施委員会において、評価結果が最も高かった㈱三菱地所設計東北支店のプロポーザルを最優秀とした。同年10月24日開催の理事会において、㈱三菱地所設計東北支店を土樋キャンパス北地区新校舎（仮称）の設計業者とすることを決定した。同年10月30日開催の東北学院施設・設備等整備委員会において、プロポーザルで示された新校舎の基本設計に対する学内各方面の意見を集約・検討するための4つのWGを設置した。各WGは、2014年2月末までにそれぞれ6回程度の検討会を重ね、さらに東北学院施設・設備等整備委員会小委員会において、各WGの検討結果をまとめた。同年2月26日開催の東北学院施設・設備等整備委員会において、修正後の新校舎全体の基本設計案を承認した。この新校舎の基本設計の大学教職員に対する説明会を、同年3月27日に開催した。

2014年5月15日の東北学院入札実施委員会において、土樋キャンパス北地区新校舎（仮称）新築工事施工業者の選定方法について審議し、指名業者による入札とし、選定には総合評価方式を採用することを決定した。6月5日に新築工事現場説明会を実施し、7月9日に指名により入札に参加した工事施工業者の選定審査会を開催した。その選定結果に基づいて、7月24日に開催した2014年度第4回理事会において（株）大林組を施工業者に決定した。10月6日に起工式を執り行い、校舎の建設工事が始まった。

土樋キャンパス北地区新校舎の建築に併せて、東北学院創立130周年記念事業準備小委員会において、新校舎と新校舎内の多目的ホールの名称の選考を大学側に依頼した。それを受けて大学では、2015年7月から1か月間、学生及び教職員に電子メール等で名称を募集した。それに対して新校舎に54件、多目的ホールに50件の応募があった。学長、副学長、総務部長の間で慎重に審査した結果、応募作にもあった東北学院三校祖の一人、「W・E・ホーイ」の名をとって、新校舎名を「ホーイ記念館」、多目的ホールを「ホーイ記念館ホール」とする案を選考した。その後、学長から理事長へ上申があり、130周年記念事業準備小委員会で承認したのち、常務理事会において新校舎の名称を「ホーイ記念館」と命名することを決定した。2016年3月15日には、予定どおり竣工引渡式を行い、3月28日に献堂式を行い、9月から利用が開始された。

③ 五橋キャンパスの設置

大学総合キャンパス整備事業の策定は、従来、「第2次大学キャンパス整備基本構想委員会」及び「大学キャンパス整備基本構想原案作成委員会」という体制で行ってきたが、その体制を強化し、整備事業を推進するために、2016年4月からは、「大学キャンパス整備推進本部」並びに機能ごとに分けた「WG」及び「WG調整会議」という体制に改編した。この体制で、2016年7月に発表された「仙台市立病院跡地利活用に係る事業者の募集要項」に対応することとし、総力を挙げて事業計画を作成し、10月末に提出した。提案した事業計画の内容は、市立病院跡地に本学が「学都仙台」を象徴する大学アーバン（都市型）キャンパスを整備するというものであった。選考委員会からの質疑への回答、プレゼンテーション及びヒアリングを経て、12月21日に仙台市立病院から本法人が事業候補者に選定されたとの通知を受けた。2017年1月に停止条件付売買契約を締結した。3月10日の仙台市議会での承認を経て、売買契約の効力が発生し、3月29日に当該土地の所有権の移転登記を行った。取得した新しい校地は「東北学院大学五橋キャンパス」と呼ぶことに決まった。五橋キャンパスは、伝統的な土樋キャンパスと一体的な「ひとつのキャンパス」として運用することを目指すものである。つまり、泉・多賀城キャンパスの学生が移転し、そこで様々な交流を生み出す場を創り出すとともに、学都仙台における交流拠点として市民に開かれたアーバン（都市型）キャンパスを創造するものである。

2017年4月からは、具体的な五橋キャンパスの設置作業が始まった。それに合わせて、「大学キャンパス整備推進本部」の下に新しい事務組織として「大学キャンパス整備準備室」

を設置することとなった。準備室の下には「五橋キャンパス学内調整会議」と7つの「ワーキンググループ」を設置し、7月の理事会で決定した基本設計業者（(株)佐藤総合計画）とともに五橋キャンパス基本設計を行った。また、準備室では五橋キャンパス整備に必要な環境影響評価手続等の行政協議を進めると同時に、五橋キャンパス近隣住民との意見交換会を行った。意見交換を踏まえ、地域に開かれ貢献する大学として、住民の意向を考慮できる範囲で設計を変更することにした。高層棟を清水小路側に移動させ、よりシンボル性の高いキャンパスをつくるとともに、ホール棟を広場の中央に置き、各棟とのバランスを良くした。こうした変更の結果、五橋キャンパス基本設計は3月中旬に完了し、2018年度からは実施設計を行うことになった。併せて準備室では、全体的な大学キャンパス整備計画の推進として、泉・多賀城キャンパスの利活用計画の検討及び土樋キャンパス再開発計画の検討を進めたが、未だ構想案の策定に留まっているため、今後も継続して検討を行うことになっている。

2018年度も2017年度と同様の体制（キャンパス整備推進本部会議—大学キャンパス整備準備室会議—五橋キャンパス学内調整会議）でキャンパス整備計画を進めた。2018年5月11日に実施した「実施設計協力事業者(工事施工候補者)選定指名プロポーザル」において、工事施工候補者として(株)中工務店東北支店を選定した。これ以降、VE（Value Engineering）提案の採用と面積削減及び一層の工事費抑制を期し、3者(発注者、設計者、施工候補者)協議を繰り返し重ね、更なる経済設計に努めた。その結果、精概算図が2018年12月25日に(株)佐藤総合計画東北オフィスより提出された。この精概算図を基に、施工者である(株)中工務店において積算を行った結果、2019年2月20日に精概算工事費223億円(税抜)、面積約64,800㎡の提示を受けた。大学キャンパス整備準備室は、(株)中工務店東北支店より提供された根拠資料を慎重に検討し、社会的建設物価の上昇と単位面積当たりの工事単価並びに鉄骨部材の需要の過多等経済的状况を考慮すると、現状での精概算工事費が妥当であるとの結論に達した。さらに、消費税増税の時期や土地売買契約時の工事着手条件、そして2023年4月の開校時期の実現等を総合的に勘案すれば、2019年3月までにこの金額で契約することが望ましいと判断し、同年3月7日開催の理事会及び評議員会において契約することの承認を得るに至った。また、近隣住民との協議を踏まえ設計変更を行った結果、2018年12月からの解体工事の予定が遅れることになったものの、五橋キャンパス整備計画環境影響評価（アセスメント）が順調に進み、2019年12月には解体工事に取りかかる予定である。

2-4 『東北学院大学の基本方針2017』（総合マニフェスト）の刊行

本学では、理念の表象として十字架をアレンジした校章があり、モットーとしてはLIFE、LIGHT、LOVEの「3L」を、キリスト教に学び、その教えに生きる指針として早くより用いてきた。また、キリストの言葉である「地の塩、世の光」が、社会人としての生き方を導くものとして、しばしば語られている。さらに、本学は東北学院建学の精神や本学の教育理念・目的を様々な本学が社会に対して自らをアピールする表現として掲げてきた。ことに近

年、大学が社会に対して自らの教育研究理念や社会に対する姿勢などについて明確に示すことや諸情報の公開などが要請されてきたこともあり、本学はこれに誠実に応えてきた。このようにして本学が定め、発信してきた理念や方針はゆたかになり、かなりの分量となった。また、2016(平成 28)年には学校法人東北学院の中長期計画として「TG Grand Vision 150」を制定し冊子として公表した。しかし、このように多くの方針を策定・公表していたにもかかわらず、これまで一覧できるものはなかった。

2017(平成 29)年度に、本学がよって建つ理念・目的、教学上の 3 つの方針、国際化、障がい者支援、ハラスメント対策などの社会的な問題への大学としての見解と取り組みなどのメッセージ群を整理しまとめて「東北学院大学の基本方針」として冊子を作成することにした。大学の知名度を高め、存在感を示すとともに、大学が果たす社会的責任を約束し、いわゆる教育の質保証を明確にするためのマニフェストとして刊行したものであり、大学のホームページにも公開した。

2-5 教育の質的転換

① 私立大学等改革総合支援事業

社会からの大学教育に対する不信感は強く、その証左が 2014 年の学校教育法改正であった。そこで、大学は自らの教育改革を通じてその存在意義を明らかにしていかなければならなくなった。本学も当然様々な教育改革に着手していたが、2013 年度から文科省による「私立大学等改革総合支援事業」(補助事業)が開始されることになり、それに対応する形で教育改革をさらに前進させることになった。「私立大学等改革総合支援事業」は、「『大学力』の向上のため、大学教育の質的転換や、特色を発揮して地域の発展を重層的に支える大学づくり、産業界や国内外の大学等と連携した教育研究など、私立大学等が組織的・体系的に取り組む大学改革の基盤充実に図るため、経常費・施設費・設備費を一体として重点的に支援する」ことを目的にしていた。

2013 年度は次の 3 つのタイプ別に調査が行われ、その回答状況を点数化して、得点上位校から選定するというものであった。タイプ 1「建学の精神を生かした大学教育の質向上」(大学教育質転換型) 250 校程度、タイプ 2「特色を発揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり」(地域特色型) 150 校程度、タイプ 3「産業界など多様な主体、国内外の大学等と連携した教育研究」(多様な連携型) 100 校程度。本学は、タイプ 2 に選定され補助金を獲得することができた。

2014 年度は、タイプ 1 (教育の質的転換)、タイプ 2 (地域発展)、タイプ 3 (産業界・他大学等との連携)、タイプ 4 (グローバル化) の 4 つのタイプになり、本学は得点不足のため、いずれにも選定されなかった。

2015 年度と 2016 年度のタイプ区分は 2014 年度と同じであり、2014 年度の反省をふまえ、学長の号令一下、積極的に得点を獲得するために毎年度、改革を進め、タイプ 1、タイプ 2 及びタイプ 3 に申請した。その結果、両年度ともタイプ 1 とタイプ 2 に選定され、補

助金を獲得することができた。

2017年度は、従来の4タイプに加え新たにタイプ5（プラットフォーム形成）が新設された。タイプ5は、複数大学間の連携、自治体・産業界との連携を進めるためのプラットフォーム形成を通じた大学改革の推進を支援するものである。本学はこうした取り組みとしてすでに2015年度から5年間の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択されていることもあり、タイプ5には申請せず、従来の4つのタイプすべてに申請した。その結果、タイプ1に選定され補助金を獲得した。

2018年度は、タイプの組み替え等が行われ、タイプ1（教育の質的転換）、タイプ2（産業界との連携）、タイプ3（他大学等との広域・分野連携）、タイプ4（グローバル化）、タイプ5（プラットフォーム形成）となった。本学はタイプ1、タイプ2、タイプ3に申請し、タイプ1に選定され補助金を獲得した。

このようにして2015年度から2018年度までの4年間は、文科省の補助事業を活用して教育の質的転換に資する改革を積極的に行い、結果的に補助金を大きく獲得することができたのである。

② 教育活動

1) 理念・目的・教育目標及び教学上の3つの方針

2013年度から2018年度までの6年間で、宗教改革の「福音主義キリスト教」の信仰に基づく「個人の尊厳の重視と人格の完成」の教育にあるとした建学の精神のもとで、本学は、2009年に教学上の3つの方針（ポリシー）（「学位授与の方針（ディプロマポリシー：DP）」「教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー：CP）」「入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー：AP）」）を定めたが、大学基準協会による認証評価基準で義務付けられている各学部及び各研究科単位でのその策定は遅れていた。しかし、2013年度にすべての学部、研究科でこれら3つの方針を定め、本学ホームページを通じて公表した。

教学上の3つの方針は、2017年2月に改定され、新たな「学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」、「入学者受け入れの方針（AP）」を策定した。なお、従来の「教育課程編成・実施の方針」は「教育課程編成・実施の全学合意」として残している。これらはすべて、先述の『東北学院大学の基本方針2017』（本冊子19頁参照）にまとめ公表している。

こうした教学上の3つの方針を踏まえ、本学の教学に関する取り組みについて学外者から広く意見を聴き、その取り組みの適切性の確保に資することを目的として、2016年度に「東北学院大学の教学に関する懇話会」を設置した。毎年度夏に開催されている懇話会では、学外者（学識経験者、地方自治体、産業界、市民団体等の関係者）から有益な示唆を得ている。

2018年度には、「教学上の3つの方針」の達成状況について正確に把握し、それを「教育の質保証」にむけた改善に活かすために、教学上の成果について多様な観点から測定・評価

する方針（アセスメント・ポリシー）を策定した。さらに、今後は、この方針に基づき授業レベルでの成績評価の方針を明確にするために、「授業における成績評価の方針」を策定し、各授業の成績評価における基本方針の全学的合意の下、それに従って共通の基盤に基づく成績評価を行うことにしている。

また、アセスメントポリシーを具体化するために、つまり学位授与方針に対応した学修成果を可視化するために、アセスメントテストを行うことが教学改革推進委員会で検討され、2019年度より1年次と4年次の全学生にアセスメントテストを実施することになった。今後は、この結果を用いて学修指導やキャリア支援を行うとともに、教育力向上に向けた取り組みが行われることになる。

2) カリキュラムの改正

(1) TG ベーシックの導入と見直し

2013年度入学生から、経済学部、経営学部、法学部、工学部で新たな教育課程を導入した。主要な改正項目は、セメスター制への対応を念頭に置いた講義科目の2単位化、単位の実質化の前提となるキャップ制、そして全学共通カリキュラムとしての非専門科目の見直しであった。

非専門科目の見直しとしては、特に教養教育科目を中心に大幅な改正が図られた。その主な内容は、教養教育科目を「第1類」と「第2類」に分け、第1類を「人間的基礎」（キリスト教学、こころ、生き方等に関する科目からなり、特に建学の精神と深く関わるキリスト教に関しては、「聖書を学ぶ」と「キリスト教の歴史と思想」を1年次に配置して必修科目とし、さらに「キリスト教学」A～Dのうち1科目を3年次の選択必修科目とし、キリスト教学関係科目の合計6単位を卒業必修単位とした）と「知的基礎」（学び方、論理的思考、数理的思考、日本語文章力、情報処理等に関する科目）に区別し、これらを「TG ベーシック」と通称した。ここに置かれる授業科目の教育内容・達成目標は、2013年度に導入した全学部で共通化を図っている。第2類は、人間的基礎、知的基礎では対応しきれないが、教養教育科目履修全体で目的が達成されるような幅広い科目（哲学、歴史学、倫理学、文化人類学、学部学科独自科目等）を設置した。これらの改正は、文学部、教養学部でも2015年度から導入された。これによって、教養教育の全学的統一化・共通化が大きく進み、あわせて第1類をTG ベーシックと第2類を学科教養科目と名称変更し統一した。

2016年度末から教養学部総務委員会において、TG ベーシックの現状の課題について審議を始め、その内容を踏まえた「全学教育課程小委員会でのTG ベーシック見直しの報告と提案」が2017年4月に全学教育課程委員会へ提出された。そこでの審議結果を受け、全学教育課程委員会の下にTG ベーシックに関する小委員会を設置し、同一科目の授業内容の統一化、TG ベーシック科目の一部見直し（カリキュラムの統廃合）、TG ベーシック科目の専任教員の採用とその運営のための組織設置（TG ベーシックセンター[仮称]）等を検討しているが、2018年度までに大きな進捗は見られていない。

(2) 「地域教育科目」の導入

2014年度から5年間にわたる大学改革推進等補助金「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」(事業の概要については43頁参照)に採択されたことから、地域共生教育の構築を目指して全学部のカリキュラムに地域教育科目を配置する教育課程の改正を行い、2015年度から開講した。地域教育科目は、1年次「震災と復興」(2単位)、2年次「地域の課題Ⅰ・Ⅱ」(各2単位)、3年次「地域課題演習」(2単位)からなる。このうち「地域の課題Ⅰ」を必修科目とした。2015年度には「震災と復興」を、2016年度には「地域の課題Ⅰ・Ⅱ」を、2017年度には「地域課題演習」を順次開講している。それぞれの授業では、グループ学習やケースメソッド手法を使ったフィールドワーク等を活用し、アクティブ・ラーニングを積極的に導入している。地域教育科目は、このCOCと2015年度に採択された「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(事業の概要については43-44頁参照)で任用された特任講師によって、教材開発も含め共同で担われている。

(3) 共通(必修)英語の見直しと英語教育センターの設置

共通(必修)英語のあり方に関しても、その運営主体の設置なども含めて検討に着手し、2015年4月に「英語教育センター」を設置した。英語教育センターは、本学における共通(必修)英語の教育を大学として組織的に行うことを目的としている。同センターは、教養学部言語文化学科の英語担当教員及び各学部から選出された教員とともに、期限付きで採用される特任講師から組織されることが特徴となっている。特任講師は2016年度から採用され、2018年度末現在、5名在籍している。

同センターは英語教育改革を進め、経済、経営、法、工の4学部は2017年度から、文、教養の2学部は2019年度から新しい英語教育プログラムを実施している。同センターは、2015年度から新入生全員を対象とした英語プレースメントテスト(TOEIC Bridge Test)を実施し能力別クラスを編成し、英語教育の実質化を進めている。1年次の必修英語は、入学直後のプレースメントテストにおいて最もスコアの低い学生には「ベーシック英語」の受講を義務付けている。これは1年前期に開講し、主として「中学英語からのやり直し」をテーマとしており、学生の英語力の底上げを目標としている。なお、英語学習をサポートするため泉キャンパスでは週3回、多賀城キャンパスでは週1回、英語教育センターのスタッフによる学習相談「えいごりらうんじ」を開催している。

こうした改革の効果を検証するために、2017年度末に、先行4学部の1年生の一部学生を対象に入学時と同様のプレースメントテストを行った。さらに、2018年度末には全学部の2年生の学生を対象とする検証を行った。

(4) キャップ制の導入

2013年度より科目履修登録上限(キャップ)制が導入され、1~3年生は年間44単位、

4年生は48単位とし、単位の実質化が図られた。改正したカリキュラムを検証するなかで、後期修正登録に関しては2科目4単位を上限とした修正登録が混乱を多く招いていることなどから、44単位のキャップ内での修正登録を可とし、2014年度から実施している。

2018年度に単位の実質化を一層強固なものとするためにキャップの上限を1～3年生について40単位に引き下げること検討し、文学部、経済学部、経営学部、法学部において2019年度入学生より適用することにした。工学部、教養学部においても数年後には実施される予定である。

3) 年間の授業計画（シラバス）

学事暦の策定に当たっては、2015年度より半期15回の授業と定期試験期間の確保のため、入学式前の4月1日から新入生オリエンテーションを開始することを実施方針とした。2018年度には、多様な成績評価を行うために定期試験週を設定せず、15回の授業の最終週に指定試験として実施することにした。

授業に関しては大学要覧（シラバス）及びホームページにおいて、すべての科目でテーマ、講義内容、達成目標、半期15回の授業計画、成績評価方法、学修に必要な準備、テキスト・参考文献、履修上の注意等を記載している。また、2014年度には、すべての学科が、4年間の学士課程において獲得すべき到達目標を明確化し、「学士課程の到達目標」として公表した。この到達目標に沿って、各学科のカリキュラム・マップの作成、カリキュラムの見直しが進められた。2017年度よりシラバスに各授業のカリキュラム全体の中での位置づけ（カリキュラム・マップ）が示され、毎年各学部で発行している「履修科目登録要項」を用いて履修上の注意、履修指導を進めている。

4) 授業方法の改善

授業の方法として、可能な限りアクティブ・ラーニング（AL）を導入することを求め、少なからぬ講義において実際に導入している。その積極的導入を促すため、2016年度より「アクティブ・ラーニング予算」として各学科毎年度20万円までの申請を受けつけている。これを活用し、経営学科では、地域企業経営者への聞き取り調査結果を一般市民に向けた報告書にまとめるという作業を通して、経営者の心理や現状の問題点を理解するPBL型授業を実施している。その他の多くの学科では、様々な授業規模で行われる授業内ディスカッションやワークのファシリテーター役として学生アシスタント（SA）を導入し、履修者の能動的学習を深めるだけでなく、SA自身の理解深化を実現している。工学部の一部学科では、授業内グループディスカッションを促進するためにタブレット端末を活用している。また、全学1年次必修の地域教育科目「震災と復興」においてはすべての授業でグループディスカッションを取り入れており、全授業の40%でAL型授業を実施した。

また、講義内容の理解を深めるために、経済学部では学習支援システム（LMS：Learnig Management System（manaba course））を2016年度から先行導入し、授業外学修の時間

を増加させるとともに成績の向上につなげることに一定程度、成功している。この取り組みを2017年度から全学導入し、数多くの授業で活用されている。ほぼすべての授業がこのシステムに登録されており、そのうち実質的に活用された授業（閲覧回数100回以上）は約700であった。各キャンパスにmanaba支援室が置かれ、専任の支援員を配置しており、授業担当教員への支援と学生へのサポートを手厚く行っている。

2018年度は、「manaba course」が本格稼働して2年目となり、数多くの授業で活用されている（利用授業数958、利用教員数278名）。利用内容は、レポート（電子ファイルでのレポート提出）、コンテンツ（授業資料の公開）やコースニュース（授業情報の連絡）、掲示板（教員—学生間でのディスカッション）などが主である。「ドリル」機能を用いて学生の自主学習を支援している授業や、多人数の教室において「respon」機能を用いて双方向型の授業を行っている科目も増えている。

5) 入学前教育の実施

2017年度よりAO・推薦入試合格者を対象とした入学前学修をe-learning（「TGドリル」）を通して高校主要教科の復習を行うこととし、計1,465名が高校基礎科目の復習に役立った。大学の授業の理解に備えるために「基礎学力コース」と「アドバンスコース」を用意しており、前者は5教科、後者は学部が指定する教科の受講を求めている。いずれも繰り返し学習し、期日までに「実力診断テスト」をクリアすることを求めている。その効果を見るために、2018年度よりすべての入学生に入学時に基礎学力確認テストを実施している。

6) 授業改善のための学生アンケート結果の活用

「授業改善のための学生アンケート」実施委員会は、2014年度後期から授業改善のための学生アンケートの質問及び選択肢を全学的に統一化し、学修の成果に係る学生の評価を重視する内容とした。また、2016年度より「授業改善のための学生アンケート」を每学期末（7月と1月）にすべての科目で実施し、その結果を次のように活用することにした。『「授業改善のための学生アンケート」結果報告書』をすべての教員（非常勤を含む）に配付し、学生閲覧用として各キャンパス窓口に置くとともに、本学のホームページに公開する。個別科目の授業評価結果を学生に公開し、各キャンパスに閲覧用として配置する。さらに、授業評価結果の高い（総合評価5点満点の4.8点以上）教員を学長が表彰するとともに、低い（総合評価5点満点の2.5点以下、2018年度からは3.0点以下）教員には所属する学部の学部長に改善計画書の提出を義務づけることにした。併せて、東北学院大学学長教育賞を定め、教育力の向上に資するような仕組み作りを行った。

7) 卒業時意識調査の実施

「学位授与の方針」や「教育課程編成・実施の方針」に掲げられている目標に沿った教育が実現されているか否かを点検し、今後のカリキュラムの改善や教育内容・方法の見直しに

資する情報を得ることを目的に、2009年度から「卒業時意識調査」を実施している。2014年度には、実施主体が、学部長会から IR 活動の一端を担う教育研究所へ変更になった。

調査は、卒業予定者全員を対象として、卒業判定の教授会後の成績表配付時に行っている。調査票は、性別や入学年次、学部・学科などの基礎項目、カリキュラムや授業に関する項目、4年間で身につけたと思う技能や態度に関する項目、教育関連施設の利用のしやすさに関する項目、総合評価に関する項目から構成されている。

調査の結果は、毎年度、『〇〇年度「卒業時意識調査」の調査結果の概要』及び『〇〇年度卒業時調査よりみた東北学院大学の教育の現状と課題』と題する小レポートと合わせて、学部長会を通して各学科に提供している。この調査結果は、各学科の「学位授与の方針」の成果を評価するものの一部となっている。なお、3つの方針の成果を全体的に評価する方針は2018年度に「アセスメントポリシー」として策定されている。

8) GPA 制度の導入

2016年度入学生から GPA (Grade Point Average) が導入された。これは、欧米の大学等で用いられている成績評価の指標で、国内の大学でも「厳格な成績評価の実現」、「高等教育のグローバル化」に対応するために導入されている。現在、本学では成績は点数で表示しているので、GPA はこれをもとに計算されることになる。GPA の導入によって、学生が同一学科の中での自らの成績の位置づけを見ることができるようになるだけでなく、本学における厳格な成績評価に基づく学修成果の質保証につながることになる。

GPA は 2016 年度入学生から成績表に記載している。GPA の意味は大学要覧(シラバス)に明記し、そこに「学修指導計画」として各学部が学生に対して GPA に基づく学修指導を行うことや GPA が 1.0 以下の場合には退学勧告を行うことができることも記載している。

詳細な履修指導は各学部が「履修科目登録要項」を通じて、各年度の変更事項や詳細な履修に関する指導を行っている。また、成績不振者に対する履修指導を制度化した。各学科で一定の基準を定め、それを下回る成績の学生に対しては、学科長、グループ主任、教員等による面談を通じた指導体制を構築した。この際に GPA が用いられるが、具体的には現在は学部・学科ごとに異なる指導を行っている。特に、2018年度から GPA が所属する学科の上位 25%に含まれ、かつ 2.0 未満の学生に対しては特別の学修指導を行うことにした。

9) 『東北学院の歴史』を利用する自校史教育科目の設置と授業への取り組み

2017年10月に刊行された本院史資料センター編『東北学院の歴史』は、中高大学生から卒業生、あるいは一般の読者も想定して出版している。その活用方法については、当初はキリスト教関連科目などにおいて、授業担当教員がそれぞれの判断で利用するにとどまっていたが、2018年度に法人での検討を経て、大学では 2019年度新入学生全員に配付することにした。大学では、2019年度の文学部及び教養学部のカリキュラム改定の際に、教養教育科目の学科教養科目に「東北学院の歴史」として3年次後期に設定し、自校史教育を開設

することにした。2021年度の経済学部、経営学部、法学部及び工学部のカリキュラム改定の際には同様の措置をとる予定であり、したがって2021年度からは全学的に自校史教育を行うことになる。

10) FD 活動の推進

本学のFD推進委員会は、毎年度、新任教員を対象にした新任教員FD研修会、全教員を対象にした授業運営に関する説明会、FDシンポジウム、FD講演会、FD研修会、シラバス記載説明会を実施してきた。また、年2回発行する『FDニュース』は編集体制を強化し、内容の充実に努めている。

2013年度から東北学院が教職員の研究プロジェクトに助成金を支給する「東北学院個別・共同研究助成」制度を、これまでの学術研究だけから教育研究まで拡充し、教育改善につながる研究を支援することとした。また、厳格な成績評価に向けての基礎資料とするため、すべての専任教員と外国語担当の非常勤教員を対象に「成績評価に関する意識調査」を初めて実施し、その結果を『FDニュース』、FD研修会及び『教育研究所報告』で紹介した。

2014年度のFD活動においては、「大学教育の質的転換」やアクティブ・ラーニングを重点的に取り上げた。『FDニュース』では、特に学生からの意見をFDに活用するための企画を継続的に行った。また、「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」が採択されたことに伴い、COC事業としてのFD研修会を2回にわたって開催し、アクティブ・ラーニングに関する問題を取り上げた。

2015年度のFD活動においては、7月に、松下佳代京都大学高等教育研究開発推進センター教授による「ディープ・アクティブラーニングの考え方と方法」と題するFD講演会を開催した。松下教授によるアクティブ・ラーニングの問題点とその解決法としてのディープ・アクティブラーニングについての講演は、アクティブ・ラーニングの活用に悩んでいた教員には一助となるものであった。11月のFD研修会は、「TGベーシックの振り返りと今後のあり方」をテーマに、各担当者からの報告と話し合いの会を開催した。全学共通の教養教育としての「TGベーシック」の導入から3年を踏まえて、課題を摘出し、今後を考えるよい機会となった。

2016年度は、2015年度に行われた「授業改善のための学生アンケート」において優秀な評価を受けた2人の教員（文学部総合人文学科吉田新講師、工学部電子工学科小澤哲也教授）から講義等についての工夫を聞く機会とした。また、土樋キャンパスのホーイ記念館に新設された「ラーニング・コモンズ」の特任助教による、その活用法についての説明会をあわせて行った。10月のFD講演会では、2016年度から経済学部で先行導入した学習支援・授業支援システム（Learning Management System : manaba course）の内容と活用事例の紹介を行った。先行導入した経済学部の実情について、授業外学修時間の増加とともに成績の上昇という結果報告がなされ、学修成果の向上に活用できる有効なツールと判断し、2017年度から全学導入することにした。12月のFD講演会では、東北学院中学校・高等学

校における新コース制の導入についての説明会を行った。

2017年度は11月に高崎経済大学の矢野修一教授による「出会いの場としての学部ゼミの可能性」と題する講演会を開催したほか、各学部から「manabaを活用した授業報告」を行った。また、2018年3月の全学教員会議では「COC及びCOC+の事業報告」を行った。これらのほかにも学部ごとのFDを随時行い、年間を通じて全ての教員がいずれかの研修会に必ず出席することを義務化している。

2018年度においても、新任教員FDを4月の授業開始前に行い、前期授業終了後には「前期振り返り懇談会」を開催した。また、4月の全学教員会議で学務部長による「今年度の授業運営に関する諸連絡」を行っているほか、9月には、関西大学教育推進部の森朋子教授による「アクティブ・ラーニングの授業デザインー『分かったつもり』を『わかった』へー」と題するFD講演会を開催した。さらに、2019年2月にはラーニング・コモンズでのワークショップ「今から始める！ルーブリック評価」を、同年3月の全学教員会議ではFDとして「ルーブリック早わかり」と題する講演会をそれぞれ開催した。2018年12月には、FD推進委員会との共催として、地域共生推進機構による「地(知)の拠点整備事業終了報告会」を開催した。

11) 「就職に強い大学」ブランドイメージ強化のための教育プログラム開発

1年次からキャリア教育科目の提供により、学生の自立及び社会人としての基礎的な能力を育成している。また、2年次から3年次にかけてはインターンシップの実施により、学生の職業観及び社会的自立を促している。3年次以降は各種就職支援ガイダンス、合同企業セミナーなど就職活動に直結する行事を提供している。そのほか、公務員試験対策、適性試験対策、外国人留学生支援、障がいのある学生への支援、各種進路相談面接指導など多数のプログラムを提供している。これらのように、低学年より大学院を含めた各学年に応じたキャリア教育と進路支援を提供することにより、地域で信頼され幅広く社会に貢献できる人材を輩出している。

就職率の推移（過去5年間）

卒業年度	就職希望者に対する 就職率	卒業生に対する 就職率
2013年度	90.2%	80.8%
2014年度	91.1%	83.4%
2015年度	90.8%	84.5%
2016年度	93.5%	86.9%
2017年度	96.6%	88.5%
2018年度	97.6%	88.9%

12) 履修証明プログラム「地域コーディネートスキルプログラム」の開始

2014年度に採択された「地（知）の拠点整備事業（COC）」を受け、地域とそこに住む人の未来作りのために自ら意図を持って関係者の協働を促進するチェンジエージェントとしての地域コーディネーターの育成を目指した「地域コーディネートスキルプログラム」を、文部科学省が推進する履修証明プログラム（学校教育法第105条等に基づき、120時間以上の履修を行ったものに対して履修証明書を交付する制度）として、2015年5月から8月までの期間で提供した。このプログラムは、①イノベーションの先取りと仮説検証（実行・変革促進）、②協働のファシリテーション（伴走・プロセス支援）、③協働のファシリテーション（連結・資源連結）、④高い専門性とリーダーシップ（提案・問題解決提示）といった方針に基づき編成・実施した。このプログラムには、定員5名に対して8名の受講生が集まり、毎週水曜日の夜間及び土曜日の午前中から夕方までを活用し、それぞれ受講生が主体的な学びに取り組んだ。同年8月には、制度で規定される120時間以上の履修を行った7名に対して履修証明書を交付した。

13) コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムの開講

2016年度に文部科学省・職業実践力育成プログラム（BP）の認定を受け、開講されたコミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムは、地域福祉の現場の課題に直結する新しい授業内容を通じて、人口減少・超高齢社会の、地域福祉のキーパーソンとなるコミュニティソーシャルワーカーのスキルアップを目指して開始したものである。

このプログラムの特徴は、5つの授業科目群（①「基礎科目」、②「必須理論」、③「実践技法」、④「特論演習」、⑤「事例研究」）から構成される体系的な教育プログラムであるという点にある。授業を行う講師には、現場の第一線で活躍している実務家を数多く迎え実践的な授業を行っている。

2016年度は募集定員20名に対し18名の受講生で授業を開始した。このうち2名が途中で受講辞退となったが、最終的に14名が修了した。また、本プログラムと対をなすものとして、CSW公開研究会を4回実施し、地域福祉を担う人材の育成を多面的に進めた。継続的に開講しており、2017年度は受講生が15名、修了生が13名、2018年度は受講生が10名、修了生が10名であった。

2-6 教育・研究組織の改編

① 法科大学院の募集停止

2004年度に設置された大学院法務研究科は、入学者の減少と司法試験合格者の合格率が10%に届かない年も多くなり、カリキュラム改革を行い、分かり易い丁寧な教育をさらに推し進めるとともに、新たな入試制度を採用し、奨学金の充実を図るなど、受験生を増やすための努力を行った。しかし、状況は改善せず、入学者数が低迷する中、学生同士が学び合い、互いに切磋琢磨するといった本学法科大学院が目指す教育ができない状況に追い込まれ、

またこのような状況が近い将来改善される見込みもないとの判断に至り、2014年度より学生募集を停止し、2016年4月に文部科学省に廃止の届出を行った。

② 工学部の改組

工学部は、これまでの電気情報工学科及び電子工学科の電気系2学科をハードウェアとソフトウェア分野に再編成して内容の充実を図り、複合的に強電系から弱電系までを網羅する「電気電子工学科」を設置することとした。また、近年急激な進歩を遂げている産業として、情報・通信分野がある。社会インフラを支える情報技術の例としては、バス・鉄道などを円滑に運用するためのスマートカードなどに利用される暗号実装技術、情報通信・ネットワークを支える無線・有線通信技術、工場プラントから家庭内ネットワークまでを守るためのサイバーセキュリティ技術、人工知能技術などを応用し自動運転車やロボットへの組み込みソフトウェア実装技術などが挙げられる。すなわち、情報産業分野において必要不可欠である情報インフラ（基盤）を支えるエンジニアの養成が強く求められており、「情報基盤工学科」を新たに設置することとした。

2016年4月に文部科学省に申請した情報基盤工学科の設置届出は6月に受理された。また、電気情報工学科から電気電子工学科への名称変更は2015年12月に認可された。これらの手続きにより、工学部を機械知能、電気電子、環境建設、情報基盤の4学科に再編成し、入学定員を全て110名とする改組を行った。

③ 文学部教育学科の開設

2018年度に文学部に教育学科を設置した。文学部に教育学科を設置する方針を2015年度に定め、以降全学的に設置へ向け準備を進めてきた。2016年度末に文部科学省へ教育学科（1学年定員50名）の設置認可申請及び教職課程認定申請等を行い、2017年度に同省から設置認可及び教職課程認定を受け、2018年4月に開設した。

教育学科の特色は、小学校教諭一種免許状に加え、中学校及び高等学校教諭一種免許状（英語）が取得可能なことであり、これは2020年度から小学校で実施される外国語（英語）の教科化に対応できる教員を育てることを狙ったものである。教員養成の観点から地域貢献を目指す新学科を当初計画通り設置することができた。

④ 英語教育センターの設置

26頁参照

⑤ オーディオビジュアルセンターの廃止

2017年度に、オーディオビジュアルセンター運営委員会、所員会議の決定を経て、所長から学長にセンターの廃止願が上申され、教学改革推進委員会での審議を経て理事会において廃止が決定された。

⑥ 「学生総合保健支援センター」の設置

38～39 頁参照

⑦ ラーニング・コモンズ（学習支援施設）の設置

2017 年 4 月よりホーイ記念館の 1 階、2 階に全面稼働したラーニング・コモンズ「コラトリエ」では、専任職員が施設の管理・運営に当たり、特任講師が、各種催しの計画・実施及び学生への個別相談などを行っている。また、受付デスク 2 か所には臨時職員又は学生アルバイトが常駐し、施設や機器の貸出し及び各種問い合わせに対応するとともに、各種ガイダンス、セミナー、個別相談などを通して学生の自主的学習を支援している。2018 年度からは、アカデミックサポーター（AS）を制度化し、学生がコモンズの日常の業務を担当するのみならず、運営の一翼をも担うこととし、そのための研修を義務化している。

また、ベーカーリーが併設されている 1 階「リエゾン」エリアは地域社会に開かれており、毎日多くの市民に利用され、大学教員による『市民講座』や学外団体と共催の催し（例えば『高校生ビブリオバトル』）などの開催にも活用されている。

2-7 内部質保証と点検・評価及び認証評価

① 内部質保証体制の構築

大学が自らの責任で教育活動をはじめとする諸活動の質を向上させることを「内部質保証」という。2014 年度に本学は内部質保証の体制を構築するために、2014 年 11 月に「東北学院大学内部質保証に関する基本方針」を、2015 年 3 月に「東北学院大学内部質保証体制及び手続きに関する規程」を策定した。この規程では、内部質保証を統括する組織として「東北学院大学内部質保証委員会」を設置し、本学で実施される自己点検・評価を点検・評価するとともに、その結果を改善につなげるための措置を学長に提言することなどを規定している。

② 点検・評価の実施

2017 年度に公益財団法人大学基準協会の認証評価を受審することもあり、2016 年度に点検・評価を行った。3 年ごとの点検・評価活動は 2015 年度にある程度行っていたが、さらに全面的な点検・評価を行い、『点検・評価報告書』を作成した。この報告書、大学基礎データ、根拠資料等を 2017 年 3 月に大学基準協会に送付した。また、この『点検・評価報告書』は本学ホームページに公開している。

TG Grand Vision 150 に掲げる将来計画の達成のためには、現状を自己点検・評価することが必要であり、まさに、将来に向けての日々の努力をまとめたものが、『点検・評価報告書』である。この報告書には、本学に必要な改善点があることが示されている。改善に向けての方策を一つひとつ策定し実行していかなければならない。さらに、今後とも継続して、

大学として教育・研究活動、社会貢献に取り組むとともに、自己点検・評価活動を不断に行い、その結果を踏まえて改革・改善に向けて前進していかなければならない。また、この前進をチェックするものとして、内部質保証システムを十全に機能させなければならない。

③ 公益財団法人大学基準協会による「認証評価」の受審と大学基準への適合認定

本学では、点検・評価委員会において教員レベル、学部・研究科レベル、大学全体レベルでそれぞれ点検・評価を実施するとともに、この3層での点検・評価を適切に行っているかを内部質保証委員会が検証してきた。

本学では3年ごとに点検・評価を実施し、その一環として大学基準協会での認証評価を受審している。2016年度には自己点検・評価を行い『点検・評価報告書』を作成し、それに基づき2017年度に大学基準協会の認証評価を受審した。その際、本学における教育に関して根拠を持った説明ができるよう、大学全体もしくは学部・研究科において効果が上がっている事項や改善すべき事項を検証する機会としている。その結果、本学の教育の質向上や2011年に発生した東日本大震災被災地に所在する大学として地域社会に貢献すべき取り組みを改めて認識することができた。

一方、この過程で大学認証評価や自己点検・評価に対して多くの教職員の理解が統一されていないことが判明し、内部質保証体制の構築のために大学全体に対して啓発する必要がある。併せて、文部科学省による大学改革の要請に対応するために、本学における改革を推進する役割の必要性も強く認識することとなった。このため、2017年度から副学長を増員し、新たに点検・評価担当として3人体制とした。このようにして、大学全体として自己点検・評価活動を学長ガバナンスの下で行えるよう体制を強化したことにより、本学が取り組むべき教育課題に対して教職員の意識改革が進み、本学にとって非常に重要な取り組みとして点検・評価活動を位置づけることができた。

2017年10月2日及び3日の2日間、大学基準協会の評価委員による実地調査が行われた。2日目にあった全体会の講評では、各学部・研究科の検証体制が煩雑になっていないかと、これまでの点検・評価活動において意識していなかった点に対し指摘を受け、実地調査直後に開催した点検・評価委員会において議題として取り上げ、迅速に検証と改善が体系化されるよう取り組んだ。

『点検・評価報告書』とそれに基づく実地調査において、本学の様々な取り組み、とりわけ教養教育の改善や東日本大震災で被災した大学としての活動などが5点の長所として大きく評価され、適合認定を得た。今後は学長の強いリーダーシップの下、教員と事務職員が協働して内部質保証に取り組み、継続的な改善活動によって学生の学びをより深く充実させていくことになる。

④ Institutional Research 活動

本学の教育の質保証を担保し、さらに質の向上を図ることを目的に情報収集、分析、提言

などに関する業務を行う部署として、2016年6月に大学事務組織の学長室の下に新たにインスティテューショナル・リサーチ課（IR課）が設置された。

2017年度、Institutional Research（以下IR）による政策提言機能の強化を推進するため、学長室IRタスクフォースにおいて本学でのIRのあり方に関する検討を重ね、7月にインスティテューショナル・リサーチ（IR）課より教学改革推進委員会に対し、IRの概念と国内動向を含め、適切かつ効果的なIRによる本学の意思決定支援体制の報告及び提言を行った。これに基づき11月に「インスティテューショナル・リサーチ規程」を関連内規と併せて制定した。

本学におけるIRの目的は、教育・研究の質的向上と大学運営の安定化による内部質保証の実質化である。その実現のため、計画の立案、進捗や成果の評価により、教育・研究・大学運営が一体となった本学の強みの進展と、課題の継続的な改善活動に資する意思決定支援を行う。したがって、このことは、入学前から卒業までの情報を収集・分析するエンローメント・マネジメントや学修成果の可視化を通じたPDCAサイクルで具現化される。その手法として新入生及び卒業生意識調査、授業改善のための学生アンケートを学生番号記入式とし、成績等と関連付けて内部質保証に係る調査・研究を行うことにした。なお、2017年度から、全学部学生を対象に前期・後期における「学修行動と学生生活実態調査」を実施している。2017年度前期調査では4,275名、後期調査では3,688名、2018年度前期調査では4,052名、後期調査では3,644名の有効回答が得られた。結果として授業外学修時間等に課題があることが明らかとなったため、その改善方策を検討している。

2-8 外部評価

① 外部評価委員会

本学は、第三者による教育・研究活動の評価を受けることにより教育・研究水準の向上と組織の活性化を図ることを目的として、2010年3月から「東北学院大学外部評価委員会」を設置し、1期3年の外部評価を実施している。

2013年度に発足した第2期目の外部評価では、第1期外部評価の引継ぎ事項を踏まえ、主たる評価方法を本学関係者に対するインタビュー調査とすることとした。2013年度は合計3回の外部評価委員会を開催し、うち1回は、在学生及び卒業生を対象としたインタビュー調査を実施した。2年目となる2014年度は、前年度も調査対象とした卒業生に加え、改善・改革に取り組むべき事柄をより明確にすべく、高校教員と予備校関係者のインタビューを実施した。インタビュー調査は、議論の活性化を図るためグループ形式とし、卒業生2グループ、高校教員と予備校関係者を組み合わせた4グループに対して実施した。第2期最終年となる2015年度は、教育の成果に対する客観的評価を得ることを目的に、卒業生の就職先企業・自治体等を対象にインタビュー調査を行うこととした。インタビュー対象者は、企業あるいは自治体等の方針及び実態を把握している人物とし、26箇所に対して実施した。

第3期の外部評価1年目となる2016年度は、過年度の外部評価における指摘事項につい

での対応状況を確認する事項を選択し、それらについて大学側の対応状況を記した資料及びヒアリングに基づき、評価が行われた。2017年度は、本学が2017年度大学基準協会の認証評価の受審に際して作成をした『点検・評価報告書』のうち第10章の「内部質保証」に関する事項について「大学全体レベル」「学部レベル」「個々の教員レベル」「IR」の観点から外部評価を実施した。第3期最終年度となる2018年度は、本学の教育が在學生や社会からの要請に応えられているかについて「学生インタビュー調査」を実施した。この、インタビュー調査をもとに本学の教学上の3つの方針及び教育の理念・目的の適切性について外部評価を行い、大学の活性化及び取り組みの継続的改善に資する提言が行われた。

② 東北学院大学の教学に関する懇話会

24頁参照

③ 西南学院大学との相互評価に関する協定

2018年11月30日、福岡市の西南学院大学と本学は相互評価に関する協定を締結した。この協定は「両大学における内部質保証の水準の向上を目指し、自己点検・評価の客観性を担保すること」を目的としている。この背景には、学校教育法の改正により、大学は7年に1度、認証評価機関（大学基準協会等）による受審義務が生じたことが挙げられる。同制度は2018年度から第3期に入り、大学基準のなかで「大学は自ら掲げる理念・目的を実現するために、内部質保証システムを構築し、恒常的・継続的に教育の質の保証及び向上に取り組まなければならない」と定めている。このことから、自己点検・評価の客観性及び妥当性を高めるために、外部からの評価を取り入れるなどの工夫を講じる必要があり、本学では2010年度より外部評価委員会等の制度を導入し、学外者から積極的に意見を取り入れているが、この度、キリスト教を建学の精神とする大学で、学部数や学生数などが同規模である西南学院大学とも相互評価を行い、両大学の教育の質的向上を目指して協定を締結した。

2-9 学生支援

① 奨学金制度

1) スポーツ奨学金

2013年度に、「スポーツに優れた者の推薦入学試験」によって本学に入学した学部学生で、本学体育会の特別強化部に所属し、競技成績が優秀で勉学意欲・人物ともに優れ、その活躍が期待できると認められた学生を対象に学資を給付する「東北学院大学スポーツ奨学金」制度がスタートした。この制度の下で、給付奨学金の額は当該年度の学生納付金及び諸会費の合計額とし、採用人数は、各学年5名までとした。対象となる特別強化部は、当面、硬式野球部(3名)、女子バスケットボール部(2名)とした。この結果、2015年度は4名(4年生)、2016年度は4名(3年生)、2017年度は3名(2年生)、2018年度は5名(1年生)、2018年度合計16名が在籍している。

2) 予約継続型給付奨学金（3L 奨学金）の新設

本学独自の給付奨学金制度を実施して 10 年目となる 2017 年度に、学内奨学金制度の見直しを行い、東北学院大学予約継続型給付奨学金（3L 奨学金）制度を新設し、2018 年度から実施した。3L 奨学金は、勉学意欲、人物ともに優良でありながら経済的困窮状態にあるため修学困難な高校生を対象とし、入学試験受験前に予備申請を受け付けて採択し、入学手続時の学生納付金額を給付額とする。3L 奨学金は、年度ごとに継続申請することによって最短修業年限内の在学期間中に継続して給付を受けることができる。2018 年度は 42 名を採用し給付した。

② 東北学院コンシェルジュ（TGC）

2014 年度より学生の大学生活に対する不安を解消し満足度の向上を目指して、「東北学院コンシェルジュ」を創設した。泉キャンパスの新生を主な対象に 4 月から 5 月中旬まで各部署の職員、教員及び学生の有志が新たに設置されたコンシェルジュ・ブースで交代しながら学生支援にあたっている。この「東北学院コンシェルジュ」は、若手職員によるプロジェクト活動によって東北学院への改革提言を実現させたもので、学生との対話を通して様々な要望や悩みを聞き、学生生活の充実に寄与することを目的としてスタートした。実際の相談活動の中では、キャンパスライフについての幅広い質問が寄せられ、課外活動への参加案内や日頃の学生生活を送っていく上でのアドバイスを送ることができた。既存の窓口での学生支援への橋渡しの役割も含め、新生の大学生活のスタートの有益な情報提供を行い、きめ細やかな学生対応を行うことを目指している。

この取り組みは、2017 年度大学基準協会による認証評価において、SD 活動の一環として長所に取り上げられ、大学基準協会『じゅあ』No.62（2019）にも紹介された。

③ 朝定食の提供

2014 年 6 月 23 日から泉キャンパス「喫茶リーベ」において、「TG あさ食（100 円朝定食）」の提供を開始した。1 日 100 食の限定ではあるが、1 食 300 円に対し、大学が 200 円の補助を行うことで、学生は 100 円で朝食を取ることができる。4～5 品のおかずにご飯と味噌汁が付き、ご飯を大盛りにできることもあり、一人暮らしの学生や早朝練習を行っている体育会学生などを中心に「とても有難い」「これからも是非続けてほしい」という声が多く寄せられている。「朝は時間がないので、朝ご飯は食べない」「朝食を作る余裕がない」などの理由で朝ご飯をしっかりと食べずに通学する学生が多いため、本学では学生の健康管理と食育のためにこの支援をスタートさせ、今日まで継続的に行っている。

④ 障がいのある学生への支援

2016 年 4 月より、障がいのある学生への支援の全学的専門部署として、「学生総合保健

支援センター」(以下「支援センター」という。)を設置した。これは、同年4月1日に施行された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(障害者差別解消法)」により大学に求められた義務の履行でもある。

この支援センターに、障がいのある学生に対する修学支援を担当する部署として「学生支援室」を設置した。ここでは、視覚障がい・聴覚障がい・肢体不自由・内部障がい・発達障がいなど、障がいのある学生の求めに応じて、障がいの種別や個々の状況を踏まえ、必要に応じて学生相談室、保健室、各学部(学科)・研究科、学内外の諸機関等と連携し、合理的配慮の提供に向けて可能な支援をコーディネートする。学生支援室には、コーディネーター2名のほか、各キャンパス受付に嘱託職員3名(内2名が臨床心理士)を配置し、臨床心理士は受付業務に加えてコーディネート補助業務も担当している。心身の障がいを理由に修学支援を希望する学生に対して、学内の関連部署や学外専門機関と連携を図りながら支援を行っている。

これに伴い、従来のカウンセリング・センターを「学生相談室」と改称し、学生部に設けられていた「保健室」とともに、学生支援室を合わせた3室を、新たな教学部門である「学生総合保健支援センター」の下に置くこととなった。学生支援室、学生相談室、保健室のいずれも3キャンパスに設置され、必要に応じて連携を図りながら業務を担当しており、センター長が各室の室長を兼ねている。また、学生総合保健支援センターの事務のため、新たに学生部に「学生総合保健支援課」を設置した。

⑤ 退学者を防ぐ対策

「TG Grand Vision 150(東北学院中長期計画)」及び2017、2018年度の重点項目において退学者減少対策の継続が掲げられている。2017年度は、教学改革推進委員会の下に退学者対策検討委員会を設置し、退学の実態や退学理由を明らかにし具体的な対策を検討した上で、教学改革推進委員会において「離籍者を減らすための対策(案)」を報告した。具体的には、学業推薦指定校の見直しやスポーツ推薦・AO入試における学力チェック方法の検討、TG推薦入試における志望動機のチェック方法の再検討などを行った。特に推薦入学等での学力や志望動機のチェックに関しては今後の入試改革とも関連付けて取り組んでいる。また、入学前教育による「要注意」学生の発見と注意喚起、入学後のGPAなどを通じた学修指導や在学生の経済的問題の早期発見などを促している。

2-10 社会貢献・地域連携

① 宮城県教育委員会との連携協力

2013年10月15日に、本学は宮城県教育委員会との間で「包括連携協力に関する協定」を締結した。この協定は、宮城県教育委員会が2013年度から進めている多賀城高等学校の防災系学科の設置に当たり、本学工学部及び教養学部を中心に大学からの協力を得たいという申し出があったことに始まる。この協定の下で、本学と宮城県教育委員会が連携のもと

相互に協力し、学校教育・学術の振興及び地域社会の発展と人材の育成に寄与することを目的に様々な事項の連携事業を行っている。

② 国土交通省東北地方整備局との連携協力

2014年6月28日に、本学は国土交通省東北地方整備局との間で連携協力に関する協定を締結した。本学は長年にわたり、工学部を中心に、国土交通省東北地方整備局と個別的な連携を行ってきた。しかし、近年、インフラの老朽化や、それに携わる人材の不足が叫ばれるようになり、国土交通省東北地方整備局との間で、これまでの連携を集約しインフラ等に関する教育・研究や人材について、より総合的に対応するために、あらためて協定という形で協力体制を構築した。

この協定の下で、本学では社会資本の維持管理や資源循環に関する広範囲な教育・研究面の向上及び地域社会への貢献等について、東北地方整備局では社会資本の整備・維持管理の推進による強靱な国土づくりについて、相互に連携・協力し、国土の防災機能の向上及び地域社会の持続的発展に寄与するような各種事業を展開している。

③ 岩手県宮古市との連携協力

2014年3月27日に、本学は岩手県宮古市との間で連携協力に関する協定を締結した。これは、宮古市からの要請で、理科教育・もの作り教育・英語教育・スポーツ教育などの教育面で本学と連携協力のもとに充実させていきたいという打診があったことから協議が始まったものである。本学では、他市との連携協力協定の実績や本院同窓会の積極的な活動実績を踏まえ、可能な限りの協力を行うことを決定し、協定を締結するに至った。この協定の下で、東北学院大学の教育・研究及び社会活動並びに宮古市の市政及び市民活動を発展させることを目的に、様々な連携・協力を行っている。2014年度以降、毎年夏に、宮古市の小中学生などを対象とした英語・理科実験（①宮古・ニュートン・スクール、②小中学生ものづくり体験教室、③みやこ・イングリッシュ・キャンプ）を行っている。

④ 仙台市との「災害時における帰宅困難者の支援に関する協定」の締結

仙台市では、東日本大震災の際に多くの帰宅困難者が発生した経験を踏まえて、特に仙台駅周辺の企業との協定を進めていたが、本学も地理的には仙台駅に近く、また震災の際に多くの学生や近隣住民を自主的に受け入れた大学としての実績が評価され、2014年4月24日付けで仙台市と「災害時における帰宅困難者の支援に関する協定」を締結した。大学としては本学が初めてのケースとなった。

協定の内容は、「災害発生時、仙台市の要請に基づき、土樋キャンパス内の体育館（1階アリーナ部分）をおおむね72時間、一時滞り場所として提供するとともに、災害情報やトイレ、飲料水等を提供する」というもので、収容人数は約100名（夏休み等で学内に多くの学生がいない場合は約400名）としている。また、仙台市は本学に対し「帰宅困難者のため

の避難所開設及び運営の協力を依頼することができる」としており、災害備蓄品も仙台市から定期的に供給されることになっている。

⑤ 一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との連携協力協定の締結

本学は、一般社団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（以下「組織委員会」という。）との間で、2014年6月23日に連携協力に関する協定を締結した。これは、組織委員会からの要請で、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向けて、本学と組織委員会のそれぞれが持つ資源を有効に活用し、オリンピック教育の推進や大会機運の醸成等、大会に向けた取り組みを進めることを目的とするものである。

⑥ みやぎ移住・定住推進会議への会員登録

本学は、地方創生の一環として2015年度に宮城県が設置した「みやぎ移住・定住推進県民会議」に2015年10月21日付けで会員登録を行った。この会議は、大都市圏から宮城県への移住の推進と、移住者の地域への定着、さらにそれによる地域の活性化を図っていくための受入体制の整備や情報発信について、行政、関係団体、移住者を含めた住民等が連携・協力していくために設置するものである。

⑦ 株式会社ロフトとの連携協力

本学は、株式会社ロフトとの間で、2015年6月に連携協力に関する協定を締結した。この協定は、相互の人的・知的資源を活かし、教育・研究・文化や地域振興、人材育成、学生等の人的交流などについて連携・協力することにより、新たな価値を創造することを目的としている。

⑧ ベガルタ仙台との連携協力

本学は、2015年7月19日に、サッカーJ1仙台を運営する株式会社ベガルタ仙台との間で、学術・プロスポーツの分野で協力して地域活性化に貢献することを目的とした包括連携に関する協定を締結した。

⑨ 「地（知）の拠点整備事業」（COC：Center of Community）及び「地（知）の拠点大学による地方創成推進事業」（COC+）による地域社会との連携及び貢献

本学は、2014年度の「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」、2015年度の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」にそれぞれ採択された。いずれの事業も大学での学びを通じて地域が求める人材を育成することを目的としており、本学では、「震災と復興」「地域の課題Ⅰ」「地域の課題Ⅱ」「地域課題演習」の4科目からなる「地域教育科目」を創設し、取り組みを進めている。

大学 COC 事業では、仙台市及び多賀城市等と連携して地域のコーディネートを担う「コミュニティソーシャルワーカー (CSW) スキルアッププログラム」(文部科学省・職業実践力育成プログラム) を実施するほか、土樋キャンパス内の歴史的建造物を紹介することや青葉土樋敬老会の開催を通じて地域住民が大学と身近に接する機会を提供している。このほか、学生が地域住民と交流する中でスマートフォンの操作方法等を教える「スマホサロン@青葉土樋」などにも取り組んでいる。

また、COC+では、本学を含む 12 の高等教育機関が宮城県及び仙台市と連携し、地元・宮城 (以下「地元」) に所在する大学の卒業生を地元に着させることを目的とした事業を展開している。具体的には、地域教育科目の中で、地元企業の課題発見、課題解決までのプロジェクト設計及び課題解決の実践・検証を行い、これらの成果を還元することで地元企業の成長に貢献している。加えて、地元企業の認知度が低いという課題意識から、仙台市を中心とした「仙台・地域人材定着推進実行委員会」が企画・運営するプロジェクトの中で、学生が地元企業取材し、その内容を記事として発信する地元企業情報発信事業 (WISE) を行っている。2018 年度までに取材した企業は約 140 社、学生記者は延べ 126 名に上るなど、地元企業の知名度向上に貢献している。

⑩ 河北新報社との連携協力によるシンポジウム「震災と復興 東北の地域力」

本学は、2011 年 5 月 20 日に、河北新報社との間で地域力向上と人材育成に向けてより実質的な連携を実現するための基本合意書を締結した。連携事業の一つとして、2011 年度から「復活と創造 東北の地域力」をメインテーマに、有識者を招いて大学でシンポジウムを開催している。

2013 年度：①6 月 8 日 (土)：「復活と創造 東北の地域力④ー守りたい東北の大地ー」講師：富山和子 (環境問題評論家)、②11 月 16 日 (土)：「復活と創造 東北の地域力⑤ー震災の悲しみを乗り越えるー」講師：野田正彰 (精神科医、ノンフィクション作家)

2014 年度：7 月 5 日 (土)：「復活と創造 東北の地域力⑥ 震災と宗教ー悼みと向き合える社会へー」講師：山折哲雄 (宗教学者)、山形孝夫 (宗教人類学者)、福田雄 (関西学院大学災害復興制度研究所リサーチ・アシスタント)、若林一美 (立教女学院短期大学学長)、菅原裕典 (株式会社清月記代表取締役社長)、佐々木俊三 (本学総務担当副学長・教養学部教授)

2015 年度：①7 月 19 日 (日)：「復活と創造 東北の地域力⑦ 歴史から捉えた災害列島」講師：保立道久 (歴史学者・東京大学名誉教授)、千葉孝弥 (多賀城市教育委員会事務局文化財課課長補佐)、佐川正敏 (本学文学部教授)、七海雅人 (本学文学部教授)、松本秀明 (本学教養学部教授) ②3 月 5 日 (土)：「復活と創造 東北の地域力⑧ 復興を生きる震災とライフスタイルの変容」講師：菅原茂 (気仙沼市長)、手塚さや香 (釜石リージョナルコーディネーター/釜石地方森林組合)、山中茂樹 (関西学院大学災害復興制度研究所顧問/指定研究員)、宮原育子 (宮城大学事業構想学部教授)、志村知穂 (一般社団法人こころ

スマイルプロジェクト代表理事)、阿部幹司(株式会社花山サンゼット代表取締役)、根岸えま(一般社団法人まるオフィス)、石垣のり子(株式会社エフエム仙台)、

2016年度:「復活と創造 東北の地域力⑨ 震災と霊性—亡き人の声を感じ、生きるという力」講師:堤幸彦(映画監督)、若松英輔(批評家・随筆家)、麥倉哲(岩手大学教育学部教授)、金菱清(本学教養学部教授)

2017年度:「復活と創造 東北の地域力⑩ 震災と音楽」講師:大澤隆夫(元仙台フィルハーモニー管弦楽団専務理事、公益財団法人音楽の力による復興センター・東北代表理事)、和合亮一(詩人)、熊谷育美(シンガーソングライター)、石垣のりこ(エフエム仙台アナウンサー)

2018年度:「復活と創造 東北の地域力⑪ 事前復興への標(しるべ)～被災地に新しいコモンズの可能性を探る～」講師:清野聡子(九州大学工学研究院准教授)、マイケル・フィッシュ(シカゴ大学人類学部准教授)、阿部聡史(環境デザイナー)、千葉一(本学非常勤講師)

⑪ 小学校教員のための中学校英語教員免許状取得認定講習

文部科学省から「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業」の委託を受けて、2017年度から小学校現職教員を対象とした教員免許法認定講習を継続的に実施している。この事業は小学校教員に中学校教諭二種免許状(外国語[英語])を取得する機会を提供するとともに、教員の英語指導力の向上を図ることを目的としている。

⑫ 地域(近隣町内)住民との交流活発化

1) 青葉土樋町内会と東北学院大学主催による「敬老お食事会」の開催

本学は、地域に根ざした大学として、近隣の町内会と交流する機会を大切にしてきた。また、大学COC事業の採択を受け、これまで以上にその取り組みを強化してきた。この一環として、青葉土樋町内会における地域課題であった自治会活動の活性化に対して、その解決に向けた取り組みを同町内会と協議してきた。その結果として、2016年9月の敬老の日、青葉土樋町内会と東北学院大学との共催及び五橋地域包括支援センター、仙台市社会福祉協議会、仙台市青葉区社会福祉協議会の後援による「敬老お食事会」を開催した。当日は、本学土樋キャンパスを会場に、青葉土樋町内会の高齢者多数が参加した。2017年度、2018年度も同様の取り組みを行っている。

2) 留学生の地域イベントへの参加

本学は地域に根ざした大学として、近隣の町内会と交流する機会を大切にしてきた。外国人留学生にも、日本の文化に触れる機会として近隣町内会の諸行事を紹介している。土樋キャンパスに隣接する田町町内会と子供会が共催で2017年7月9日(日)、2018年7月15日(日)に開催した「大日堂お祭り」には、交換留学生がそれぞれ3名、2名参加し、法被

姿で地域の方々とともに神輿を担ぎ、日本のお祭りを楽しんだ。

さらに、宮城県県南のさくら青年会議所との交流を春または秋に長年実施してきた。2018年4月14日（土）には、交換留学生21名が大河原桜まつりで賑わう会場を一望する寺院（繁昌院）にて、書道や茶道・座禅を体験し日本文化の理解とさくら青年会議所メンバーとの交流を深めた。

3) わが街フェスティバルの開催

2017年9月23日、2018年11月23日に、土樋キャンパス90周年記念館大ホールにおいて「わが街フェスティバル」を開催した。同イベントは土樋キャンパス周辺地域住民とともに音楽などを通じて街を盛り上げ、大学と地域のコミュニケーションを深めていくことを目的としてスタートし、2012年度から開催している。毎回多くの出演者と来場者が交流のひとつを楽しんでいる。

4) キャンパス見学ツアー@土樋の開催

土樋キャンパスの見学ツアーは、市民との交流や地域連携の一環として、本学の歴史的建造物や施設について広く知ってもらうために、五橋地域包括支援センター及び仙台市社会福祉協議会との協働で企画したものである。2017年6月17日、10月27日と2回開催し、参加者は土樋キャンパス周辺地域の方々を中心に両日で80名であった。また当日は、本学学生も参加した。ツアーでは、国の重要文化財や登録有形文化財に指定された建物の歴史や魅力の紹介、東北学院史資料センターの見学、キャンパス内の便利スポット紹介、図書館の利用紹介等を行った。2018年度においても5月25日、7月5日の2回開催した。

⑬ 公開講座

本学は、大学の教育・研究の成果を広く地域社会に還元し、社会人の教養を高め、文化の向上に資することを目的として、主として学部・学科及び研究所主催による各種の公開講座を開講している。2013年度は、公開講座、学術講演会、シンポジウム、オープンカレッジなど単一講座27件、複数講座8件（53回）、合計35件（80回）開講した。2014年度は、公開講座、学術講演会、シンポジウム、オープンカレッジなど単一講座39件、複数講座13件（68回）、合計52件（107回）開講した。2015年度は、公開講座、学術講演会、シンポジウム、オープンカレッジなど単一講座26件、複数講座16件（66回）、合計42件（92回）開講した。2016年度は、公開講座、学術講演会、シンポジウム、オープンカレッジなど単一講座（土樋キャンパス38件、多賀城キャンパス2件、泉キャンパス6件）計46件、複数講座（土樋キャンパス7件、多賀城キャンパス2件、泉キャンパス3件）計12件（63回）、合計58件（109回）開講した。2017年度は、公開講座、学術講演会、シンポジウム、オープンカレッジなど単一講座を計32件（土樋キャンパス25件、多賀城キャンパス2件、泉キャンパス5件）、複数講座を計14件82回（土樋キャンパス8件、多賀城キャン

ンパス 2 件、泉キャンパス 4 件) 開講 (合計 46 件 114 回) した。2018 年度は、公開講座、学術講演会、シンポジウム、オープンカレッジなど単一講座を計 51 件 (土樋キャンパス 43 件、多賀城キャンパス 2 件、泉キャンパス 6 件)、複数講座を計 15 件 84 回 (土樋キャンパス 9 件、多賀城キャンパス 2 件、泉キャンパス 4 件) 開講 (合計 66 件 135 回) し、延べ約 6,000 名の一般市民などに多様な学習機会を提供した。

⑭ 音楽への招待「時代の音」レクチャーコンサート・シリーズ

本学では、「世界の第一線で活躍する音楽家を招き、心躍る演奏、そして歴史的背景などのレクチャーで紡ぐコンサートシリーズ」をコンセプトとした「時代の音」を 2009 年度から河北新報社と共同で開催している。

⑮ 連続講座「震災と文学」

地域共生推進機構では、2013 年度から、地域貢献活動の一環として、東北地方出身の作家や詩人などによる連続講座「震災と文学」を開講している。本講座は、震災や学術研究、そして文学という芸術を組み合わせたユニークな講座であり、本学が発刊する総合学術誌『震災学』の編集等を担当する有限会社荒蝦夷と協力して行っている。2013 年度は 5 回、2014 年度から 2017 年度まで 10 回、2018 年度は 3 回の講座を開講した。なお、本講座は、2017 年に実施された公益財団法人大学基準協会からの実地調査において東日本大震災による被災大学の取り組みとして高く評価された。

⑯ 『震災学』の発行

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から年月が経ち、被災地から離れた都市部では関心が薄れつつある。本学の責務は、被災地に所在する大学として中長期的に震災と向き合うことである。そこで、「学問」を超えた多角的な視点から震災を省みたときに、震災や被災地が発する「問い」を考えることを目的として、様々な分野の有識者による総合学術誌『震災学』を 2012 年度から年 2 回発刊している。全国各地で活躍する方々の寄稿のほか、河北新報社との連携によるシンポジウムの再掲など、多様な構成となっている。なお、2018 年度から、各巻の内容充実に伴い、年 1 回の発刊とした。2019 年 3 月末に第 13 号を発刊した。

2-11 教育・研究環境

本学では、教育・研究環境を整え教育・研究の推進に向けて外部資金の獲得促進や本学独自の助成金等、様々な方策を講じている。以下では、2013～2018 年度に新たに行われたものを示す。

① 大学改革推進等補助金 「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」

41～42 頁参照

文部科学省では、大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的として、2013年度から大学改革推進等補助金「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の公募を開始している。本学は、2014年度の同事業に申請し、採択された。補助事業期間は2014年度～2018年度である。

本学が実施する事業は、大震災以前から多様な地域課題を有し、加えて東日本大震災からの復興という大きな課題を背負った仙台市と多賀城市を対象地域に、学長のリーダーシップのもと、地域連携を一層充実させ、地域課題を教育（アクティブ・ラーニング）・研究に直結させ、その成果を再度、地域課題の解決につなげていくという、地域教育・研究と社会貢献を継続的・発展的に好循環させる一貫体制（地域共生教育）の構築を目指すものである。

② 大学教育再生戦略推進費 「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」

41～42頁参照

文部科学省では、2013年度から「地域のための大学」として、各大学の強みを生かしつつ、大学の機能別分化を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成に取り組んできた「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を発展させ、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積（2014年度と比較して、事業最終年度に県内就職率の10%向上が目標値となっている）を目的として、2015年度から「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の公募を開始した。本学は、2015年度から公募を開始した同事業に、宮城県内の12の高等教育機関、2自治体、複数企業・団体（以下「事業協働機関」という。）と協働して申請し、「みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成」事業で採択を受けた。補助事業期間は、2015年度～2019年度である。

③ 私立大学研究ブランディング事業

文部科学省が2016年度から実施する「私立大学研究ブランディング事業」に、本学は4つの研究機関（ヨーロッパ文化研究所、キリスト教文化研究所、東北学院史資料センター、東北文化研究所）が中心となって申請し採択された。事業名は「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」である。補助事業期間は2016年度～2020年度であったが、文部科学省側の事情により2019年度で打ち切りとなった。

本事業は、時代と地域による人間中心の人文学（人間学）研究と共に、中世にさかのぼる神中心の神学に基礎を置く総合的な神学の研究の拠点を確立することを目的としている。東北学院は、建学の精神に深い関わりのあるキリスト教文化財を多数有している。最近の調査で、1932年シュネーダー院長のときに完成したラーハウザー記念東北学院礼拝堂に設置

された「キリスト昇天」のステンドグラスが、わが国に現存する唯一のヴィクトリア朝の重要工房、ヒートン・バトラー&バインの作であることが判明した。本研究事業は、具体的にはこのステンドグラス研究を中心として、広く近代欧米における中世復興について、そして、わが国のキリスト教受容をこの観点から調査研究するものである。それによってラーハウザー記念東北学院礼拝堂全体の文化財としての価値をさらに高めるとともに、礼拝堂を広く市民に公開することによって、その文化的価値と意味を発信し、仙台における東北学院のプレゼンスを高めることを目的としている。

④ 私立大学等改革総合支援事業

23～24 頁参照

⑤ 学長研究助成金

1) 地域に関わる研究又は知的支援活動

本学は、2012 年度に、「東日本大震災からの復興」をテーマに教員の学部横断的な研究や知的活動を支援することを目的に、「学長研究助成金」制度を設けた。この制度は、教員による研究がこれまで単一学部内だけで行われていた現状を打破するという意味合いを持っている。2017 年度には、地域課題の抱える問題がますます多様化し、複雑化の様相を深めていることから、東日本大震災からの復興に限定せず、広く「地域に関わる研究又は知的支援活動」をテーマとする「学長研究助成金」制度とした。

このテーマに基づく教育・研究活動によって、次の 3 つの効果を生み出すことを目指している。ア. 東北学院大学における地域に関わる創造的かつ領域横断的な知的活動を活性化。イ. この活動によって、地域・社会貢献に寄与する。ウ. この活動によって、地域における東北学院大学のプレゼンスを向上させる。

2017 年度は、6 件の申請に対して 5 件の研究課題を採択した。2018 年度は、6 件の申請に対して 4 件の研究課題を採択した。

2) 職員業務研究

大学のグローバル化時代を迎え、各事務部署に発生する問題や求められるニーズも多様化してきている一方、複数部署に関わる複雑な業務に対しては、部署間での連携による問題解決を積極的に進めていこうとする事務職員個々人のスキルの向上も求められている。2014 年度から、こうした事務職員が日頃より課題視している関連業務や共通の課題に対し、共同研究により課題解決につなげるための「学長研究助成金（職員業務研究）」制度を設けた。これにより、次の 3 つの効果を生み出すことが期待される。ア. 東北学院大学事務組織における横断的な課題解決活動を活性化。イ. 東北学院大学における SD 活動を活性化。ウ. 東北学院大学職員の課題解決スキルを向上させる。

2014 年度は 7 件の申請に対し 4 件の採択、2015 年度は 2 件の申請に対し 1 件の採択、

2016年度は5件の申請に対し5件の採択、2017年度は1件の申請に対し採択なし、2018年度は申請がなかった。

3) 学長教育改革研究助成金

高等教育改革の必要性や質保証の重要性が社会的に意識されるようになり、大学での教育改革が強く期待されていることを受けて、大学を取り巻く厳しい状況に対応するための一環として、2016年度から「学長教育改革研究助成金」制度を設けた。この制度は、本学の教育・研究の喫緊の課題や大学全体の問題の解決を図ることを目的とし、以下の3つの効果を生み出すことを目指している。ア. 本学の教育・研究の更なる改革意欲を充実させ、本学の喫緊の課題や大学全体の問題解決を図る。イ. この研究活動によって、本学の教育・研究活動の充実に寄与する。ウ. この研究活動によって、人材育成への貢献が期待され、本学のプレゼンスを向上させる。2016年度は、5件の申請があり3件を採択した。2017年度は、4件の申請があり3件を採択した。2018年度は、5件の申請があり4件採択した。

2-12 図書館

① 機関リポジトリの構築

学内学術情報の収集・電子化と学外への発信（機関リポジトリの構築）」は、図書部を事務局としてリポジトリ規程及びリポジトリ運営委員会規程を制定し、学術情報の収集を行い、2014年4月から本運用を行っている。

② 「アクティブ・コート」の開設

2015年3月6日、図書館利用サービスの向上の一環として、中央図書館1階を部分改修し、学生の主体的協同学修空間「アクティブ・コート」を開設した。「アクティブ・コート」は、従来の図書館とは趣を大きく異にして、学生が主体的に「調べる」「議論をする」ことを通して新たなひらめきや知見を得ることを可能にする空間である。この空間は、大きく分けると2つのスペースで構成されている。1つは「プレゼンテーションスペース」と呼ばれ、壁面にホワイトボード・プロジェクタ（電子黒板機能付き）と可動式イスを備え、「発信」がテーマのスペースで、ゼミ単位・友人同士でのプレゼンテーション練習などに利用できる。もう1つは「オープンエリア」と呼び、入館ゲートを入ってすぐに、6人掛けの大型タイプの机と可動式イスを3セット設置し、ホワイトボードのほか、電子黒板を備えている。さらにその奥には、可動式の小型机とイスを備え、自由にレイアウトを変えることで、少人数から大人数まで人数に合わせてフレキシブルに利用ができるようになっている。「オープンエリア」には、学生の学修のための辞典（事典）や論文作成のための図書、雑誌、新聞等を従来どおり利用しやすい位置に配架した。

このような「アクティブ・コート」は、能動的学修（アクティブラーニング）による課題解決の場としての性格上、静寂を保持することは不可能なエリアである。図書館利用者の

目的に応じた快適な学修環境を提供するため、中央図書館では 2015 年 7 月 21 日よりゾーニングの導入を実施した。ゾーニングは自由に議論できるエリア（静寂レベル 1）、議論する声が多少届くがパソコン持ち込みが可能なエリア（静寂レベル 2）、議論する声はほとんど聞こえず静かに読書や学習に集中できるエリア（静寂レベル 3）、特に静寂を必要としている利用者向けエリア（静寂レベル 4）の 4 段階に区分した。

③ 新図書館システムの稼働

2016 年 10 月、図書館サービス向上の一環として、既存の図書館システムを一新し「新図書館システム（システム 2016）」が稼働を開始した。システム 2016 は検索機能の強化を図っており、デザイン及び性能が一新されたオンライン蔵書検索（OPAC）や個人アカウントサービス（MyLibrary）などを提供している。検索エンジンが一新された OPAC は、学内の全所蔵が検索可能なだけでなく、国立情報学研究所や Google books などの外部データベースに対してもシームレスに検索を行うことが可能である。また、画面レイアウトが一新され、簡易的な絞り込み機能や類似資料のサジェスト表示、Amazon カスタマーレビューの表示機能など、各種ユーザーニーズに応じた機能を提供している。なお、MyLibrary からはオンライン上での文献複写依頼、図書の貸出予約、利用履歴の参照などが可能である。また、システム 2016 では電子資料に対する検索機能を強化すべく、新たな統合検索サービス（ディスカバリーサービス）を導入した。当該サービスは本学の契約する約 25,000 タイトルの電子ジャーナルや約 2,000 タイトルの電子ブック、その他データベース等の電子資料に対し一括検索を行うことが可能であり、複雑化していた電子資料検索の窓口を一元化した。

④ 東北学院大学学長杯争奪ビブリオバトルの開催

知的書評合戦「ビブリオバトル」は、「本と通じて人を知り、人を通じて本と出会う」「書評を聞くことで、読書のきっかけをつかむ」などを目的として全国的に開催されてきた。2013 年度から本学でも全学的イベントと位置づけ、「学長杯」と称して中央図書館を会場にビブリオバトルを開催している。2018 年度まで継続的に行われ、6 回を数えている。

2-13 国際交流

① 国際交流協定の締結

2013 年度は、ブルガリア「ソフィア大学」、韓国「梨花女子大学校」、ベトナム「ノン・ラム大学」、タイ「コンケン大学」の 4 校と、2014 年度は、台湾「天主教輔仁大学」「明道大学」の 2 校と、2015 年度は、韓国「韓国外国語大学」、中国「北京第二外国語大学」の 2 校と、2016 年度は、台湾・世新大学と、2017 年度は、韓国の「東義大学校」「ソウル神学大学校」の 2 校と、2018 年度は、米国「ランカスター神学校」、ドイツ「アウグスブルク大学」「ルートヴィヒスハーフェン経済大学」、韓国「全南大学校」の 4 校と国際交流協定を締

結した。これにより、目標 30 大学に対して現在は 27 大学（12 カ国）となった。

② ASEAN からの留学生拡大—ラオスの大学生受入れ—

2015 年 1 月 19 日に、法律を学ぶ JENESYS2.0 での招聘団が、本学学生との間で英語と日本語を交えて国際交流を行った。学生の自主的な計画と参加を促したもので、学生が主体となって、日本の法制度の紹介や日本の学生生活・就職の紹介が行われた。併せて、日本の大学での昼食体験などを行い、学生間の交流ができた。

③ 交換留学生受入れプログラムの改編

2016 年度に、日本語のコースを中心とするプログラムを、①「日本研究プログラム」4 月・9 月開講、②「経済学&日本語プログラム」9 月開講、③「集中日本語プログラム」7 月開講の 3 つのプログラムに改編した。

2-14 入試改革

① 新しい「アドミッション・ポリシー」の策定と実行

2016 年度に改定された「入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）」に基づいて、『受験ガイド』及び『募集要項』に、各学部における「アドミッション・ポリシー」の項目が 13 種類の入学試験制度とどのように対応しているのか、「重要評価点」として一覧表にまとめ、また各学科における「理念・目的」及び「求める学生像」を明記することにより、本学が志願者・入学者に求めている水準・内容の周知を図った。

② アドミッションズ・オフィスの設置

2018 年度に、入試部は、従来の入試課をアドミッションズ・オフィスに名称変更し、組織についても入試実施係（募集要項の作成、大学・大学院の入試の準備等を分掌）・入試システム係（入試システムの構築と運用、入試結果データの調査、各種統計資料の作成等を分掌）・入試企画係（入試制度・学生募集に関する企画立案、選抜方法の評価・検証等を分掌）・入試広報係（学生募集活動、出張授業・授業体験・施設見学等を分掌）の 4 係制へ移行した。また、入試部職員の中から学長が委嘱するアドミッション・オフィサーの職を新たに設け、入試制度・学生募集の企画、選抜方法の評価・検証、高大接続に関する調査・企画・改善等に従事する体制を整えた。

③ 大学入試制度改革への対応と志願者確保の方策

文部科学省が進める高大接続システム改革では、学習者が身に付けるべき学力の三要素を示した上で、それらを多面的・総合的に評価する選抜制度の導入を謳っている。そこで入試部では、2018 年度に、「高大接続改革の実施方針等の策定について」（文部科学省、2017 年 7 月 13 日）を踏まえ、①入試改革ワーキンググループ等において協議を重ね、2020 年

度 TG 推薦入試における志望理由書を改定した（アドミッション・ポリシーに対する理解の重視と、探求学習に関する一枚型ポートフォリオの導入）。また、高校ごとに延べ志願者数の推移、入試制度別入学者の単位取得状況、推薦入試制度の現状などについて継続的な分析を行い、志願者確保の方策と 2021 年度入学者選抜制度のあり方について検討した。これに基づいて、②2021 年度入学者選抜制度の概要をまとめた「東北学院大学 2021 年度入学者選抜について（予告）」を作成した。

④ Web 出願方式の推進

2018 年度入試の後期日程（2018 年 3 月）から Web 出願方式を導入した。2019 年度入試からは前期日程でも Web 出願方式を導入した。一般入試・センター試験利用入試については Web 出願方式と従来型の書類出願方式を併用し、英語外部試験利用入試については Web 出願方式のみを採用している。2019 年度一般入試・センター試験利用入試の Web 出願方式での志願者は 96.96%、書類出願方式は 3.04%であった。このように一般入試・センター試験利用入試において書類出願方式が 5%を下回ったことから、2020 年度の一般入試・センター試験利用入試については Web 出願方式のみとすることにした。

⑤ 青函進学フェアの実施

2015 年夏より、広報部・学長室との連携事業である北海学園大学との合同企画「青函進学フェア」（函館市・青森市における入試説明会）を継続して実施している。この取り組みは、地区入試会場の告知と北海道、北東北地区での減少傾向にある受験生対策のための入試広報イベントである。

⑥ 厳格な入学定員管理

2015 年度に、文科省は収容定員 8000 人以上の私立大学に入学定員の管理の厳格化を求めた。これまでの入学定員超過率は 1.2 倍に設定されていたが、今後は入学者が 2016 年度は定員の 1.17 倍、2017 年度は 1.14 倍、2018 年度は 1.10 倍以上になると、私学助成金が 0 になる仕組みを導入した。2019 年度からは入学者は定員通り（1.0 倍）とし、定員を上回れば助成金を減額する仕組みを導入する予定であったが、文科省は、これまでの効果を見て 2019 年度から 3 年間は入学定員超過率を 2018 年度と同様に 1.1 倍までとするとした。

本学は、これに対応して入学定員超過率を 2015 年度入試では 1.16 倍、2016 年度入試では 1.14 倍、2017 年度入試では 1.09 倍、2018 年度入試では 1.06 倍、2019 年度入試では 1.03 倍に抑制している。

⑦ 入学定員増減措置

2017 年度に、入学定員の厳格化措置に対応して、文学部及び工学部以外の各学部・学科において 10%の定員増を行い、文学部では英文学科定員の 50 名減、総合人文学科定員の

20名増、歴史学科定員の20名増を行うとともに50名定員の教育学科を新設し、全学の入学定員総合計を2656名（前年度比201名増）とすることにして文科省に申請し認可された。

⑧ 学部における新たな入試の導入

2014年度では、「資格取得による推薦入学試験（公募推薦B日程）」を導入した。2015年度では、地区入試会場に函館を追加し、旭川を廃止し、英文学科夜間主コースの募集を停止し、社会人特別入試はA・B日程を廃止して3月のみの試験とした。2016年度では、一般入学試験前期日程における地区入試について、これまで初日の全学部型のみを実施していた函館・札幌の両会場を、他の地区会場と同様に3日間実施することにした。2017年度では、一般入学試験、センター試験利用入学試験の全日程において、WEB出願を実現した。2018年度では、文学部に英語外部試験利用入試を導入し、一般入試前期日程・後期日程とセンター試験利用入試前期・後期において新たに「志望理由書」の作成・提出を義務づけた。

2-15 東日本大震災と東北学院大学

① 文化財レスキュー活動

本学では、震災直後から被災文化財等救援事業に関わりを持ち、牡鹿半島に所在して被災した鮎川収蔵庫のコレクションを受け入れた。

② 東北学院デジタルアーカイブ『東日本大震災の記録 Remembering 3.11』

本学震災アーカイブプロジェクトの一環として「一次資料」の散逸を防ぐことと、教職員の記録を残すことを目的に着手したもので、約1年の制作期間を経て創立127周年（2013年）5月15日に公開した。

③ 震災記録集『After 3.11 東日本大震災と東北学院』

『東日本大震災の記録 Remembering 3.11』の公開準備と平行して進めた震災アーカイブプロジェクトの最終的なまとめとして、『After 3.11 東日本大震災と東北学院』を刊行した。『Remembering 3.11』の一次資料収集作業の過程で得られた法人各校、各部署のインタビューと証言記録を基に、法人全体における発災直後から2013年3月に至るまでの丸2年間の記録を時系列にまとめた書籍として、2014年3月1日に発売した。また、編集作業の過程で実施した本法人役職者のインタビュー証言（その際収録した動画は『Remembering 3.11』でも公開）も盛り込み、書籍の完成と合わせて証言集DVDも制作した。本法人における東日本大震災の集大成ともいえる記録集である。

④ 災害ボランティア活動

本学は、東日本大震災発生後の2011年3月29日に「東北学院大学災害ボランティアス

ーション」を設立した。設立以来、地域情報の集約と共有を行い、支援を必要とする人に学生と教職員が直接支援するとともに、市町村災害ボランティアセンターや全国の大学と連携して、被災地支援のための広範な活動を展開している。また、地域貢献だけではなく、学生にボランティアという新しい学びと成長の場を提供している。

さらに、東日本大震災を契機に全国 90 大学が加盟する「大学間連携災害ボランティアネットワーク」を本学を事務局として設置し、東日本大震災における復興支援活動や他地域の災害などにおける復旧・復興支援活動を恒常的に行っている。

2-16 管理運営

① 職員人事制度

本院の組織強化と人材育成を目的に、全教職員を対象とする人事制度の構築を計画し、2014 年度に第一段階として「職員人事制度」を導入した。「職員人事制度」は 7 つの機能により構成しているが、まず「職能等級」、「目標管理」、「人事評価」に限定して導入した。導入にあたっては、管理職と監督職を対象とする研修会を複数回実施し制度運用にあたっての理解促進を図り、外部機関での業務経験を通して資質の向上を図ることを目的に制度化した。

② 事務職員の出向

2008 年度以降、外部機関への職員派遣を人材育成プログラムの一つとして位置づけ、毎年 1 名の職員を出向として外部機関に送り出してきた。2013 年度は日本私立学校振興・共済事業団に、2014 年度は仙台商工会議所に、2015～2017 年度は公益財団法人大学基準協会に派遣した。また、2016 年度より青山学院大学と職員人事交流を短期間ながら実施している。

③ 大学事務組織の改編

2013 年度は、①国際交流部国際交流課に泉キャンパス国際交流係を新設し、②総務部研究機関事務課の泉キャンパス体育事務係を学生部学生課学生・体育事務係、多賀城キャンパス学生・厚生・体育事務係、泉キャンパス学生・厚生・体育事務係に改編し、③学務部大学院課を廃止し、学務部教務課学部・研究科係に改編し、法科大学院係を新設した。なお、大学院課の業務は教務課のほか、学事課、学生課、入試課、広報課等が分掌する。

2014 年度は、①大学施設部を法人事務局施設部に改編し、②総務部宗教事務課を廃止し、総務部総務課庶務・宗教係に改編し、③就職部就職課を就職キャリア支援部就職キャリア支援課に改称し、④教職課程センターの泉キャンパスにおける事務を総務部研究機関事務課泉キャンパス実験実習指導・研究機関事務係から学務部教務課泉キャンパス学務係へ移管した。2015 年度は、①学長室に地域共生推進課を設置し、②学事課にラーニング・コモンズ係を新設した。2016 年度は、①学生部に学生総合保険支援課を設置し、②学長室にイン

ステイテューショナル・リサーチ（IR）課を設置した。2017年度は、これまで学長室学長室事務課の事務分掌であった「研究助成係」を総務部研究機関事務課に移管した。2018年度は、入試部入試課を入試部アドミッションズ・オフィスに改称した。

④ 統合事務システムの稼働

2013年度に構築が完了した事務情報システムが、2014年4月より本格的に稼働し、学生や教職員が利用を開始した。これにより、旧統合事務システムから新統合事務システムへ完全に移行した。

⑤ 特任講師制度

特任講師制度とは、各学部の専任教員数を確定するための基準となる教員基準値の表とは別枠で、英語教育センター、ラーニング・コモンズ、宗教音楽研究所、地域共生推進機構等の設置目的に即したニーズに応じるため、全学で専任教員総数の5%以内という総枠の範囲において、有期雇用（1期3年の任期制、更新は2回まで）の特任講師（特任教授・特任准教授・特任助教）を採用し活用する制度である。

2014年度からのCOC事業、2015年度からのCOC+事業では補助金を活用してそれぞれ3名、5名の特任講師を採用し事業運営にあたってきた。2016年度からは、学内組織の改編に伴って、英語教育センターには5名、ラーニング・コモンズには2名、宗教音楽研究所には1名の特任講師枠を定め運用している。当初の特任講師がすでにその任を終えて後任者が不在となっている学生総合保健支援センターや就職キャリア支援部の例もあり、現在、改めて特任講師に関する再検討の作業に着手している。

⑥ 副学長の増員

大学に対する社会からの要請が増えていることに伴い、果たすべき業務量も増大し、これまでの総務担当、学務担当という2人の副学長体制では職責を十分に果たせない状況が現れてきた。また、大学基準協会による認証評価に伴う自己点検・評価活動の過程で、点検・評価活動を推進し、内部質保証体制を構築するために大学全体に対して積極的に啓発する役割の必要性が認識されるようになった。併せて、文部科学省による大学改革の要請に対応するために、本学における改革を推進する役割の必要性も強く認識することとなった。このため、2017年度から副学長を増員し、新たに点検・評価担当として3人体制とした。この結果、2017年度公益財団法人大学基準協会の認証評価受審の際にスムーズに対応することができた。

⑦ 教学組織の見直し（大学の将来像）

2018年1月5日に学長から発信した「東北学院大学の学部学科の新たな構想について」での「(1) 学生定員増は考えない」「(2) 教員数は増やさない」「(3) 新しい組織が学生を受

け入れる時期は2023年4月を目標とする」を前提として、同年に開催した将来構想検討ワーキンググループでの検討を経て、2018年12月から「情報学部（仮称）設置検討会議」を、2019年1月から「地域学部（仮称）設置検討会議」をそれぞれ4回開催し、新学部設置の可能性を検討した。これらを教学改革推進委員会で審議した上で、2019年3月に以下のような学長による「東北学院大学の将来像」を示す文書が各学部教授会及び全学教員会議で発表された。

2-17 歴史的建造物の重要文化財・有形登録文化財への登録

① 旧宣教師館（デフォレスト館）の重要文化財指定

2013年3月29日付けで国の登録有形文化財に登録されていた本学土樋キャンパスのデフォレスト館（旧シップル館）が、2016年7月に「東北学院旧宣教師館」として国の重要文化財（建造物）に指定された。国内に残る外国人宣教師住宅の最初期の事例として希少であり、高い歴史的価値を有していることが評価された。

② 本館等の登録有形文化財登録

2014年12月に、土樋キャンパスの本館、礼拝堂、大学院棟も新たに登録有形文化財に登録された。これら三つの建物の建築と配置は、第二代院長シュネーダーが描いたマスター・プラン、すなわち「本館を中央にして、東側に図書館、西側に講堂を兼ねた礼拝堂を置き、知識の訓練と霊性の訓練の実現を目指す」に基づいている。

2-18 広報・情報公開

① プレゼンス広報

2013年度は、青山学院大学との合同によるオープンキャンパス告知及び入試広報イベントをJR仙台駅構内において開催した。

2014年度には、文部科学省が大学コミュニティの自主的・自律的に運営する情報発信基盤として整備を提言・実施した「大学ポートレート（私学版）」に参加し、情報公開に努めている。また、受験生確保のために新聞社発行の進学系MOOKにも出稿し、全国での知名度向上を図った。さらに、6月に青山学院大学・北海学園大学と、合同オープンキャンパス告知及び入試広報イベントを、JR仙台駅構内で開催した。

2015年度には、マスコミとの良好な関係を構築するため、定例的な記者発表と対話に着手した。10月8日には、仙台国際ホテルを会場に大学とメディアとの懇親会を開催した。新聞、テレビ、業界紙、地元情報誌、月刊誌や教育系雑誌の報道・記者、43名が来場し、大学側から大学の近況と今後の予定についてステイトメントを発信した。第2弾として、土樋キャンパス「ホーイ記念館」の献堂式に案内し、多数の地元テレビ、新聞、業界紙、雑誌の関係者の取材を受けた。また、6月には北海学園大学との共催による進学相談会「青函進学フェア」を開催した。

2016年度は、創立130周年の年でもあり、創立記念日の朝日新聞・河北新報・読売新聞に全15段の全面広告掲載を実施した（朝日新聞：静岡県・新潟県以北版、読売新聞・河北新報：東北6県版で掲載）。また、JR東日本の車内誌『トランヴェール』12月号に東北学院の130周年の歴史と一般入試告知を掲載した。さらに、12月に本学の各キャンパスの空撮を実施した。

2017年度は、大学のホームページを全面的にリニューアルした。また、新設された教育学科の広報及び2年目となった私立大学研究ブランディング事業のスタンドグラス修復・

再設置に関する記録及び広報を行った。さらに、仙台に拠点を置く東北楽天ゴールデンイーグルスに硬式野球部出身の岸孝之投手が移籍してきたことから、同球団との間で協賛し kobo パーク宮城にデジタルサイネージを出すことにした。これを機に学生招待試合「東北学院大学デー」などの企画を実施した。11 月には、『週刊 AERA』の目次対向ページ（A4 1 頁）に大学土樋キャンパス本館及び礼拝堂を中心としたプレゼンス広告を掲載した。12 月には読売新聞（東北 6 県・北海道）に大学近況、大学の概要、同窓生のメッセージ、クリスマスメッセージなどを掲載し、入学試験出願に向けてアピールした。

2018 年度は、大学キャンパス整備に関してホームページ上で 7 月と 12 月に「東北学院大学アーバンキャンパス計画」の概要を更新し公開した。また、2017 年度に引き続き東北楽天ゴールデンイーグルス、ベガルタ仙台のスポンサー契約を継続し、球場・スタジアムでのアピールを実施した。さらに、現在ネット広報で主流となっている配信動画の制作を行った。国内でも屈指のドローン映像制作プロダクションの協力のもと、2018 年度初頭の「桜の 3 キャンパス」を収めた 1 本 120 秒のショートムービーを 3 キャンパス分制作し、ホームページで 9 月から公開した。

3 医学部新設の検討

2013 年 9 月、一般財団法人厚生会役員会が、医学部設置に関する連携大学として、東北福祉大学だけでなく他の複数の大学をも考慮することを決定し、その旨の通知を学校法人東北学院が受けた。10 月 9 日、仙台厚生病院理事長目黒泰一郎氏が来学し、仙台厚生病院の医学部新設構想の概要について説明した。併せて、連携大学の候補の一つとして、東北学院大学が打診を受けた。

12 月 5 日、学校法人東北学院は、2013 年度第 7 回理事会において、議事終了後、東北学院大学医学部新設の可能性について意見交換を行った。そして、医学部新設に関する詳細な情報交換を行うために、仙台厚生病院に医学部新設に関する連絡協議会の設置申し入れを決定した。同日、仙台厚生病院にその旨を通知し、受諾された。

この間、大学内では、理事会による教職員に対する説明会が複数回行われるとともに、教務部門の責任を預かる 6 学部長による質問書・反対声明が出されるなど、医学部設置についての喧しい状況が生じていた。

2014 年 1 月 9 日、学校法人東北学院は、2013 年度第 9 回理事会において、上記の連絡協議会設置を正式に承認し、その協議内容を踏まえ、東北学院大学医学部新設に関する協議を仙台厚生病院に正式に申し入れることを決定した。それ以来、設置すべき医学部の構想について、12 回にわたり協議を重ねてきた。しかし、本学と仙台厚生病院との間には、医学部の理念・目的や教育方針、医学部と大学病院のあり方などに関して、なお検討しなければならない事項が多く残されており、2014 年 5 月に文部科学省へ詳細な設置構想を提出しなければならないという時間的制約がある中で、現在の協議の状況では、これに間に合わせて

協議をまとめることは極めて難しいとの認識を共有するに至り、2月25日、連絡協議会での協議を終了することに仙台厚生病院と合意した。2月28日にこの旨をプレスリリースし、同日、本学土樋キャンパス本館会議室で記者発表を行った。

4 おわりに

学長 松本 宣郎

学長の任期を終えるにあたって、6年間の本学のあゆみを冊子にまとめていただいた。企画編集にあたられた原田善教副学長（点検・評価担当）、実務にあたられた方々に感謝申し上げます。学長としての振り返りは「1. はじめに」において十分に記させていただいた。ここではこれからの本学の課題、と私が考えることを記したい。私がし残したことを押しつけるのではなく、すべては新学長を支える大学構成員の皆さんへ、よりよき東北学院大学の将来のための願いである。

五橋キャンパス建設が、本学にとって喫緊の重大事業となる。現在のところ、工事計画と財政計画のハード面では若干の遅れはあるものの順調に進んでいる。これからピッチを上げなくてはならないのは、運営開始時に学生への授業、諸支援、課外活動支援を直ちに提供できる、広範にわたる準備である。

TG ベーシックの授業を五橋、土樋両キャンパスでどのように展開するか、そもそも工学部の学生も含めて、教養教育カリキュラムの再編が必要になるだろう。

6千人の学生を迎え入れる。近隣町内会ならずとも懸念材料を想定し、対策を立てておかねばならない。キャンパスは全面禁煙か喫煙室設置か、工学部学生会と文系学部（土樋・泉）学生会の統合問題、また課外活動での両体育会の統合問題、運動施設は泉キャンパスとしてシャトルバスの必要性は、泉・多賀城両寄宿舍は閉鎖するのか、代替寄宿舍は全面外注化か、など。

大学礼拝は土樋キャンパスと五橋キャンパスの2カ所で行うことになるだろうが、五橋キャンパスのホールの収容人員に不安がある。これら礼拝に関わる諸問題については私が院長任期の間に、ある程度の方向性を示しておきたい。

教学改革推進委員会には、課外活動つまりスポーツ系（体育会）について将来大学としてどう方向性を打ち出すかについてのワーキンググループと、本学の入試戦略についてのワーキンググループが設けられている。いずれも設置後2年以上経過して、中間報告も十分になされていない。ことに入試戦略については踏み込んだ論議と対策が急がれる。

学生への丁寧な対応を叫びながらも、クレームを聞かされることや実際にトラブルが生じることが多い。基本は学生に、その人格を尊重して対応することである。学生部・学務部にとどまらず、全教職員に繰り返し訴え続けなくてはならない。

具体的に過ぎはするが、「休学」時に学生が負担する金額を（最近若干減額したが）さらに軽くさせてやりたい。本学は異常に負担額が大きいのではないかと思われる。さる関西方面の私立大学は5万円と聞く。

まだ付言すべき事柄があるようにも思うが、「おわりに」の趣旨を逸脱しつつあるようであり、擱筆することとしたい。

東北学院大学が、創立 150 年、さらにその先をも見据えて、建学の精神を堅持し、神の御手に守られて、教養ゆたかに品格を持つ人材を輩出し続けていくようにと切に願っている。

5 あとがき

副学長（点検・評価担当） 原田善教

松本宣郎学長の6年間（2013～2018年度）を改めて振り返ると、実に多くの改革がなされてきたことが分かる。本冊子では、この6年間に行われた様々な改革のそれぞれを羅列するのではなく、インパクトの大きかった事柄を順にまとめることにした。その多くは法人による各年次の『事業報告書』をベースにまとめたが、いくつかは新たに追加したものもある。以下では、その中でポイントなる点を4点にまとめ、あとがきとしたい。

第一に、大学改革との関係で最も大きな変革は、ガバナンス改革である。文科省による学校教育法の改正や社会・企業からの大学に対する厳しい目もあり、この改革は不可避であった。本学はいち早く組織改正を行い、学長ガバナンス改革を推し進めることができた。これまでの大学自治という観点から様々な反対意見が表明されたことは言うまでもないが、規程上すべてがトップダウンによる決定による仕組みであるにしても、それに至る過程（教授会等）で十二分に審議が尽くされることが前提されていることを認識した上での仕組みであることから、多くの教職員の理解を得ることができたと思われる。もちろん、この背景には松本学長の人柄が大きく作用していたことは間違いない。この点は、松本学長なら大丈夫だと思うが、一般的に誰でも大丈夫、強権的なことはしないというわけではないだろうから、その時にはどうするのかという意見が多く寄せられたことから明らかであった。しかし、教学改革推進委員会、教授会等での十分な審議を通じて全学合意を得る体制に理解が得られ、6年間この体制が大きな問題なく維持・継続されてきている。

第二に、法人との協働作業によって、中長期計画（TG Grand Vision 150 : TGGV150）が策定されたことがある。これまでは3年から5年間の中期達成目標を各部署が設定しその実現を図る体制の構築を進めてきたが、2036年の創立150周年に向けて1期5年の4期からなるTGGV150という長期的な視点に立つPDCAサイクルを回していく体制の構築へと転換したのである。長期的視点からの計画立案と実行という本学がこれまで行ったことのない体制を構築することによって、長期的視点に基づくPDCAサイクルを本学の教職員に常に意識させることになったのである。この点は、現在第I期の3年間が経過した段階にあり、全体見直しと第II期の目標設定がなされているところである。

第三に、大学キャンパス整備事業としては、2016年土樋キャンパス北側のホーイ記念館建設があるが、五橋キャンパス整備事業計画を進めたことが大きい。「市立病院跡地利活用計画」へのプレゼン及びヒアリングを松本学長自らが行うことで事業者として選定された。プレゼンでのコンセプト、泉キャンパスと多賀城キャンパスを統合し五橋キャンパスとし、土樋キャンパスと「ひとつのキャンパス」として一体的に運用するアーバンキャンパス計画は、2023年4月開校に向けて進められている。

第四に、本学における大学教育改革が補助金獲得を強く意識して行われてきたことがある。大学教育に対する社会の目が非常に厳しくなっている状況の下で、文科省主導の改革（私立大学等改革総合支援事業など）も進められてきたが、本学はそうした状況を活用して教学改革推進委員会を中心に教育改革に取り組んできた。本学の財務状況からすれば決してゆとりがあったわけではないが、補助金獲得に関しては割と大らかな気風が残っていた環境を打破し、教育改革と補助金獲得を同時に達成する意識改革を進めたのである。

なお、インパクトという点からすれば、医学部問題を冒頭に持つてくることが妥当かもしれないが、大学改革とは別次元の改革であり、切り離してまとめることにした。この問題は最終的には建学の精神と折り合わない状況の下で医学部設置は不可能と松本学長が判断し決着させたことを付記しておく。

以上のように、多くの改善・改革が進められてきたことは明らかであり、それらをリーダーシップをもって強く進めてきた松本宣郎学長に改めて感謝するものである。まさに神はその時々に必要な方をお使いになられたのである。

しかし、依然として改善・改革しなければならない部分はたくさん残されている。また、新たな課題も次々に登場してきている。これを包括的に捉え、順次的に改革していく道筋をつけ、進んでいくことが、後に続く者の責務である。

改革の年表

2013年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・「東北学院大学スポーツ奨学金」制度開始 ・科目履修登録上限（キャップ）制導入 ・「東北学院個別・共同研究助成」制度を拡充 ・専任教員と外国語担当の非常勤教員を対象に「成績評価に関する意識調査」を初めて実施 ・連続講座「震災と文学」開講 ・大学改革推進等補助金「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」の公募開始 ・日本私立学校振興・共済事業団に職員派遣 ・泉キャンパス国際交流係を新設 ・総務部研究機関事務課の泉キャンパス体育事務係を学生部学生課学生・体育事務係、多賀城キャンパス学生・厚生・体育事務係、泉キャンパス学生・厚生・体育事務係に改編 ・学務部大学院課を廃止し、学務部教務課学部・研究科係に改編し、法科大学院係を新設
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・『東日本大震災の記録 Remembering 3.11』公開
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ブルガリア「ソフィア大学」と国際交流協定を締結
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国「梨花女子大学校」と国際交流協定を締結
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・「東北学院大学中期達成目標 2013-2018」策定 ・「包括連携協力に関する協定」を締結 ・ベトナム「ノン・ラム大学」と国際交流協定を締結
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・教学改革推進委員会を設置
2014年1月	<ul style="list-style-type: none"> ・国土交通省東北地方整備局との間で連携協力に関する協定を締結
2014年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・岩手県宮古市との間で連携協力に関する協定を締結 ・震災記録集『After 3.11 東日本大震災と東北学院』刊行 ・タイ「コンケン大学」と国際交流協定を締結

2014年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・「東北学院コンシェルジュ」創設 ・仙台市と「災害時における帰宅困難者の支援に関する協定」を締結 ・法人事務局庶務部に企画課、企画委員会設置 ・「地（知）の拠点整備事業（COC）」採択 ・法科大学院募集停止（2016年4月 廃止の届出） ・「学長研究助成金（職員業務研究）」制度新設 ・「職員人事制度」導入 ・仙台商工会議所に職員派遣 ・大学施設部を法人事務局施設部に改編 ・総務部宗教事務課を廃止し、総務部総務課庶務・宗教係に改編 ・就職部就職課を就職キャリア支援部就職キャリア支援課に改称 ・教職課程センターの泉キャンパスにおける事務を総務部研究機関事務課泉キャンパス実験実習指導・研究機関事務係から学務部教務課泉キャンパス学務係へ移管 ・台湾「天主教輔仁大学」と国際交流協定を締結
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・「TG あさ食（100円朝定食）」の提供開始
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・一般社団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との間で連携協力に関する協定を締結 ・青山学院大学・北海学園大学と、合同オープンキャンパス告知及び入試広報イベントを、JR仙台駅構内で開催
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・「明道大学」と国際交流協定を締結
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育法改正に伴う規程等整備委員会設置
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・「東北学院大学内部質保証に関する基本方針」策定
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・土樋キャンパス本館、礼拝堂、大学院棟の有形登録文化財登録
2015年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・部長会規程の改正 ・「東北学院大学内部質保証体制及び手続きに関する規程」策定

	<ul style="list-style-type: none"> ・「アクティブ・コート」開設
2015年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・「英語教育センター」設置 ・「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」採択 ・英語プレースメントテスト（TOEIC-Bridge Test）の実施 ・公益財団法人大学基準協会に職員派遣 ・学長室に地域共生推進課設置 ・学務部学事課にラーニング・コモンズ係新設
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・株式会社ロフトとの間で連携協力に関する協定を締結 ・北海学園大学との共催による進学相談会「青函進学フェア」開催
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・株式会社ベガルタ仙台との間で包括連携に関する協定を締結 ・中央図書館で「ゾーニング」の導入
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・「みやぎ移住・定住推進県民会議」に会員登録 ・仙台国際ホテルを会場に大学とメディアとの懇親会開催
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・中国「北京第二外国語大学」、韓国「韓国外国語大学」と国際交流協定を締結
2016年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・「TG Grand Vision 150」を策定
2016年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・「学生総合保健支援センター」設置 ・GPA（Grade Point Average）の導入 ・コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム開講 ・「東北学院大学の教学に関する懇話会」設置 ・「学長教育改革研究助成金」制度の新設 ・「入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）」改定 ・公益財団法人大学基準協会に職員派遣 ・学生部に学生総合保険支援課設置

7月	<ul style="list-style-type: none"> ・旧宣教師館（デフォレスト館）の重要文化財指定 ・学長室インスティテューショナル・リサーチ課（IR課）設置
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ホーイ記念館にラーニング・コモンズ設置 ・青葉土樋町内会と東北学院大学との共催及び五橋地域包括支援センター、仙台市社会福祉協議会、仙台市青葉区社会福祉協議会の後援による「敬老お食事会」開催
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・「新図書館システム（システム2016）」が稼働開始
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾「世新大学」と国際交流協定を締結
2017年2月	<ul style="list-style-type: none"> ・教学上の3つの方針改定
2017年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・電気電子工学科と情報基盤工学科新設 ・五橋キャンパスの設置作業開始 ・ラーニング・コモンズ「コラトリエ」稼働 ・学習支援・授業支援システム（Learning Management System：manaba course）の全学導入 ・「入学前教育プログラム」でTGドリルを導入 ・オーディオビジュアルセンター廃止 ・「学修行動と学生生活実態調査」実施 ・東北学院大学予約継続型給付奨学金（3L奨学金）制度新設→2018年度 実施 ・退学者対策検討委員会設置 ・小学校現職教員のための中学校英語教員免許状取得認定講習の開催 ・公益財団法人大学基準協会に職員派遣 ・「研究助成係」を学長室事務課から総務部研究機関事務課に移管 ・副学長の増員（点検・評価担当）
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・土樋キャンパスの見学ツアー開催
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・「わが街フェスティバル」開催
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・本院史資料センター編『東北学院の歴史』刊行

<p>11月</p> <p>12月</p> <p>2018年3月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学基準協会の実地調査 ・「インスティテューショナル・リサーチ規程」制定 ・韓国「東義大学校」、「ソウル神学大学校」と国際交流協定を締結 ・『東北学院大学の基本方針 2017』刊行 ・Web 出願方式の導入 ・公益財団法人大学基準協会の認証評価を受審し、適合と認定
<p>2018年4月</p> <p>7月</p> <p>9月</p> <p>11月</p> <p>2019年1月</p> <p>2019年3月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文学部教育学科開設 ・入試部入試課を入試部アドミッションズ・オフィスに改称 ・文学部に英語外部試験利用入試を導入 ・2021年度入学者選抜制度の概要をまとめた「東北学院大学 2021年度入学者選抜について（予告）」を作成 ・アカデミックサポーター（AS）の制度化 ・米国「ランカスター神学校」と国際交流協定を締結 ・ドイツ「アウクスブルク大学」と国際交流協定を締結 ・西南学院大学と本学の相互評価に関する協定を締結 ・ドイツ「ルートヴィヒスハーフェン経済大学」と国際交流協定を締結 ・韓国「全南大学校」と国際交流協定を締結 ・『東北学院大学における改革の経緯と現状IV』を発行

東北学院大学 学長 メッセージ集

2013（平成 25）年度

入学式告示

本日ここに、2013(平成 25)年度入学式を挙げるにあたり、新しく入学された皆さんに心からお祝いを申し上げます。またご臨席の保護者・ご家族の皆様にお慶び申し上げますと共にご来賓の皆様にも深くお礼申し上げます。

東北学院大学は 6 つの学部と 7 つの大学院研究科を有する、東北でも最大規模の私立大学であります。歴史も日本の私立学校の中でも有数の長さや内容の深さを誇っています。近代明治日本誕生の時代、西欧とアメリカの文明流入の一環としてプロテスタントのキリスト教伝道者が到来し、横浜・東京・関西各地に教会だけでなく、いくつもの学校を建設し、日本の教育近代化に貢献したのですが、仙台では、1886 年（明治 19 年）にアメリカ人宣教師 W.E.ホーイ、D.B.シュネーダー、そして日本人初代のクリスチャンの一人押川方義らの働きによってキリスト教学校が設立されました。これが東北学院の前身、仙台神学校であります。創立 5 年目に仙台神学校は東北学院と改称し、現在の名称となりました。

創立以後、東北学院は教育の幅を広げ、キリスト教を基盤とした高等教育機関としての歴史を歩んできました。学生をかけがえのない個人として尊重して、その人格を成長させ、個人の持つ能力を最大限に伸ばすこと、そのためにキリスト教を基盤とした教養教育を施す。その過程を経て、各専門分野の知識と技術を身に付け、社会へと送り出す。この営みは今も変わっていません。

127 年の歴史を迎える東北学院は、このような教育理念のもと、総計 17 万を越す卒業生を世に送り出してきました。仙台で、東北で、否日本全国のみならず世界各地で、職場で、また家庭で、よい働きをしています。プロ野球選手がおり、政治家がおり、タレントも、学校の教員もいます。社会では、これら東北学院卒業生たちに、「学院卒業生は信頼できる」という評価を与えてくださっています。大変うれしく思います。

そのような評価を得る人材・人格が育つ要因が、私は東北学院大学の基盤・建学の精神であるキリスト教の教えと、人格陶冶のための教養教育重視の伝統、そしてその上に加わる専門的分野の知識と能力、この 3 層構造の教育にある、と信じています。新入生の皆さんにも、大学はその教育メニューを提供します。これからの 4 年間で皆さんは自覚的・自主的に大事な時間と受け止め、学び、成長してゆく時間とし、社会から喜んで迎えられる評価を身に付けて卒業して行ってください。今日同様に大学院入学なさる皆さんは、学部 4 年の学びの後、さらなる専門研究を志しておられるわけですが、目指す方向は同じであります。

まず学院の教育理念の基盤、これを建学の精神とも言います。それは、定まった言葉としては、かつて理事会が行った宣言の中にこうあります。「宗教改革の福音主義キリスト教信仰に基づく個人の尊厳の重視と人格の完成の教育。それは聖書の示す神に対する畏敬の念とイエス・キリストにならう隣人の愛の精神を培い、文化の発展と福祉に貢献する人材の育

成を目指す」、と。

この精神によって、大学の3つのキャンパスでは、毎朝10時台に、短くはありますが礼拝が必ず行われます。また必修授業としてキリスト教を学ぶのです。聖書を読み、それに基づくメッセージを聞き、学院の根幹の精神を知ってほしいと思います。大切なのは、自分という人間は、自分だけの力で生き、決断してゆくのではない、あなた方を見つめ、この大学へと招いて、見守っておられる神が生かしてくださるのだ、ということを知り、信じる、ということです。これらのことは、明日から始まるキャンパスライフの中で、少しずつ理解されることだと思っています。

これから皆さんは聖書の具体的な言葉を学ぶことになると思います。印象的で、心の奥に触れる言葉とであってほしいものです。今日は皆さんの学びのために、「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」(マタイ 10:16)という言葉をご贈りしましょう。本来は社会で生きてゆくための姿勢についての助言なのですが、大学での学びには賢さと、事実をありのままに受け止め、自らの無知を隠さず、謙虚に学ぶ素直さが必要だ、という意味でもあります。

そこで、次に教養教育ということです。6つの学部にはそれぞれの専門性がありますが、いかなる分野の知識を身に着けるとしても、何より人間を知り、社会での生き方を知るためには専門分野の基盤となり、背景となる、幅広い事柄をわきまえておく必要があります、それを大学前半期を中心に学ぶのです。それは外国語であり、他者とのコミュニケーション能力であり、政治・法律・経済・科学・芸術などの諸分野の基礎的知識であります。

理科系であれ、人文社会系であれ、皆さんは高度な専門分野を学んで卒業されるのですが、大学の外の社会では、それだけでは決して十分ではないのです。大学で得たつもりの高度なノウハウをそのまま用いようとしても通用しないことが多くあるのです。これは、自分が学んで卒業した学部や学科の専門と、直接関係のない企業などに就職するような場合にはいっそう言えることです。

たとえば、大震災後の復興をめぐるさまざまな問題があります。津波に襲われた地域からは、高台に町ごと移転することを計画しますが、住民の意見の一致が得られない。専門的認識からよいと思われても、人間感情や利害関係から納得されない、このようなときに、粘り強く説得にあたりたり、まったく分野の違う発想を提案したり、ユーモアを駆使したり、という、要するに人格の幅の広さが求められるのです。東北学院大学での幅広い学びは、複雑化し、不安要素の多い21世紀の世界では必ず役に立つでしょう。

大学では、これらいくつかの要素からなる教育を、皆さんが過ごす4年間の在学中、どのように受けてゆくかをカリキュラムで示します。多分その内容は膨大で、途方に暮れるでしょう。オリエンテーションなどを利用してよく把握し、学ぶべき科目を選択してゆく必要があると思います。大事なことは、皆さん自身が、大学生活をどのように展開してゆくか、その意志を明確にもつことです。今、卒業論文のテーマを絞る、ということではなく、また一年生の間は何でもかんでも、というのでもなく、やや先の、しかし自分が希望する、ある程度

ゆるやかな将来計画を見据えた上で、今その計画の第一歩として役立つこと、その次にすべきこと、を描き出す、ということです。大学の教員たちは、その計画を立てること、そして皆さんに教えること、を支援し、実行します。このように皆さんの大学生生活の最終目標に到達できるよう大学は用意しています。しかし欠かせないのは、皆さんの希望を明確にし、それを教授たちに示し、教えを請う、皆さん自身の言葉です、説明力です。「蛇の賢さ」が必要です。もう一つ聖書の言葉を加えるなら、「求めなさい。そうすれば与えられる。・・門をたたきなさい。そうすれば開かれる」(マタイ 7:7) であります。

21世紀に入って、もう13年経ちました。過ぎ去った20世紀は、多くの課題、正確に言うところでは深刻な難題を次の世紀に託したとあってよいと思います。地球温暖化・環境破壊・種の絶滅などの問題、大国先進国と発展途上国、あるいはキリスト教国とイスラーム国家の対立・テロ、国際的な通貨危機、貧困と飢餓、経済的格差・ワーキングプア、差別、家族の崩壊、いじめ、ITの加速度的進歩とそれに伴う犯罪、新型ウイルスへの恐怖、等々の問題が、21世紀の10年余の間に、すべて20世紀よりも深刻化している、という現実があります。日本の少子化や、人間関係の希薄化、などは予想を遙かに超える勢いで進んでいると言えるでしょう。そしていわゆる「想定外」の東日本大震災の激甚な被害が2011年3月に起こったのです。

人類社会は、また日本は、滅びつつあるのか、そのように問いたいほどのことかも知れません。しかしもちろん、一方で私たちは希望のきざしを見つけられないわけではありません。山中博士のiPS細胞開発はその一つかも知れません。

東日本大震災被災地復興、という面で言うならば、この東北学院の震災後の取り組みは、日本全体の復興へのそれと一致し、ある意味では先取りするものでした。学院自体大きな被害を受けましたが、特に在学生たちの被災者支援の思いが強くありました。自発的にボランティア活動に立ち上がり、大学は他機関や大学に先駆けてボランティアセンターを立ち上げ、社会全体のボランティア精神高揚に働きかけました。人間が困っている人間を助ける、大震災はこの当たり前でありながら、おろそかにされてきたことを日本人に再発見させたいと言えるかも知れません。また、学院大の教授たちは、その専門分野の能力を生かし、大震災の原因探査や復興策への提言などの形で貢献すべく「震災学」というプロジェクトを立ち上げました。

社会の危機的状況に、人間として関わり、その解決に力と時間を捧げる、という姿勢は、先に悲観的に並べた諸問題への対策として、基本的な一歩、を提示します。そして、そもそも大学というものが、その地域にあって、地域の大学として共に生きる、その地域に大学人が学生、教員の別なく貢献することは、その一歩に主体的に関わる、ということでもあります。東北学院大学はこれからも東北の地の大学として、地域に関わり、貢献する大学です。皆さんにもその覚悟を共にしていただきたいと思います。

再び東北学院の建学の精神が想起されます。大学がなすべきこのような貢献もまた、「汝の隣人を愛せ」、また「人にしてほしいと思うことを人にもしなさい」とのイエスの言葉に

根拠をもつのであります。改めて、キリスト教の教えは時代を超え、世紀をも超え、不変の価値をもち、21世紀の不安な諸側面打開のよりどころである、と信じるものです。

厳しい時代の中で大学生活を始めようとする皆さん、希望はあります。その希望を更に確実にするために皆さんは大学の4年間を、計画的に、着実に、しかし心は高く、快活に、過ごしてほしいと思います。そのキャンパスライフを大学はいつも見守り、支援を惜しまないこととお約束します。

以上をもって学長の告辞といたします。

2013年4月3日

東北学院大学学長 松本 宣郎

学長就任にあたって

ごあいさつ 東北学院大学の課題に向けて

第五代学長就任のごあいさつを申し上げます。輝かしい伝統と社会貢献の実績を有する本大学で奉仕させていただくことは光栄であり、責任の大きさに身の引き締まる思いです。

東北学院大学は、1886年に仙台神学校として創設されて以来127年、福音主義キリスト教を基盤として歩み、1949年に文経学部をもつ大学としてスタートしてからは64年、東北有数の私立高等教育機関として発展してきました。現在は6つの学部、7つの大学院研究科からなり、優れた研究成果を生み、またそれに基づく専門教育により、幾多の俊秀を卒業生として送り出しています。その数は累計16万人余にのぼり、東北・北海道のみならず、世界でも活躍する人材を広く教育界・産業界・地方自治体などに送り、また彼らは本学における豊かな人格陶冶によって、社会で、家庭で、真摯に奉仕する人材としても高く評価されています。

この東北学院大学学長として、更なる充実と発展を目指し、次のようなお約束をしたいと思います。

1. 東北学院の建学の精神である福音主義キリスト教を守り続けます。Life, Light, Loveのスクールモットー、また「地の塩、世の光」として生きる姿勢を学生に伝えます。
2. 社会から、また産業界から求められる人材を育てます。変動する現代社会のニーズを敏感に受け止め、教養学部の地域構想学科、経済学部の共生社会経済学科、文学部の総合人文学科などの新設が示すように、教育カリキュラムの見直しを常に行い、「即戦力」を持つ、「学士力」豊かな学生を育てます。
3. 東北学院大学は創設以来「教養教育大学」を基本理念として来ました。6つの学部は、文系・理系それぞれの高度な専門分野に秀でる学生を育てますが、そのすべてが、人間と社会と文化への深い理解と洞察力を共有できる教養教育が身につくようなカリキュラムを提供します。

4. 2011年3月11日の東日本大震災後の復興のために、東北学院は、研究において、ボランティアにおいて、地域社会と協働して全力をつくしてきました。「震災学」という研究を立ち上げました。これからも宮城県や仙台市、また仙台の諸大学と協力してゆきます。復興のためにはたらく人材を育てます。
 5. 学生にとって魅力的な大学でありたいと思います。美しく、効率的なキャンパスづくりを目指します。新たに得られた片平の土地等のキャンパス構想に着手します。また、大学キャンパスは、地域のものであります。開かれた大学でありたいと思います。常に前進し、改革してゆく、ダイナミックな東北学院大学のために働きたいと思いません。
- ご理解とご支援をお願いいたします。

2014年 年頭所感「新しい歌を！」

『東北学院時報』第719号

「新しい歌を主に向かって歌え。

主は驚くべき御業を成し遂げられた。

右の御手、聖なる御腕によって主は救いの御業を果たされた」

(詩編 98・1)

2014年を迎えました。新しい年が東北学院にとって、そして学院につながる皆さますべてにとって、神様の祝福に満ちたよき一年となりますようお祈り申し上げます。本学院が神によって建てられて128年目の年を迎えるこの年を、この詩編に示された讃美と感謝の思いを持ってすごしたいと念じています。

本学学長としては、初めて迎える新年です。就任してまず抱いたうれしさは、「毎日礼拝に出席できる」ということでした。短い時間ではあれ、特にこのために用意された25分ほどの、清らかな時間を学生とともにできる、これはキリスト教学校のみならず許された恵みです。私もメッセージを語る務めを与えられて、聖書に取り組み、わかりやすく伝わるように、と語ってきました。今年もそうありたいと思っています。

東北学院大学の使命は、「建学の精神に堅く立って、高等教育機関として存続し成長してゆくこと」、これに尽きます。就任以来、まだ手探りながら、そのために大学としてできることを、副学長をはじめとする大学教職員、そして理事長・院長たち法人の方々とは対話を続け、秋には「中期達成目標 2013～2018」として、近未来的将来計画をまとめました。

それは次のようなものであります。

1. 建学の精神に基づくキリスト教教育をさらに充実させる。
2. TG ベーシックを中核とする新教養教育課程を着実に実施する。

3. 学生の主体的学修、アクティブ・ラーニング促進にむけて、教育の質的転換を推進する。
4. グローバル化などの社会的変化を見据え、学部学科、カリキュラムのあり方を見直す。
5. 地域社会と協働し、震災復興に貢献する人材育成、教育研究活動を推進する。
6. 土樋キャンパスの整備を進め、キャンパス統合計画を立案する。
7. 大学の社会的評価を高めるための行動計画を立案し、その成果を戦略的・組織的に広報する。

2014年は、この目標の実質的な一年目として、私たちは具体的な実現へと踏み出します。

土樋キャンパス北地区に建設される新棟は、キャンパス統合への第一歩となり、教育の質的転換と地域への開放、の拠点となるでしょう。

英語教育、基礎的な学士力を培うカリキュラム改革、東北学院の歴史を学ばせる教科目、などなど、さらにもっと大きな構想も育ててゆきます。

仙台市中心部にどっしりとした存在感を示す、東北学院大学でありたいと思います。

「建学の精神」は常に私たちを支えるものですが、案外在校生も卒業生も問われると口ごもることが多いようです。改めてここに繰り返したいと思います。

「宗教改革の『福音主義キリスト教』の信仰に基づく『個人の尊厳の重視と人格の完成』の教育。聖書の示す神に対する畏敬の念とイエス・キリストにならう隣人への愛の精神を培い、文化の発展と福祉に貢献する人材の育成を目指す」こと、と。

学長見聞録 vol.1

『東北学院時報』第 719 号 東北学院大学災害ボランティアステーションを訪ねて



学長 東日本大震災を体験されたときはどちらにいたのですか？

長島 千葉県にある暁星国際高等学校に通っていましたが、当時は2年生でした。これまで体験したことのない揺れで、電球が落ちたり、本棚の本が落ちたり、停電になったり、大きな不安の中で過ごしました。

学長 大学に入学するまで、被災地へ行ったことはありましたか？

長島 高3の夏に、ボランティア活動のために2泊3日で釜石市へ行きました。町は災害廃棄物ばかりなのに、震災後にできたコン

ピニがぼつんとあって強い違和感を覚えました。

学長 そこでは、どんな活動をしたのですか？
長島 災害廃棄物の分別です。短期間しか手伝うことができて、心残りといいますか、自分が手伝った意味はあったのだろうかと思慮しました。

学長 そうした経験から、もう一度被災地へ行ってボランティアをしたいという思いを抱いたのかも知れませんね。本学に災害ボランティアステーション（以下、ボラステ）があることは知っていたのですか？

長島 知っていました。すくに加わらなかったのですが、入学後にボラステ宛にメールで問い合わせたことがありました。その後、しばらく経ってから元代表の菊地崇史先輩から「気仙沼へボランティア活動に行くんだけど、一緒に行かない？」と連絡があって参加しました。その道中にボラステの話をしたこと、現地でも支援活動できたことで、一員となる決心をしました。

学長 ボラステの活動場所はどこですか？

長島 気仙沼市と七ヶ浜町をメインに、山元町を含めた3箇所です。七ヶ浜では、仮設住宅に暮らす住民の方に、足湯につかってもらいながら、手をもみほぐし、住民の悩みや不安、要望などのお話を聞いています。こうした住民の声に少しでも応えていきたいと思えます。また、夏のボランティア合宿では気仙沼へ行って他大学と一緒に活動しました。

学長 「夏ボラ」ですね。私もお邪魔して皆さんを激励できたことを覚えています。ところで、被災された方たちとはどのように交流を深めているのですか？

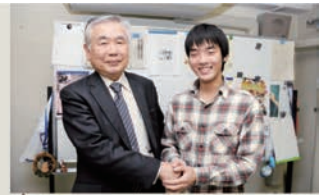
長島 支援する側と支援される側という立場になると、どうしても目に見えない上下関係ができてしまいがちなので、自分の祖父母や親戚の家に行ったときのような感覚で接しています。また、私たちからの支援を押しつけるのではなく、皆さんから求められていることに応えられるよう心掛けています。

学長 今後の活動に向けて課題はありますか？

長島 被災地の特産品を物販したり、活動報告をする場を設けたり、もっと大学の中で活動することで、震災を風化させないようにしたいと思っています。

学長 それはいいことですね。スタッフの意志によって被災地のこと、復興のことをアピールしていく広報活動は必要ですね。ボランティア活動というのは、月日が経つと人数が減っていく傾向がありますが、息長く活動を続けていくことが大事になっていきますね。長島さん自身、この先どのように活動していきたいと考えていますか？

長島 就職や卒業などを控えています。卒業す



東北学院大学災害ボランティアステーション 学生運営代表 長島 心一さん
(東北学院大学教養学部人間科学科2年 暁星国際高等学校卒業、東京都出身)

Profile

るまでボラステで活動したいと思っています。また、今後はボランティアをしてみたいと思っている人のサポート役もしてみたいです。

学長 ボラステの活動を行うにあたって、大学に何か要望はありますか？

長島 どんなに熱意を持っていても学生スタッフだけでは限界があります。もっと活動できるよう、サポートしていただける体制を整えていただけると嬉しいですね。

「自分のことより、人のために何かをしていると嬉しく感じられるんです」という長島さんの話から、彼が本学に通い、ボラステに携わることは自然の流れだったのではと感じました。また、本学は人に仕えることを大切にしている学校ですから、ボラステがいつまでも続いていく存在であってほしいと強く願っています。

(2013年11月22日インタビュー)



夏合宿のボランティア活動を激励に学長訪問 (2013年8月気仙沼市唐桑町)

卒業式告辞

本日ここに東北学院大学を卒業なさる皆さん、ご卒業おめでとうございます。あわせてご来臨の保護者の方々にも、心よりお祝いの言葉を申し上げます。

東北学院は1886年(明治19年)にこの仙台の地に、キリスト教に立つ人格教育をほどこすことを目的として創設されました。そして第二次世界大戦後の1949年(昭和24年)、創設時の建学の精神を高等教育機関として発展させるべく、新制大学としてスタートしました。最初の学院卒業生を送り出したときから数えて、すべての卒業生は17万人を超えます。その卒業生、TG同窓生の大きな群れに、新しく約3000名の諸君が、今日加えられることとなります。まことに力強い群れであります。東北学院として、大変誇らしく思うものです。

東北学院大学で学んだ4年間のことが、今皆さんの脳裏に想起されていることと思えます。

皆さんは、私たち東日本にある者が決して忘れることの出来ない、2011年3月11日の大震災に、大学1年生を終え、2年生になろうとした、そのとき遭遇されたのだと思います。ほとんどの人間にとって人生最大の自然災害に私たちは直面しました。皆さんはあるいは悲痛な経験をし、あるいはボランティアに奮闘されて、夢中に日々を過ごしたのだらうと思います。

今、私たちの周りではほぼ震災以前の生活がもどり、時間というものがどんな悲惨な出来事でも、傷みを和らげ、平和を戻してくれるのだ、という感想を一面ではもっています。

しかしもちろん、フクシマの原発事故は今も大震災が続いていることを私たちに突きつけています。原発事故と、そしてまた津波による被害によって、故郷を追われて不自由な生活を強いられている方が10万を超える単位でおられます。復興がいつこうに進んでいない、という印象をより強く持たざるを得ない現状です。

皆さんの中にも、またご自身でなくとも親しい方が、震災の傷みを今も負っておられるにちがひありません。そのことを、外見上平和を楽しんでいるかのような私たちは忘れてはなりません。

しかし、にもかかわらず今このときも、キリストは、被災者である彼らを見守り、支援しようと思っている者たちも含め、すべての者と共に、やはり歩んでおられる、ということを感じたいと思います。東北学院で学ばれ、キリスト教と聖書に触れた皆さんは、いかなる苦難と闇を経験するときも、キリストが私たちと共にいてくださる、ということを感じられたと信じるからであります。

聖書は、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む。希望が失望に終わることはない」、と語ります。現状はなお忍耐を要する事柄が山積していても、希望は失われることがないのです。それを東北学院を卒業してゆかれる皆さんには知っていただきたいのです。

皆さんは本学の6つの学部、7つの研究科で学ばれ、卒業と修了を認定され、学士号、修士号を獲得して旅だってゆかれます。それが大学が皆さんのためにお渡しする証明、ディプロマです。分野は様々ですが、それぞれの分野の専門的知識とその学問の手法を皆さんは身につけたわけです。学んだ授業のタイプは講義、演習と様々だったと思いますが、中でもフィールドワークやゼミレポート、卒業論文では、単に教えられるだけではなく、皆さん自身が自主的に、自己の判断で問題を発見し、調査し、発表の言葉や論文を構想し表現することが求められ、あるいは苦しみつつも、大学で学び、鍛えられ、達成する、という喜びを実感されたと思います。また、教育実習とかインターンシップとか、あるいは先ほど触れた被災地ボランティアなど、大学の外に出て、社会の問題と向き合う機会も少なくなかったでしょう。それらは特に良い経験となったことと思います。

これらの大学の学びの蓄積、すなわちディプロマが、今日これから皆さんが出て行かれる、仙台の、東北のあるいは日本全体、そして世界各国の、まさに現場で働き、生きる

糧を手にしてゆく上で、必ず大きな武器となるのです。山ほどある課題を与えられ、あるいは課題そのものを見つけ出すことを求められ、それらを解決することが不可避となります。大学で得たノウハウが役立たないほどに問題は難しくなるかも知れません。そのような場合の応用力、ひらめきを感じる力は、大学で得たものを皆さんが我がものとし、それらを磨き上げることによって獲得されるはずです。

学生にとって大学とは、ある意味ではユートピア、それほどでなくとも平和な実験室、というところかもしれません。聖書では、キリストが弟子を伝道に派遣するにあたって、「まるでオオカミの群れに羊をはなつようなものだ」とおっしゃった、とあります。現在の日本と世界の現況をみるにつけ、私も大げさでなくそのような思いに駆られます。

民族と国家の間に平和な状態が保たれなくなっています。小さな無人島の取り合いがあり、一国の民族の違いが関わる対立から、その国を分裂させる動きがあります。21世紀の国際秩序に、20世紀どころか19世紀の国家主義の対立の再現を見る思いです。先進国と発展途上国の対立に宗教対立が絡み合う、さらに核の恐怖すら人質にされる、深刻な亀裂があります。社会経済的には大資本と中小企業の格差の拡大、労働者の間にも正規と非正規の、つい最近までなかったような差別化があり、いわゆるワーキングプアの問題は、少々の景気上昇では解消されそうにありません。貧しさの問題は、家族関係の希薄化によってより大きくなり、アフリカ、アジアの多くの国々でいっそう深刻です。政治家は哲学を語らなくなり、経済的利益と効率、軍事に支えられた国家愛にのみ興味を持つかのようです。そして、インターネットと先端科学の進歩が、人間関係や倫理において受け止められないほどに肥大し、想定外の犯罪や摩擦を生み、上に述べた差別や貧しさの更なる深刻化を招いています。

皆さんだけでなく、すべての人類が、よほど目を開き、知恵を総動員して立ち向かわなければならないのが現代なのです。大学卒業は、業を終えることではなく、新たな階段への踏み出しです。

けれど、「希望は失望に終わらない」のです。「神は耐えられないような試練を与えることはなさらない」、とも聖書は教えます。東北学院を巣立つ皆さんにはこれは特に力強い支えです。身につけた専門的知識、そして聖書の言葉が、よく生きよう、隣人を愛し、地の塩として、世の光として、世界を正しい方向へとみちびくよう働こう、と決意する皆さんのいついかなるときにも確かなよりどころとなるでしょう。

厳しい社会へと旅だつてゆかれる皆さんの、力強いあゆみと明るい未来を確信して、告辞といたします。

ご卒業おめでとうございます。

2014年3月25日

東北学院大学学長 松本宣郎

2014（平成26）年度

学長見聞録 vol.2

『東北学院時報』第721号 東北学院大学ロボット開発工学研究室を訪ねて



東北学院大学
ロボット開発工学研究室を訪ねて

多賀城市にキャンパスを構える工学部は、地域の産業の発展に必要な「管理職と実知を備えた工学技術者・産業人」を育成することを目指しています。今回は、その工学部の中でも、学生たちとともにユニークなロボットを数々誕生させてきた機械知能工学科の熊谷正朗教授に、ロボット開発現場などを伺いました。

学長 熊谷先生がこの分野に興味を持ったのはいつ頃のことですか？
熊谷 子供の頃から工作好きだったことに加えて、父が高専の教員をしており、身近に電子回路技術などがありました。小学校の高学年になるとパソコンも触り始めたのですが、ゲームばかりしていたら禁止令が出てしまい、代わりに自分でソフトウェアを作るようになったことについての間にか必要分野がそろっていたことがそもそもの始まりでした。
学長 そうした経験から今があるわけですね。現在はロボット工学が専門ですよね。
熊谷 そうですね。わかりやすい表現でロボットと

置っていますが、本来はメカトロニクスという分野が専門です。メカトロニクスは機械における電子制御やコンピュータ制御などの総合技術で、現代社会の基盤技術です。ロボットはそのごく一部にあたります。ロボットというのは人間の形をして、人間の代わりに何らかの仕事をします。鉄腕アトムのようなヒューマノイドのことをロボットと呼んでいいんでしょうか？
熊谷 カレル・チャペックが書いた舞台小説で初めてロボットという言葉が誕生したのですが、90年代までは人型をしているという印象が一般には強かったと思います。しかし、研究者の間ではロボットは人型という認識はあまりなく、そうした違いを説明することは大変だったのですが、近年は動物型ロボットだったり、掃除をする円盤形ロボットだったり、形が重要ではないという認識が世間一般に広まったのではと思います。とはいっても、実はロボット研究者でもここからここまでがロボットですと線を引くことができず、私がたどり着いた結論は、ロボットという名前を付け、納められたものがロボットになっている、という考えです。
学長 昨年のオープンキャンパスのときに初めて玉

乗りロボットを見たのですが、インターネット上の映像サイトでたくさんアクセスがあったと聞いています。
熊谷 工学部機械知能工学科では、3年生のときにどんな研究をしたいのかをアピールするプレゼンテーションがあり、その結果で4年で所属する研究室が決まるというユニークなシステムを導入しています。その時に玉乗りロボットを作りたいといった学生のアイデアがきっかけで誕生しました。
学長 ある年の学生が新しいロボットを作って、次の学年の学生がそれを発展させたというケースもあるのですか？
熊谷 新アイデアものはゼロからのスタートとなりますが、改良を提案し、引き継ぎ発展させる場合もあります。また、卒業までの約1年間では最初に思い描いたところまでは作れないケースも多く、学祭などで皆さんにお披露目しているなかには、学生の卒業後に私が手を加えてバージョンアップしたのもあります。基本的に技術面で多めに支援しますが、なかには自力ですべてを成し遂げてしまう学生もおり、私が開発に携わっていないので、最大の喪失言葉は、「君の卒業研究はちゃんと説明してくれないとさっぱりわからない」ということになります。
学長 先生にとってはうれしい出来事ですね。話は変わりますが、工学部では出前授業にも力を入れていると聞いています。
熊谷 工学部は以前から出前授業に積極的で、要請があればボランティアで授業を行っています。私の場合はロボット関係の話ですが、たくさんの方に少しでも工学部に対して関心を持ってもらえればよいと思っています。また、仙台市の地域連携フェローとして企業に出向きアドバイスをを行うなど、学外においても何らかの社会貢献ができればと思っています。

Profile
熊谷正朗教授
工学部機械知能工学科教授、博士(工学)2000年東北大学大学院工学研究科機械電子工学専攻修了。2006年「計測自動制御学会学術奨励賞(研究奨励賞)」受賞。地域連携フェロー(仙台市非常勤職員)を兼任するなど、多彩なフィールドで活躍中。



このたびのお誘いで、ロボットについての様々な疑問がすっきりと解きました。また、これまで学生と一緒につくってこられたユニークなロボットたちは、本学にとって貴重な財産でもあります。玉乗りロボットのように、今後も世界を驚かせるロボットの誕生を期待してやみません。

「熱くもなく、冷たくもなく」

『東北学院大学教職員修養会・キリスト者教員研修会報告書』第15号

ヨハネの黙示録3:14~18

14 ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。15 「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。16 熱くも冷たくもなく、なまぬるので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。17 あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、衰れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっている。18 そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。

「ヨハネの黙示録」は新約聖書の末尾に置かれるだけあって、他の新約文書のどれとも似つかない特異な文書です。大部分は天空を舞台に繰り広げられる壮大な、映像的な描写のド

ラマです。それは映画のスペクタクル、あるいはSFの世界のようにすら感じられます。

キリストの愛した弟子ヨハネが高齢になったころ、エフェソで、神から得た啓示を書き記したと、一章冒頭で語られています。その啓示は「黙示」と言われています。神が人間に伝えたいことを、一見不可思議な言葉や幻で示す、というこの表現形式は、ユダヤ教文書の一つの分野であり、旧約の「ダニエル書」などがその例だと言われます。

けれど「ヨハネ黙示録」の最初の三つの章はまだプロローグで、「アジア州」、今の小アジア半島、アナトリアとも呼ばれる地方、現在のトルコ共和国の西方、エーゲ海寄りの地域にあった7つの町の教会に宛ててヨハネが送った神の言葉、となっています。エフェソには異端と戦ったことをほめ、スミルナにはユダヤ人から受ける迫害に耐えるよう励ます、など、教会ごとに異なる内容となっています。私たちはこれらの手紙を、他の新約文書の書簡と同じように、私たちに宛てて語られた言葉としても読むことが出来ると思います。今日は「ラオディキアにある教会」への手紙を取り上げました。ここでは、「熱くも冷たくもなく、なまぬるい」ことがとがめられています。そのことを考えてみたいと思います。

さて、ラオディキアという町は、「黙示録」で挙げられた町の中では内陸に位置していました。主要な街道沿いにあったので物産の動きが便利で、羊毛の織物生産地として有名になり、豊かな町でした。そのことは17節からもうかがえます。神はラオディキア人が、一切欠乏を感じないほど金持ちだと豪語している、と見ているのです。またこの町は何かの薬品の生産でも知られていたようです(18節)。

そのような町に教会をもつラオディキア人に、「あなた方の行いは冷たくもなく、熱くもない。なまぬるい。冷たいか熱いか、どちらかであれ」、と神は告げるのです。

「行い」とはありますが、熱さ、冷たさで言われているのは、キリストへの信仰の姿勢であると考えてよいと思います。これはよく分かる言い方です。現代の私たちの間でもありそうな表現です。そういえば、今年の仙台、東北は、プロ野球チームの優勝で、ずいぶん「熱く」なったではありませんか。応援に燃えなければ仙台人ではない、というような雰囲気がありました。

ラオディキア人へのとがめにもどると、キリスト教徒であるからには、熱心に求め、祈り、行うようであってほしい。いい加減な信仰生活で過ごすくらいなら、いっそキリスト教を否定する多神教徒であるほうがまだ、と論されている、という取り方をされてきました。しかし、近年の聖書解釈によると少し違う指摘をする人が多いようです。すなわち、ここで「熱い」と同様「冷たい」も悪いと言われているのではない、重大なのは「なまぬるい」ということなのだ、と。確かに、「冷たい」が英語で cold なら、冷淡とか冷酷とか、いい意味はないのですが、これを cool と訳すと、「涼しい」に加えて冷静、理性的、そしてかつこいい、という意味まで持つこととなります。まあ「冷たい」の意味についてはここまでにしておきましょう。

「なまぬるい」ラオディキアのキリスト教徒とはどういう人々なのか。彼らはキリスト教信仰についても教会についても知っていますが、富やそれを獲得する仕事の方が神よりも

大事だという生活をし、人間の罪深さや真の貧しきとか、キリストによる罪の贖い、などを深く思うことのない人々、ということでしょう。ぜいたく品を買い集めるのには熱心でも、ひたすら神を求める教会の生活は二の次、という人々です。

神は「なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている」と言います(16節)。「口」に入れる、というイメージがやはり黙示文学的かもしれませんが、「吐き出す」というのはただ事ではない、と捉えるべきでしょう。神と富と二股かけるような人間など神は関わらない、との断絶の宣言なのです。

ラオディキア人はこの宣言に立ちすくんだでしょう。では、この手紙が、今私たちに向けられている、として、私たちの信仰生活は「熱い」でしょうか、それとも「なまぬるい」でしょうか。

「熱い！」と答えられる人は、実はほとんどいない、という思いがします。特に日本人はそうかも知れません。教会に行くより仕事を優先させるとか、聖書よりも俗世間的な価値判断で物事を処理しがちだ、とか「なまぬるさ」現象を数え上げたらきりがないかも知れません。でも、神は「なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そう」、もうあなたは去ってしまえ、と言われるのです。

しかし神は、なまぬるいラオディキア人に、悔い改めの機会と方法を用意しておられます。なまぬるさを自覚する私たちにもそうならぬはずはありません。熱くなりたいものです。そのとき、忘れてならないのは、私たちがキリストにひたすら頼り、従う、ということです。なまぬるさは私たちの弱さ、究極的には罪のゆえなのです。抜け出すことは実は自力では出来ないのです。だから、人類の罪を一身に引き受けて、身代わりとなって死んで、しかし復活したキリストに助けを求めるのです。熱心に、「熱く」求めるとき、それが認められないはずはない、と信じるのです。

本日の「黙示録」3章をさらに読み進むとそのことが暗示されていることがわかります。「だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」(19,20節)。キリストから手を延べてくださるのです。私たちは熱くなれるのです。

祈り：私たちの主、イエス・キリストの父なる神さま。弱さと愚かさを自覚する私たちです。神を信じることにおいて、あなたの目からは「なまぬるい」としか見なされないとします。けれど、私たちは救いを求めます。どうか熱くキリストを信じ、頼るようであらせてください。戸を開けさせてください。この切なる願いを、尊き主、イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。



学長見聞録
Vol.3
GAKUCHO
KENBUNROKU

学生を社会へ送り出す 就職キャリア支援部の役割

大学卒業後の進路の大半は就職です。しかし、昨今のニュースではネガティブな話題が頻りに取り上げられています。大学における就職活動とは何か、本学ではどんなサポートが行われているのかなどを、日々学生たちと向き合っている就職キャリア支援部の土田恵介課長、笠原弘基さん、森かおりさん、菅原康子さんに話を聞いてみました。

■学生の将来を足元からサポートする就職キャリア支援部の役割。

学長 近年は就職氷河期と言われていますが、平成25年度の就職率が全学部合計で90.2%という高い数字を残しました。学生たちの頑張りはもとより、就職部を中心としたきめ細かなサポートがあったからこそその結果だと思います。そして、就職部は、4月より「就職キャリア支援部」に名称を変更しましたね。

課長 学生にとって就職活動というのは大学生活の中でも大きなイベントのひとつです。これまでは主に3、4年生を対象とした支援が主でしたが、入学後から自分の将来について考え、仕事の選び方や企業の見方などを学べるキャリア教育に、私たちがもっと関わっていくべきだということから名称変更を行いました。

学長 4年生になって慌てて就職活動をするのではなく、1年生から就職への意識を積み重ねていこうということですね。ところで、学生たちのインターンシップは盛んに行われているのですか。

■職員と教員の運動性。震災が変えた学生の気持ち。

学長 今日は就職キャリア支援部を牽引している3キャンパスの職員に集まっていたきました。充実した講座やセミナーの開催をはじめ、それぞれのキャンパスでは

課長 本学は全国の大学の中でも積極的に進んでいる方だと思っています。インターンシップは国も推奨しているのですが、企業と大学の思惑は少し異なっていて、企業は良い人材を早く獲得したいという思いが強く、私たちは早い内定というよりもインターンシップを通じていろんな経験を積み、職業意識の醸成を図ってほしいと考えています。

学長 学生を世に送り出す我々にとってはあまり耳にしたくない「ブラック企業」。そうした残念な例は、本学でも実際にあるのですか。

課長 残念ながら、そうした企業はあります。いざ入社してみたら、待遇などが事前の情報と違う企業、入社後1年以内に半分以上が辞めることを前提に採用している企業などです。もちろんそういった企業は薦めません。入社を決める前に、企業のネームバリューよりも、離職率や、企業のビジネスモデル（何を扱って、誰に、どのような方法で利潤を上げているか）等を良く調べるよう指導しています。

学長 時代の変化によって就職事情は大きく変わってきています。今後はどのように学生の就職に携わっていきたいとか、仕事をやる上での達成感などを教えてください。

森 工学部の学生は卒業しても大学に遊びに来て声をかけてくれることがよくあります。そういうイキキとした姿を見ることができると、この仕事をやっていて本当に良かったと思います。それと、学生にアドバイスをしているときに「あっ、そうか！」と何かに気づいてくれることがあります。

学長 そういった時が、「この仕事をやって良かった」とやがて感じます。私たちの仕事はひたすら地味な作業が求められます。学生一人ひとりにあったアドバイスができたかと思っています。

菅原 ありがたいです。学生たちにとって就職は人生の大きな壁です。なかなか就職が決まらずに何度もキャリア支援部に通った学生が「やっと決まりました」と報告に来てくれたときの自信に満ちた姿を見ると、心から嬉しい気持ちになります。

.....

大学に入学し、自分という人間をつくり上げて就職するというのが理想の流れだと思いますが、よりベターな決断をするためにもインターンシップなどの就職キャリアを築いていくことも大事な経験だとわかりました。学生一人ひとりの人生を大きく左右する場面での決断を最前線でアシストしている就職キャリア支援部の職員の方から、さまざまなお話を伺えた有意義な時間でした。

.....



「クリスマス-民全体に与えられる大きな喜び-」

『大学礼拝 チャペルニュース』131

古代のキリスト教徒たちは周囲の多神教徒たちの冷たい目にさらされていました。二世紀ごろのケルソスという人がキリスト教を攻撃する書物を著しています（オリゲネス『ケルソス駁論』というキリスト教教父の著作に収録されています。大部分は本学出村みや子教授らの手になる邦訳で読むことが出来ます）。それによると、「キリスト教徒という連中は、いつも自分は罪深い人間だと憂鬱で悲しげな顔をして、こそこそ集まっている奇妙な群れだ」と揶揄されているのです。

公に礼拝することもはばかれる初期教徒たちは、確かにそのような様子で生きていたのかも知れません。それに、現代日本のキリスト教徒も、少数派という点では古代と同じで、似たような印象を周りに与えていないとも限らないように思えます。

ところが、新約聖書が示すのは、全く逆の生き方のように思われるのです。100匹の羊の1匹が行方不明になったら必死に探し出して、その羊飼いは、友達や近所の人々まで集めて、大変に喜びます。放蕩息子がぼろぼろになって帰って来たとき、父親は宴会をして喜びを表すのです（いずれもルカ 15 章）。

パウロがギリシアのフィリピの教会に宛てた手紙もこう言うのです。

「信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際にたとえわたしの血が注が

れるとしてもわたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。同様に、あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい」(フィリピ 2:17,18)、と。「フィリピの信徒への手紙」は、「喜びの手紙」と呼ばれるほど、このような表現があふれています。

聖書のメッセージの基調は、このように喜びであります。ケルソスの時代のキリスト教徒たちも、実はもっと喜びを露わにすることも多かったのではないかと、思うのです。そして現在の日本の教会も、キリスト教学校も、もっと喜びを打ち出してよいと思えるのです。

わたしたちは、日常喜ぶことを経験しますし、喜んでいたいと思うものです。ひいきのサッカーチームが勝つとうれしいですし、おいしいケーキや寿司を食べると喜ぶのです。

もっとも、喜びには度合いの違いがあります。福袋を開けても、大喜びできる時それほどもないときがあるでしょう。そして、コーヒーをおいしいと思う喜びがあるとき、食事を楽しめるほどに自分が健康であると感じるでしょう。こちらの方が喜びは深いと言えるのではないのでしょうか。あるいは、わたしたちが、他者を助けるということを考えたとき、助けられる側の喜びだけでなく、助けて、場合によっては自分に若干の損失や痛みを伴っても、助けてあげられたのを喜ぶ気持ち、を対比することが出来るかもしれません。どちらが大きいのか、深いのか、一概には言えませんが、喜びの質の違いは感じられます。

そのように考えるとき、聖書が勧める「喜び」の、独特のニュアンスに気づくのです。先に引用したパウロの言葉の背景には、外から迫害を受けている状況があります。だから彼は「自分が殺されて血を流しても、それが信仰を守りキリストを信じての殉教なら、わたしは喜ぶし、あなたがたも喜んでくれ」と言っているのです。ここで語られる「喜び」は、何かがおいしいとか試合に勝ったとかという喜びを超えた、常識的ではない喜びと言わざるを得ないでしょう。あえて言えば、パウロの喜びは、自分がキリストにつながっている、という信仰を堅く守り、命を失ってもそれを守り、それが正しいことを確証できる喜び、ということでしょう。聖書の勧める喜びの深さがここに示されています。

99匹と1匹の羊のたとえにもどりますが、迷い出たあげく死んでしまうところだった1匹の羊も、助けられて喜んだ、と思います。そして大事なのは、この1匹は、わたしたちのことをたとえて語られているのだ、ということです。そのことを踏まえて「ルカ一五・七」が理解できます。「悔い改める一人の罪人については、・・大きな喜びが天にある」、ということです。小さなように見える一人の喜びを包摂する、途方もない喜びが、天に、つまり神とキリストにある、ということでもあります。「放蕩息子」もまたわたしたちの事を示しています。父の元に戻って「喜ぶ」わたしたちを、父は、天は、神は、途方もなく喜ぶ、というわけです。

アドヴェントの季節に入っています。救い主キリストの到来が、ルカによる福音書 2 章で美しく描かれます。天使が草原の羊飼いに「民全体に与えられる大きな喜び」を告げます。さらに「天の大軍が加わり、神を賛美」して歌うのです。わたしたちには「楽しいクリスマス」であります。いくつかの「喜び」が用意されるでしょう。そのわたしたちの楽しさと喜びは、天における、神における、大いなる喜び、楽しみがあるからこそなのだ、ということ

を聖書は教えている、というべきでしょう。

わたしたちが感じ、体験する喜びは、どうしても小さく、時間的に限界があることをわたしたちは知っています。しかし、キリストにつながる限り、わたしたちの喜びは天の大きいなる喜びにつながり、時間を超え、死をも超えて、まだ続くのだ、と信じたいと思います。

学長見聞録 vol.4

東北学院時報 第726号学生のキャンパスライフに寄り添うTGC

学長 まずはTGCの成り立ちとこれまでの経緯についてプロフェッショナルの水野さんに伺います。

水野 平成24年度に実施された若手職員研修で、東北学院における各種の取り組みへの改善・改革提案をプロジェクトチーム単位で提案することになり、当時の第3グループ提案とした職員コンシェルジュと職員の新たな役割による学生生活の充実化が新事業として採択されたのが始まりでした。採択後実施に向けて10名の委員が平成25年度から計画立案にかかりました。学生が入学前に思い描いていたキャンパスライフを実現するためにどうするか、学生のニーズを掴むためにアンケート調査を実施し、分析し、本プロジェクトの方向性を確認してから具体案を作成しました。平行してメンバーの研修も行い、窓口対応未経験者でもコンシェルジュ業務に携わる仕組みを検討しました。本務との兼任業務で実施計画を進めましたが、学内でのご理解と協力を得られたことがとても大きく感謝しています。

学長 皆さん大変苦労された二足のわらじで取り組んでくださったわけですね。そしてスタートした26年度新学期が始まってから様子はどうでしたか？

水野 私たちTGCは、キャンパスライフを充実させようという東北学院コンシェルジュは一人一人に併走します。という理念のもとに、新入生が最も迷う事務室の総合案内および相談窓口として課外活動の構築を行うことで、学生たちの理想のキャンパスライフ実現と学業をもっと好きになってもらえるようにサポートしています。とはいえ学生に手取り足取り教えるのではなく、「見守りつつ寄り添う」ことを学生の「気づき」を促すことです。

水野 初年度でもあり利用者は約200名ほどで、スタート時は道案内や窓口への話等といったものでしたが、GW前後には新入生も在生も留学生や学生生活の悩み、サークルに関するごなど相談の内容が厚くなりました。

水野 TGCの効果として期待された入学時特有の不安解消につながり、学生対応窓口の連携強化、課外活動への参加を促すことができてきました。終わって

気がついたことは、学生と職員の間が近くなり、きめ細かい対応ができていたこと、インナーキャンペーン的には職員同士のコミュニケーションも効果があったこと、ネットやメールでつながっているだけでは顔を合わせて話しかけることを大事に、学生たちの話をよく聞くことに徹して、その学生が何を求めているのか、話を聞いていくうちに自分なりの回答を見つけてきたこと、はうれし発見でした。協力メンバーを含めた10数人のスタッフが1日3、4人でロケテションを組み、12時から16時30分まで対応しました。学生の悩みも寄せられ、事務部長に伝えて対応いただいたということもあってTGCがあったからこそ解決できたことと感じました。

学長 鈴木さんは教務課だからそのあたりの相談内容と解決策が見えていたのかも知れませんが、そうですね。ではこうした経験から次年度はどのような活動に重点を置くのでしょうか？

水野 昨年7月から新たなプロジェクトメンバー10名を登録と準備を進めてきました。その結果教育現場は教育職員との連携、既存部署との連携が重要になると改めて実感しました。そこで、そのため教職協働という観点から先生方との連携を強めることになりました。次年度の協力メンバーには先生も数名参加していただきます。3月中には協力スタッフ20数名を含めてTGC研修を終え、新入生を迎える準備が完了する予定です。遅くともGW明けには、新入生とともに、卒業式のとときに大学に入ってから良かったと思うような準備ができています。

松本 学長からのコメント
昨年年度TGCは、4月8日から14日の7日間、のうけり期間だったそうです。常時3、4人のスタッフが2層階にエレベーターホール前にデスクを置いて学生に対応しました。大学生活で感じる不安や、授業のことなどを多様だったそうです。職員人事研修報告でも77年度の計画が出ていて、広範囲に力を入れ、学生にも利用してもらおう、職員と教員の参加も実現させよう、といった内容が盛り込まれていました。TGCのご提案が実現してほしいことをとても喜ばしく思います。早くキャンパスのTGCが来年度も成る土壌の新キャンパスでも実施されるように、と良いなと思います。

(参加者)
プロジェクトリーダー/水野麻美さん(国際交流課・泉キャンパス)、サブリーダー/齋藤涉さん(財務課・土曜キャンパス)、鈴木真津子さん(教務課・土曜キャンパス)、武蔵幸子さん(情報システム課・土曜キャンパス)
※注：卒業式開催日は2015年1月22日、所属は当時

「学生のキャンパスライフに寄り添うTGC」

今回は、本学職員による学生へのワンストップサービス「東北学院コンシェルジュ」(以下TGC)に取り組みたい職員を募集しました。コンシェルジュとはフランス語で「通訳者」や「窓口」というような意味です。本学では昨年度から、後の新入生を対象に、大学生活の「わからない」となっても相談窓口としてスタートしました。

学長見聞録 Vol.4
GAKUCHO KENBUNROKU

「十字架のことば」 『大学礼拝説教集』第19号

コリントの信徒への手紙I 第1章 18～25節

18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。19 それは、こう書いてあるからです。

「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。」

20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。25 神の愚かさは人より

も賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

時間というものはそれ自体見たりつかんだりできませんが、「未来はあなたの前にあると思いますか、それとも後ろにあると思いますか？」と尋ねられたら、皆さんはどう答えるでしょうか。一般に人は、未来は自分の目の前にある、という認識をもつのではないかと思います。

高村光太郎といえば詩集「智恵子抄」などで知られる詩人です。智恵子が福島の生まれであったことから、私たちも親しみをもつ詩人といってよいと思います。彼の「道程」という詩も有名です。私たちの世代は中学高校の時代に必ず教科書などで読まされたものです。私の中学生時代には「生徒手帳」に掲げられていました。今でも記憶しています。

僕の前に道はない

僕の後ろに道はできる

ああ、自然よ 父よ・・・

ここで「僕」は未来を自ら切り開く覚悟で歩み出そうとするのですが、まだ白紙、あるいは未踏の未来は、「目の前」にあるように見えます。そしてこれまでの彼の人生、つまり歩いて来て踏んだ跡が道にたとえられ、それは後ろにある、というのです。要するに、過去は「後ろ」にあると意識されているのです。

このような感覚が普通なのだろう、と思われまます。

しかし、未来と過去を指す言葉を探してみると、案外なことに気づかされます。今日が3月5日だとして、先立つ3月2日のことを、私たちは「今日から2日前」というのが通例でしょう。つまり「過去は前にある」のです。逆に未来に当たる3月10日については「5日後」と言わないでしょうか。間違いなくそう言うはずで、「未来は後ろにある」のです。英語も同様です。3日過去は、**three days before** ですし、7日未来は **seven days later** となります。**later** は「遅い」ですから、遅れる、つまり後ろから追う、ということになるわけです。フランス語、ドイツ語も、またそれらの祖先となるギリシア語、ラテン語も同様ののです。

現代人にとって常識とすら思える、未来と過去の空間上の位置観念と、言語表現は食い違ふということ。このことを示唆してくれたのは私の友人でもある旧約学者月本昭男氏ですが、彼によるとアフリカのさる人々の伝承に、未来を自身の後ろに置くという観念が明瞭に見られるそうです。彼らの伝承はかなり古い時代にさかのぼるようです。今生きているこれらアフリカ人は、未来は前にあるのではないか、というヨーロッパ人に、「未来は後ろにある。だって私たちは未来を見ることが出来ないではないか、目の前に見えるのは過去だけだ」、と答えるのです。

このように見ると、私たちの祖先は、言語を形成した太古の時代には過去を前、未来を後ろ、と言う風に観念していた、と想像してよいのではないか、と思われてきます。それがある時点で逆転してしまったということになります。先の月本氏とこのことについて語らっ

たとき、少なくとも聖書の観念上で、未来は人の前にある、逆転させたのは実は聖書だったのかもしれない、などと言いつつ合ったことでした。

実はパウロがそうなのです。彼は人生を競走にたとえます。「フィリピ」3章13-14節には「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」とあります。この未来観は高村光太郎のそれと同じです。

しかし、確かにアフリカの伝承にも一理があるように思われます。私たちは背中を未来に向けて生きている、後ろに未来があるから見えない。過去のことなら目の前にあって、よく見ることが出来る。だから、過去をよくよく見ることによって、見えない背中の中のものも予測がつく、怖くなくなる、というとらえ方が出来るかも知れません。

ともあれ、今日はじっくりと過去を見つめ、見えなくて不安な未来へもしっかりと進んでゆくよすがを得たいと思います。

最初のキリスト教徒は周囲の人々の目につまずきであり、愚かに見えるものをのべ伝えた、というのです。それは、ユダヤ人が拒み、排除したナザレのイエスが神の子、救い主キリストであった、というメッセージでした。そのキリストは神の子であって、しかも人間として生き、十字架で死んだが復活した、というメッセージは、アテネ人を代表とするギリシア人には愚かなこと、と映ったのでした。

パウロは、広くギリシア人たち異邦人に福音を伝えたこともあつてか、とくに「十字架の言葉」が、非キリスト教徒から見ての「愚かさ」の焦点であった、と強調するように見えます。これは古代世界ではもっとも洗練された文化を誇っていたギリシア人にとって、確かに価値の逆転であったのです。

佐藤研という新約学者は、そもそもパウロのキリスト教回心の原点が、むごたらしい刑罰であった十字架刑に処せられたイエスが、死んで復活したという事実にあつた、と言い、そうである以上「十字架」という、現代人にとってもはや忌まわしさを感じさせず、むしろ清らかさ、尊さを象徴する響きの言葉では不十分で、忌まわしさを明瞭に示す「杭殺柱」という訳語を提唱します。そのようなおどろおどろしい刑で死んだ、にもかかわらず、彼は復活し神の子であることを証明した、それを宣教することこそが愚かさの究極だ、というわけです。

彼自身が愚かさに一度はつまずき、しかしキリストの啓示によって、その愚かさが最高の価値となるという経験をしました。だからこそパウロの説教は、キリスト教の伝播において大きな力をもったのです。

以来2000年、この「愚かな」「十字架の言葉」が語られ、キリスト教は広がってゆきました。パウロから1800年を経て、アメリカから日本に来訪した宣教者たちもまた、この言葉を語ったのです。W.ホーイが語り、D.シュネーダーが語った「十字架の言葉」を知り、信じた押川方義もしかり、でした。彼らの「愚かさ」が仙台神学校の基盤となり、東北学院

の建学の精神となっていたのです。

日本人の中にもアテネ人のように、キリスト教を愚かそのものと決めつける者がありました。日本キリスト教史において有名な、政府の「訓令第 12 号」はその一例であり、キリスト教を教育課程に入れる学校は公認しない、と定めたのです。しかしそれ以後も、キリスト教会とキリスト教学校とは、この「愚かさ」に固着し、福音を神の力、神の知恵として伝え、教え続けてきたのです。その歴史の中に東北学院の一二八年も縫い込まれています。

これからの私たち、未来は、将来は背中にあり、見通すことは全く出来ないとしても、目の前であって遙かに向こう、つまり遠い過去までも知ることは出来ます。そこから私たちは「愚かな」「十字架の言葉」を伝え、教えることは正しいことであった、と確信できるでしょう。それは今の日本に、小さく、弱さを拭えないとしても、現に礼拝を行い、聖書を教える教会とキリスト教学校とが厳然として存在し、存続しているという一事もってして明らかだと思うのです。恐れずに、後ろ向きでも、未来に向かって確かな足取りで歩めるというものです。そう私は信じています。

祈り・・・私たちの主、イエス・キリストの父なる神さま、まるで後ろ向きで歩いているかのように行く先を見失いがちで、よろめいている私たちです。けれど、私たちが知っている、今このときに至るまでのあなたの恵みによって積み重ねられた歴史から、私たちが担っているキリスト教学校のわがが正しいことであると悟らせ、確信を持って未来へと歩ませてください。聖霊の導きをお与えください。主の御名によって祈ります。

2015（平成 27）年度

「迎える者がいた」

『大学礼拝 チャペルニュース』132

東北学院大学に入学された皆さんに、改めて心から歓迎の挨拶をいたします。入学おめでとう！もちろん皆さんは自ら学力を磨き、厳しい試験に合格して大学生の資格を得たわけです。それを、私たちは、神さまが皆さん方一人一人を選ばれたのだ、と信じ、またそのことを喜んでいきます。東北学院は、今から 129 年前、日本初代のプロテスタントキリスト教徒のひとり押川方義と、アメリカから日本伝道を志して派遣された宣教師 W. ホーイ、D. シュネーダーが協力して創設した学校です。その働きもまた私たちは神さまの計画と選びによって果たされたのだ、と信じているのです。

東北学院はこのように近代日本の開国のとき流入した、ヨーロッパの諸要素のひとつとしてもたらされたキリスト教を基盤としています。そのキリスト教が 2 千年前スタートした時代にキリストを伝えた最大の使徒はパウロでした。彼はユダヤからギリシア、小アジアに大伝道旅行を行って、エフェソやコリントなどの教会に福音を伝えたのですが、最後にイタリアのローマに渡りました。ナポリ近くの港で船を下りてから、徒歩でローマに向かいました。そのパウロを、ローマの教会の人たちは、ローマから何キロも先の宿場町まで迎えに来た、と聖書には記されています。彼らは、神の言葉を伝える使徒がローマに遣わされたことを喜んで、長い道のりを初めて顔を見るパウロのためにやってきたのです。

皆さんにとって、大学は未知の大きな世界だと思います。出会う人々も初めてでしょう。これからしばらく、新しい体験にばかり遭遇することでしょう。けれど、東北学院は、その皆さんを迎えに出ています。そして、私たちより先に、神、キリストが皆さん方を見つけ、駆け寄り、手を引いて迎えているのです。その迎えにどうぞ応えてください。

泉キャンパスでも多賀城キャンパスでも、朝の礼拝があります。そこでの聖書朗読も讃美歌もメッセージも、多くの新入生の皆さんには初めての出会いかもしれません。けれどその礼拝でこそ、いちばん神さまとキリストが近しく皆さんを出迎えることになるのです。礼拝堂を出て、そこからは学問上の、あるいは課外活動上の、新しい出会いの一日を歩み始めてほしいと思います。

「十字架のことば」

『東北学院大学教職員修養会・キリスト者教員研修会報告書』第 16 号

今日から二日間山麓の地に、街の生活から引き退いて教職員修養会をもつことができ、そして今、開会の礼拝を始める事ができて感謝しております。

過去を振り返り未来を見つめるとよく言います。今がその時であろうと間違いなく言えるのですが、過去を振り返るといふ以上、過去は後ろにある、ということになります。未来を振り返るとは日本語では言いません。従って、未来は私たちの目の前にあって、過去は後ろにあるというイメージです。このことを少し考えてみたいと思います。有名な彫刻家であり

詩人であった高村光太郎（こうたろう）、本名はみつたろうと言うようですが、高村の詩で誰でも知っている詩、私の中学校時代、生徒手帳に書いてあった詩です。「僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる。ああ、自然よ、広大な父よ」と続きます。高村にとってやはり未来は前にあった、まだ踏み込んでないから道はない、後ろに、過去に道はできると言っています。

このように未来は前、過去は後ろというのは、私たちによく慣れたイメージのように思うのです。しかし、少し言葉の上で考えてみますと、今日は9月3日ですが、9月6日の未来のことについては、「三日後に会いましょう」、「三日後に行政管理学会があります。」という言い方をします。で、9月31日は四日前という言い方をします。昔は、過去が前であると認識していた、だから言葉の上でこのようになったのではないのでしょうか。

英語もそうではないのでしょうか。未来になる **three days later** は、「三日後に」、です。過去の **two days before** は、「二日前に」、です。ある人の話では、アフリカの民族の時間感覚で、未来というのは自分達の後ろにある、過去だけが目の前にある、目の前にあるのは過去だけだ、我々は後ろ向きに未来へと歩んで行く、そういうことをかなりはっきり意識している、ということです。言葉ができるのは人類の歴史上相当早い段階ですから、思想や哲学、社会の生まれる前に、社会と言葉とどちらが先なのかは問題があるかもしれませんが、その段階では、今申したように、ヨーロッパでも日本でも、未来のことは後ろにある、過去のことは前にあるという観念が実はあった、それが今の私たちのように、未来が前になった、つまり逆転したのではないかということは、多少推測できます。

たしかにそういうふうに言いますと私たちは明日のことはわからないわけですから、三日後に行政管理学会があるといっても、この私が明日突然死ぬこともあるわけですから、それを経験することはできないという意味で明日は真っ暗、何もわからないということになります。もっとも、これが今日の本題ではなくて、私たちは前に向かって歩いていくと普通に言うのですが、目に見えるのは過去のことだけです。過去のことを見つめ、そして経験値として後ろ向きであれ、先へ向かって行こう、過去のことがよくわかればわかるほど先の不安も取り除かれるのではないか、そういうふうに考えてこの時を過ごしたい、そのように思っています。

さて、今日与えられた聖書の箇所、非常に衝撃的な言葉が書いてあると思います。パウロがそうでしたが、最初のキリスト教徒たちは周囲の人たちにイエス・キリストの教えを宣べ伝え、そのことを自分たちが信じ、今日の言葉で言うとそれを宣教していこうと言っていました。しかしそれは信じない人々、はじめてその言葉を聞く人々にとっては、つまずきであり、愚かであったということです。それをあえて私は必死で語り続けてきた、あなた方の目の前にあるこれまで知られていた知恵は知恵ではない、そのように言わなければならなかった、ということです。ユダヤ人にはつまずきであった、これは一種レトリックの表現なのでユダヤ人にとっても愚かであってもよかったのかもしれないのです。ユダヤ教徒たちがあのイエスを神の子だとは認めないで、ローマに訴えて裁判にかけてあざ笑って死に追いやっ

た。そのユダヤ教徒たちにとってはパウロたちがあのイエスこそ神の子であったということは、自分たちのやったことを全く否定するのかという意味でつまずきであったということが出来るだろうと思います。

ギリシャ人にとって、これはローマ人と言ってもいいと思いますが、要するにユダヤ教徒でない多神教徒であった人たちにとっては、十字架の言葉は愚かだったのです。この愚かとは、あほらしくて聞いていられないということですから、パウロの語ることは全くナンセンスだというふうにローマ人には捉えられたのです。どこが一番愚かだったのか、ポイントはどこにあるかと言えば、いろいろな観点で言えます。すなわち、弱い病人とか貧民とか女性とかそういう人たちがばかりのことを考えていた愚かなやつだということもあったでしょうが、もう一つヒントになるのは使徒言行録の中でパウロが、ローマ人のしかるべき地位にある総督に呼ばれて、おまえが言っているキリスト教とか、あるいはイエスとかいう人の話をしてみると言われて、パウロは自分の回心から始めて、自分たちの信仰の内容を話すわけです。かなり話が進んだところで、神の子キリストは、十字架につけられたけれども三日の後に死から甦った、というところまで話がきた時、総督は「もう聞いてはいられない、止める、出て行け」というので、おそらく最大の愚かさとは、非常に現実主義と思われるローマ人やギリシャ人にとっては、死んだ者がなんで生き返るんだということだったということには理解しやすいところです。それをパウロは象徴的に十字架の言葉と言ったのです。神を蔑ろにする者だと断罪されて有罪となって十字架で惨たらしい殺され方をしたが甦ったという意味を込めての十字架の言葉だということです。

昨年当学院に来て講演して下さった佐藤研さんという新約学者がいます。この方の『旅のパウロ』という、岩波から出ている本の中で、印象的に語られている点をちょっと引用させていただきます。十字架というのはキリスト教の歴史、そしてキリスト教学校の中で、非常に美しいシンボルとなっています。ペギー葉山の「学生時代」の歌に、「ろうそくの火に輝く十字架を見つめて」、というくだりがあったりして、とても美しい。この部屋にも十字架のペンダントをなさっておられる方があるかもしれません。ノンクリスチャンの女性、あるいは男性も、十字架のペンダントをわりとおしゃれで使いますけれども、実はそうではなかったのです。パウロにとっては、そんなきれいな美しい清らかなイメージをもつものではなかったのです。キリストが十字架で惨たらしく、さらし者にされて、脇を槍でつかれて、ついに非業の死を遂げたのが十字架の上だったのです。パウロに焼きついたイメージは、とてもとてもろうそくの火に輝く美しい十字架などではありませんでした。だから佐藤氏はこの十字架という言葉をあえてもっとおどろおどろしい言葉で言い直したほうが、パウロの気持ちには合うと言っています。佐藤氏が考案した言葉は、“コウサツチュウ”、“こう”は木偏の「杭」という字、“さつ”は「殺」という字、“ちゅう”は「柱」です。そういうイメージがある以上、「杭殺柱」の言葉はギリシャ人やローマ人にとっては愚かなものでした。非常に分かりやすいものだった、と言うのです。

このようなキリスト教を宣べ伝えるメッセージは当時の社会の中では、なかなかそのま

までは受け入れ難いものであったということです。イエスという人間が本当は神の子であったと、それは神ご自身がこの世界に来て、何の為に来たかと言うと、悩みを持ち、苦しみを持ち、生きても最大限 70、80 才で死んで、あとは何も残らない、そういう人生しかないと思っ込んでいる人たちに、とくに苦しき、悩み、貧しさを担っている人たちに対して、イエス・キリストはこのように杭殺柱で殺されたけれども、復活し、しかもそのキリストの死と復活は、人類の罪を贖って人間の救いを保障するものだったと伝えられたのです。これを受け入れることは、人間が死なないというわけではないけれども、死ぬということはそれで終りではない、キリストの例にならって必ず復活する、その望みを抱いて死ぬことができるのだ、というメッセージでした。ここに大きな転換というか、福音のメッセージがありました。十字架、杭殺柱の死は、しかし人類の罪の贖い、救いだというこの大変なパラドクスを伝えたということです。それを受け入れた者がクリスチャンになっていきました。それは遅々たる歩みではあれ、300 年で古代地中海世界に広がり、そしてヨーロッパへ、というかたちで 2000 年のキリスト教の歴史は、まさにその逆説を宣べ伝え続けて、人々を説得しました。説得させたのは、人かもしれないけれども、それは神の教えがそうさせたのです。そのようにして教会の歴史、キリスト教の歴史があるということです。

それから 1500 年経って、日本にもキリスト教が伝えられました。日本のキリスト教の受け入れ方というのは、最後に申しますけれども非常に独特なものがあったと思います。今、大河ドラマで、ちょうど折しもクリスチャン大名の黒田官兵衛が、そして高山右近が、豊臣秀吉の前に、キリスト教徒として風前の灯というところになっているわけですが、当時のたぶん九州から西日本にかけてのキリスト教徒は、現在の日本の総キリスト教徒よりも多く、何万、あるいは何百万というところでありました。ところが数十年を経てほとんど壊滅、消滅してしまったという歴史を持ちます。しかし、その後ごくわずかのクリスチャンが長崎にいたとしても、日本最初の宣教は終わりました。ようやく徳川の終りになって開国への流れの中で、アメリカが中心でしたけれどもヨーロッパも、ロシアも、あるいはイタリアから、あとフランスからもカトリックが来る。そのようなかたちで新しいキリスト教の日本における歴史が始まった。その中でキリスト教としては、再び同様に愚かな十字架のこぼを伝えなくてはならなかったということです。

その先人のことを我々は伝え聞き、そしてじつは東北学院もそのようなかたちでスタートしたというわけです。日本に入ったキリスト教が 16 世紀で挫折したのに、19 世紀末以後のキリスト教が今に至るまで存続しているということのひとつの意味は、そのキリスト教宣教がキリスト教学校、教育と結びついたということがかなり大きいのではないかと思います。教会だけではなく、1858 年頃に最初のクリスチャンが生れて、そのちょっとあとの世代に押川たちが洗礼を受けて、そして 1880 年代になって東北に入ってきて教会を最初につくったわけです。仙台教会が最初にでき、1886 年、明治 19 年に仙台では最初のキリスト教の学校ができ、宮城女学校ができ、そしてさらに他の教会ができていくということになりました。そして日本各地にも学校を建てるという働きが広がります。東洋英和については

カナダから来た宣教師が取り組みましたが、これがまた NHK 朝のドラマになっているわけです。

今日、講師としてお越し下さった桜美林学園理事長の佐藤先生の桜美林であります。その創設者は清水安三先生であり、その奥様、郁子さんと聞いております。このお二人がアメリカのオベリンで学んで、その名前をつけた学校であります。偶然かもしれませんが、桜美林を建てられた清水安三先生がお生まれになった年が 1886 年、明治 19 年であり、ちょうどその年に仙台神学校ができたというわけであります。ついでに偶然ながら、佐藤東洋士先生と私とは全く同じ年の生れであります。それはどうでもいいことではありますが、話を戻しまして、その愚かな言葉を、しかし教育と結びつけて、キリスト教学校は聖書に加えて、英語その他もろもろの、もろもろのというと、語弊があるかもしれませんが、子女に教育を施す根幹を十字架の愚かな言葉に据え、日本の教育レベルを上げるという貢献を果たしたのです。ここに一つの道を見出したということに、非常に大きな意味があったらと思うのです。

それ以後も、キリスト教学校は増え、今現在はプロテスタントの学校教育同盟に参加するものが 90 いくつもあるのです。カトリックを加え、あるいはそこに入らないキリスト教を称する学校を加えると、もっともっとたくさんある。ところが、日本における洗礼を受けたクリスチャンの数というのは 1%と言われ、今はひょっとしたら 0.8%とかで、もっと低いかもしれないのです。このパーセンテージは、明治の初期とか、第二次大戦後直後というような時期にはもっと多かったかもしれませんが、ほぼ一貫した数字です。しかし考えてみますと日本にあるおそらく 100、カトリックを入れれば 200 近い学校がありますが、毎年何十万人という、在学中何年か聖書を読み、讃美歌を歌い、説教を聞いた人たちを社会に送り出しているというわけです。そのような中で実際に洗礼を受けたクリスチャンは 1%、私はこのギャップというところに、日本に 19 世紀末に来たキリスト教の今や 150 年に及ぶ歴史を刻んで来た、一つの理由があるように思います。そこに神のご計画があったのかなというふうにも思うわけです。私たちキリスト教学校はともかくある段階で社会的、世間的、世俗的には愚か、あるいはつまずきと思えることを宣べ伝えているということを根幹においています。しかしその中で教育と言う面で社会と深く関わって生きてきたのであります。その過去を見つめ、したがって豊かな恵みの歴史を持っている可能性は秘められている 1%、すべてのキリスト教学校の卒業生だともっと多く、数%になると思う、そのような過去をしっかりと見つめ、後ろ向きにこだわらず前を向いて歩むように、私たちの学校は命じられていると思うのであります。お祈りをいたします。

<祈り>

尊いご在天の神様、今年の東北学院大学の教職員礼拝を豊かな恵みのうちに始めることができ、ありがとうございます。どうぞ十字架のことばを、たとえ愚かであれ、語り続け、教え続けているキリスト教学校をこれからもお守り下さい。そこに働きますもの一人一人をどうぞお強め下さり、それぞれの場で良き働きがなせるように、あなたがいつもそばにい

て下さい。この修養会の時に招かれて来られた佐藤東洋士先生の上に、豊かな祝福をお与え下さい。この願いと感謝を主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン。

「教会人として、キリスト教学校人として」『季刊教会』 No.98 2018 年春季

国立大学（東北大学）教員を定年でやめ、キリスト教学校（宮城学院）に移り、そこの務めの任期が切れて、別のキリスト教学校（東北学院）に働き場所を得て二年目である。前任校においては大学と直接関わりを持たなかったが、今の役職は大学学長であり、学生との距離を近いものにしたいたいと思い、授業を一コマもつことにした。学長が行う特別の授業というのではなく、元来の専門研究領域で担当できる授業にした。文学部の歴史学科が開講するヨーロッパ・アメリカ史講義の一つである。後期セメスターに開き、九〇分一五回である。それだけの授業の内容を準備するには私のこれまでの研究テーマ以外では難しい。そこで「初期キリスト教と古代地中海都市」と題して、パウロとローマ帝国の都市、ローマや諸都市のキリスト教徒の関係、といったことを語ることにした。

私は初期キリスト教の歴史を、古代ローマ帝国の歴史研究の一分野として研究すること続けてきた。だから、イエスについて言うなら、彼を歴史上の人物として、その生誕年次、生きた地誌的社会的環境、彼のとった社会的行動、受けた裁判の史実性を明らかにしたいと思うし、パウロについては彼が訪問した都市の当時の状況、彼と関わりを持った市民の社会階層、初期教会・教徒とそれら都市との関係、などを重視した。

これらのテーマについて、諸会合の合間を縫って講義している。なかなか新しい文献に目が届かないが、新しい邦語文献として、J.H.チャールズワース『これだけは知っておきたい史的イエス』と佐藤研『旅のパウロ』が役立っている。

初期のキリスト教徒の社会的あり方を眺めるとき常に気にかかっているのが、地中海地方諸地域の最初のキリスト教徒はどのようにして出現したのか、そしてどのように広がっていったのか、という問題である。イエスが十字架に架けられ、復活したのが後 33 年として、その後パウロが回心を体験し、伝道旅行を行い、40 年代にフィリピなどに教会を建てた、ということは想定できる。エルサレムで迫害を受けて散っていったキリスト教徒の中に、地中海へ出航した船に乗り込み、入港した町の知己を頼って逗留し、伝道を始めた者がいたのだろう、と私は思っている。

そしてそれぞれの都市に家単位の小さな教会が生まれ、少しずつ集まる者は増えていった。パウロはアジア、ギリシアのずいぶん多くの都市を経巡ったことが知られている。すべての都市にパウロが初めてキリスト教を伝えたとは考えにくく、彼が訪問する前に伝道した無名の使徒がいたと思われる。彼らがただ伝道でだけを目的に旅したのか、行商とか使者などの職業上の移動のついでであったのか、簡単には分からない。また、最初期の地中海世界の都市の教会に集まる人々はどのような社会層に属し、男女比、年齢構成はどのようなであったのか、聖書の読解力や信仰の理解度の分布は、などについても詳細を知りたいものであ

る。アカイア州総督とか女性実業家ルデヤなど、集めればかなりの人物名が挙がってくるが、有意の数的データとして利用するにはためられる。ところで最近邦訳の出た R.スターク『キリスト教とローマ帝国』（新教出版社）は、信者層や女性教徒、初期教徒の実数などについて従来の研究者よりも踏み込んだ考察を試みていて示唆的ではあるが、まだまだ推測部分やおおざっぱな分析が多い憾みがある。

もっとも、このスタークがユニークな点は、現代のカルトの拡大状況の researched から初期キリスト教のそれを類推するところであり、方法上危うさを内包するものの、いささかなり視野を広げてくれる。

古代から近世、500年前の宗教改革以後の時代については、たとえばプロテスタント各派がいかなる拡大の道筋をたどり、地域あるいは社会層のどの部分に食い込んでいったのか、はかなりの程度まで研究されていると思われる。その上で、そのような新しい宗教・教派伝道拡大の研究課題を提供したのが言うまでもなく19世紀の日本であった。しかしもちろん、私たちはプロテスタントの、江戸末期から明治初年にかけての伝道について多くの研究が積み重ねられていることを知っている。植村正久ら同時代人の文書もある。そのような階層・意識をもつ日本人がキリスト教を受け入れたか、についてたとえば土肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』は、旧幕臣、群馬の製糸業など近代化を担った企業人に最初期のキリスト教者が多かったとしている。これがこれまでの平均的理解であろう。しかし、プロテスタント伝道開始150年、などと標榜され、各教会やキリスト教学校でそれぞれの歴史が発掘され、書物化される、地味とは言え一種のブームは続いており、私の関わる学校でも、創設期のミッションなどの資料が今になって発見されて、研究が待たれる状況がある。最初に立てた、初期伝道の正確な実証について新たな発見が今後出されるかも知れない。

150年伝道の見直し、という点でいうと、私が国立大学を離れてから職を得たキリスト教学校の領域では、1910年創設のキリスト教学校教区同盟が100周年を期に発行した歴史・年表・個別学校史は時宜を得た企画であった。もはや紙数が尽きたので、私的断想を付言するにとどめるが、常に歯がゆさと悔いの思いを込めて言われる、150年の日本伝道でキリスト教者総数が全く増えない、という現状と、キリスト教学校の、さすがに近年の経営の厳しさはあるとしても、しっかりと歩み、とが示す違和感のようなものを指摘したい。先述のスタークの本物は、1世紀から4世紀までのキリスト教の増加を仮説的データで示す。それによると最初の総教徒数が10年で40パーセント増加したとすれば、発生後300年してローマ帝国に公認される実数（600万）に達したことが無理なく推定出来る、というのである（同訳書17頁以下）。

近代日本のプロテスタントは、そのような曲線を描いてはいない（多分）。明治期末年の教徒と平成期の数値はほとんど違いがないのではないかとすら思える。しかし、それほど減っているわけでもない。ここにキリスト教学校が若干なり役割を果たしているのは間違いない、と考えるのである。いずれにせよ、キリスト教学校の淵源はプロテスタントにあると言われる。ルターが1524年、『ドイツ全都市の市参事会員に対する勧告』で、「福音のた

めに」人文主義教養教育の学校づくりを命じたのがそれである。

ひとり各教会の歴史と、キリスト教学校の歴史の範疇でのまとめ方ではなく、日本社会とキリスト教の関わり、一宗教の日本への浸透の様相、を捉える広い視野、という事をもっと考えてみたい、ということである。

法学部創設 50 周年記念誌挨拶

東北学院大学法学部創設 50 周年、誠におめでとうございます。

『東北学院百年史』によりますと、1947（昭和 22）年本学院が新制大学を設置したときには文学部と商経学部の 2 学部でありましたが、1952（昭和 27）年、短期大学部に法科が設けられた、とあります。第 2 次大戦後の社会において、法律・訴訟等に関する知識が巷間広く求められ、短大卒業生多数が、各種国家試験に合格した、とも記載されています。そのような社会的機運に鑑みて、いよいよ 1965（昭和 40）年、法学部の創設に至った、と推察されるのです。初代学部長には長く東北大学で教鞭を執り、労働法の権威であった津曲蔵之丞が任じられました。開設後最初の定員は 150 名、志願者は 729 名に上ったと言います。本学院の法学部創設は実に時宜にかなった出来事であったと申せましょう。

爾来 50 年、東北学院大学法学部はすぐれた教授陣を招聘し、質の高い教育を行って発展を続けて来られました。卒業生は法曹界のみならず、政治・行政・経済・社会諸分野において受け入れられ、活躍していることは、特に東北地域全般にわたって高く評価されているところであります。

私自身は文学部出身ではありますが、西洋古代史の研究者ですから、古代ギリシア、ローマ帝国の時代は、政治も法も経済も文化がまだ未分化な状況から、次第に学問的に区分されてゆく流れの中にあつた、と感じています。まさにプラトンとアリストテレスの著作に「法律（ノモス）」と「政治学（ポリティケー）」が現れ、紀元 5 世紀にローマの法を集成した「テオドシウス法典」が出現し、たどってゆけば現代日本の法や政治の学の起源となったわけです。その点古代史学者として理由なく、誇らしく思っているのですが、それはさておき、古代に社会というものが生まれたとき、その社会を組織し、維持してゆくために、軍事だけでなく、制度や政治、それを整える法というものが必ず意識され、その観念が発展することが、当該社会の発展をも意味した、という事実があつた、と思っています。

法学的知見と素養は従って、今に至るまで、社会における組織体を動かすために誠に有用なのです。大学あるいは学院運営に携わった者として、法学教授とか弁護士さんとかにアドバイスを求めない学長も経営者もあり得ない、と断言してはばかりません。それは、必要な事柄のレベルは様々ありましようが、一般社会においても同じ事のように思えます。大学法学部の果たす役割はこのように大きいわけですし、将来も変わらない、あるいは更にその役割への期待は高まるのではないのでしょうか。

東北学院大学法学部のこれまでの 50 年の歴史に敬意を表し、お祝い申し上げますと共にこれからの 50 年、70 年への継続と発展が、確実に希望に満ちていることを喜び、そのお働き

に期待申し上げて祝辞といたします。

「視点 隔ての中垣は取り除けるか」『七十七ビジネス情報』第71号 2015年秋季号

マイクロソフト社の創業者ビル・ゲイツが世界第一位の資産家であるということは周知の事実である。記録によると2014年現在総資産は810億ドル、日本円で9兆2千億ということである。彼とよく対比された、アップル社の故スティーブ・ジョブズは、給与年額1ドルしか取らなかったというが、ビル・ゲイツ自身は慈善事業を組織してかなりの私財を投じていると話も聞く。ともあれ、それはここではしばらく措くとする。

途方もない資産家というものは、私が専門としてきた古代ギリシャ、ローマでもよく現れる。前6世紀末の歴史家ヘロドトスが次のような逸話を記している。

まだギリシアにポリスが成立しかけた時代、地中海で貿易を行う商人が出現した前7世紀頃のサモス（エーゲ海の島）の人コライオスは、アフリカのリビアに一時立ち寄って、そこに漂着していたコロビオスという男に1年分の食糧を与えるような太っ腹な商人だったが、西へ航行し、ついにジブラルタル海峡を抜けて大西洋にいたり、そこから珍しい物産を持ち帰ってギリシアで売り払い、かつて誰も得たことのないほどの利益を得た。ヘロドトスはこれに続けて、「彼らといえども、アイギナ（アテネの近くの町）人ソストラトスには及ぶべくもなかった」とも伝えている（巻4、152）。その富の詳細は不明だが、当時の独立国家ギリシアのポリスの年間の国家財政を遙かに超える富、というあたりだったと思われる。

ローマ時代はどうかというと、前2世紀からその支配領域はそれ以前のどの古代国家をもしのぐことになったし、生産物の集積システムも整っていったから、中央権力者の富は当然すさまじいものになった。後1世紀のローマ皇帝は、国の財政とは別に私的な財産をもったから、たとえばアフリカの今で言うならリビア・チュニジア・アルジェリア全土の半分を皇帝所有地とした、などと計算されることがある。帝国に600人いた貴族元老院議員の富（古代の富の単位は基本的に土地。そこで生産される農産物、手工業生産物を売却して貨幣を獲得し、更なる土地獲得にもあてた）も皇帝ほどではないが半端ではなかった。

このように古代地中海世界では、極端な大富豪が少数で国家の総資産の大半を所有するという構図が成り立っていた。他方、人口の反対の極には、途方もない数の貧民が、人間的生活すら送れずにあえいでいた。帝国の首都ローマは1世紀、120万の人口を擁したが、そこには権力者にして大富豪の皇帝と元老院議員が宮殿や大邸宅を営む一方で、高層アパートの、水道も届かない上階の狭い部屋にすし詰めで貧しい労働者が住んでいた。この大都市は古代の富者貧者の巨大な格差をそのまま示しだしていた。

それ以後の人類史上、およそすべての民族社会で、富と貧の巨大な格差は普遍的現象であった。性差、身分の差もそれに付随して存在した。その間、格差のない社会が望まれ、実現の努力がなされなかったわけではない。前5世紀のプラトンの理想国も、16世紀のトマス・モアのユートピアも、理想社会の条件の一つには「富の平等」を挙げているのである。

そのためにとられた方策は、富者の税負担を強める累進課税であったり、福祉政策であっ

たり、評判こそ悪いが、いわゆる「ばらまき政策」であったり、よくて「善意の寄附」であったりした。もっともこれらを数え上げると、実は古代ギリシアでもローマでも、とっくの昔に実行していた政策ばかりなのである。それは都市の祭典の催し物、貧民への小麦の分配、公共建築事業による雇用促進など、実に多岐にわたった。しかもその経費に私財を投じた富豪には一般大衆からやんやの喝采や名誉の称号が奉られたりして、格差解消の努力は倫理的に評価されもしたのである。案外現代国家の、税による弱者支援よりもわかりやすく、暖かみのある制度だったと言えるかもしれないが、明らかにこれは「上から目線」の「施し」にすぎず、権力者たちが下層民にいただくイメージは侮蔑と、反乱を恐れる恐怖でしかなかった。

近時話題となったフランスの気鋭の学者トマ・ピケティ『21世紀の資本』が現代世界の貧富の格差の危機的拡大状況を指摘し、その対策として提案したのも富者への課税であつたようだ。もちろんそれが世界各国政府によって実施されることはきわめて望ましい。しかし、現代社会の「格差」の現状はもっと広く深く、絶望的であるようにさえ見えるのではないだろうか。

富者と貧者の格差は過去の時代や他の地域と比較することは難しいが、少なくとも我が国の「ワーキング・プア」の状況は年ごとにひどくなってゆくようである。いわゆる「中産層」がやせ細り、家族のつながりが希薄になり、シングルマザーも老人たちも孤立してゆく。格差はまた、社会的な亀裂と溝と不可分である。亀裂は今、国際的にも深刻化している。シリアの内乱から流出した難民は、どこの国であれ、今後長く格差の下層で更に苦しむことになるだろう。むしろ流出できなかつたシリアやリビアの民衆の方が、戦争と、それに付随する飢えや病気に痛め続けられるのだ。その原因である、いわゆる I.S. とそれに先だって国際テロに走り、アメリカなどの大国と実質上の戦争を展開したイスラームの一部勢力との間には、宗教上の亀裂だけでなく、先進国と途上国との富の格差が生み出した敵意の壁が明らかに存在する。

アメリカ内部にも人種差別・貧困による格差があり、政治思想上の対立もある。安定していると見られるドイツにすら東西問題は残っている。アフリカ、中国、インド、東南アジア諸国にも、格差と溝と憎悪の壁は至る所にある。

これは全人類が、地球環境対策と共に、否それ以上の危機意識を持って取り組まなければならない課題ではないか。ことに国家の要職にある者、財政金融、そしてメディアを担う者の喫緊の課題であろう。

聖書に聞くなれば、「キリストは神の平和」であり、彼は人類の間の「隔ての中垣を取り除く」ために来た。この 2 つめの言葉を課題解決に乗り出そうとする人々のスローガンにできないだろうか。

2016年 年頭所感「創立 130周年を迎えて」

2016年を迎えました。明けましておめでとうございます。神が1886（明治19）年にお建てになった東北学院が130年目を数えることとなりました。この年も、キリストに導かれ、若者の教育という使命を、着実に誠実に果たしてゆきたいと思います。東北学院につらなる皆さまの平安、またご健康を心より祈ります。

130年を記念して、いくつかのことが計画されています。3月には土樋キャンパス正門の正面に建設中の北地区新校舎が完成します。名称は「ホーイ記念館」と決まりました。押川ホール、シュネーダー記念図書館に続き、「三校祖」を冠する施設がこれで揃いました。献堂式や、学生、同窓生に紹介するイベントが楽しみです。130周年記念式典は創立記念日前日の5月14日（土）（15日が日曜のため）に開かれます。文化と歴史にまつわる講演を識者をお願いしてあります。このほか音楽の集いや資料展示が予定されています。ボランティア報告やスポーツ、各学校の学園祭も130年記念の冠をつけて祝いたいものです。

昨年の本学院の歩みは、平穩そのものではありませんでしたが、多くの成果を挙げ、将来への布石をおくことができたと思います。幼稚園、中学校、高校、大学それぞれ日々の礼拝が守られ、節目には外部から、たとえば夏休み明けの大学修養会には前東京神学大学長近藤勝彦先生を招いてキリスト教学校の存在意義の大きさについての講演を聴くなどして、励ましが得られました。

半年をかけて、TG Grand Vision 150を策定しました。これから20年後を見据え、本学院が建学の精神を守って存続できるよう、まずは向こう5年間の中期計画を定め、2016（平成28）年度からの年次計画はその中期計画を段階的に実現してゆくものとして位置づけます。成長し、生き生きとした存在感を示す学校法人でありたいと思います。

大学は教育の質的向上のための改革が徐々に進み、文科省の大学総合支援事業の指定項目をクリアしました。授業の充実に努め、学生の満足度を更に高めたいものです。ホーイ記念館には、IT時代対応の新機軸の授業を展開できる「ラーニング・コモンズ」を設け、学生たちの主体的な学修を支援します。また一階には味自慢のパン屋さんが営業し、近隣住民にもウェルカムです。地階の小ホールでは音楽や劇のパフォーマンスが学外の人々にもオープンで提供されることになるでしょう。

中学校・高等学校、榴ヶ岡高等学校はそれぞれの特色を明確にして、中長期計画を構想しています。野球や水泳など、スポーツで（ダンスも！）活躍する生徒が目立った昨年でした。今年も期待しますし、進学の結果についても教育内容の更なる高度化によって向上してもらえましょう。大学一高校をつなぐ努力をもっと進めたいと思います。TG推薦による入学は大事にしなくてはなりません。キリスト教と「情報」の授業に関してはTG推薦入学生のためのメニューを用意することになりました。学校法人が一体であって、しかし各学校がマルチな魅力をも展開させる、生きた学校法人でありたいと思いま

す。幼稚園が多賀城の地でなくてはならぬ幼児教育でよい評価を得続けていることをも感謝しています。

日本社会が直面する難しい課題に東北学院もさらされています。一つの学校になしうることには限界があります。少子化対策、環境破壊、自由への抑圧、平和への国際的脅威、人と人の差別、いじめ、心の弱り、老人と若者を問わない「孤立」の傾き、働く場所がない、あっても報われない、貧しさという社会的病理、なんと社会が、学校が考えなくてはならない問題が多いことでしょうか。それでも私たちは誠実にひとつひとつ、学校として用意できるプログラムを構想します。キャンパス禁煙、平和の福音を語ること、奨学金の拡充、個々の学生生徒の抱え込む問題への気づきと、組織的なケアシステム、社会を生きるゆく力をつける教育、などなど。これらのアイテムの基盤に、私たちの建学の精神があるのです。この年も、東北学院の上に神の守りのあることを信じ、しっかりとした歩みを共にしたいと思うものです。

「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」（ローマの信徒への手紙 12:9-12)

「大学論の周辺」日本私立大学連盟『大学時報』No.366 2016年1月発行

1. あるシーン

最近好んで観ているBSテレビの刑事ドラマがある。舞台は1940年代のロンドン。さる巨大企業が国際的な犯罪に手を染めていることを女性秘書が察知して外部に通報しようとしたところを見つかり、高層ビルの窓から突き落とされる。彼女がビルの壁沿いに落下してゆくシーンを見て驚いた。この巨大企業の建物は、コンクリートむき出しの白亜のビル、私にとっては懐かしいロンドン大学の本部「シネイト・ハウス」だったのだ。秘書が頭から血を流して倒れている場所も映されたが、そこはかつて私が研究のために通っていた大学への通路だった。かのロンドン大学もテレビドラマに建物を提供する時代となったのかと、とおかしくもなった。

日本のドラマでも本物の大学が撮影現場となる。赤門などすぐわかる大学は用いられず、実在の大学を背景に、「洛南医科大学」とか「東都城北大学」とか、一見ありそうで、実は架空の大学の銘板が画面に映される。見る人が見れば本当はどの大学かはすぐに分かるのであろうと思う。ちなみに、現在放映中のいわゆる「朝ドラ」は、日本女子大学の創設者がヒロインと聞く。ドラマ展開がそこに至れば、同大学の建物が使われるのであろうか、興味がわく。かつては宮城学院も東洋英和女学院もその卒業生がヒロインとなり、学校自体も登場したことを思い出す。そういえば大河ドラマでは同志社も、という具合である。

映画への露出度だけの話ではあるが、1つには大学という存在が社会においてそれなりにある種の評価を受けて認識されている証拠だということである。権威・畏敬という観念が大

学にはまわりついていると言ってよいであろう。もう1つは、大学の側が、多分ある時期からテレビなどで舞台とされることを広報的観点からも積極的に受け入れるようになったということである。事実、大学関係者の大きな会合などでは、必ずその年話題のドラマに登場する大学の関係者が周囲から声を掛けられて、いささか面はゆいような、時に得意そうな表情で応える場面によく出くわすのである。私が勤める大学の正門広場には、建築後100年近く経ち、文化財指定を受けている建物が3つ並んでいて、それなりに古さを感じさせる雰囲気があるのだが、そのせいでか1969年の大学紛争をテーマとした映画のロケに使用を打診され、喜んで提供したのも、そのような下心からだと言えなくもない。撮影当日は発煙筒や赤青の旗、機動隊と「反帝学評」などのヘルメット学生に扮したエキストラたちがもみ合う姿が見られた。

いささか妙な書き出しになった。「大学」についての文章を依頼されたのだが、「学長ガバナンス」も「教育の質的転換」「PBL」「ディープアクティブラーニング」など、どなたもよくすでに論じられていて、さほど勉強していない私に容喙の余地はないように思える。よろしければ、「大学と私」という風なスタンスでつまみ食いのような大学論、否、大学閑話におつきあい願いたい。

2. 大学のたたずまい

東京大学は金沢前田家の江戸屋敷跡、東北大学は伊達家青葉城二の丸、京都大学は西園寺侯旧邸という風に、日本の帝国大学は庶民の町にありながら隔絶した権力者層の塀の中に建てられて始まった。私が人生で初めて足を踏み入れた（正確に言うとその宿舎ではあったが）のは故郷の国立大学（当時）、岡山大学であった。当時同大学の教育学部附属中学校生徒であった私を南勝一校長先生が自宅に招いてくださったのである。大学キャンパスに隣接した教職員宿舎であった。南先生は、おそらく教育学部教授で校長を兼任されていたのであろう。ともあれ、岡山大学そのものは新制大学として第二次大戦後、旧陸軍第一七師団跡地に旧建物を利用しつつ設立されたのである。これもまた、一時的にせよ国家権力を象徴する隔絶されてた立地で大学に置かれた例であり、少なくない例でもあろう。

そうではない立地の大学も、もちろん多く生まれた。世界の大学に関する私の知見は、そもそも訪れた国に地域的偏差という制約があるので、見てきたことだけを記す。話は飛ぶが、30年ほど前まで発行されていた冊子に、御茶の水書房発行の『社会科学の方法』という、いい内容の冊子があった。当時、私が属していた東北大学のリベラルな社会科学系の教授たち、すなわち世良晃志郎・樋口陽一・広中俊雄・吉岡昭彦氏らを共同編集者に掲げて、識者の間ではよく読まれていた（思えば、これら進歩派論客の諸先達で今もご健在なのは、今年安保法制廃棄について歯切れよく主張していた樋口氏だけで、あとは皆故人となった。）その冊子の表紙裏見返しにコラムがあり、「世界の大学」というシリーズで写真付きの紹介文が連載されていた。編集者の一人、私と同じ西洋史学の吉岡氏から、私がイタリア出張する機会に2つほど大学を取材してきてくれと頼まれた。

1979年のことと記憶する。シチリアの首邑パレルモの大学とナポリ大学を、訪問というのではなく写真を撮り、キャンパスをのぞいたという程度に見ては来た。もちろんナポリ大学の方が規模が大きくレベルも高いので、建物の大きさや風格にも自ずから差はあったのだが、共通して感じたのは、街の通りに他のビルや店舗と並んで位置し、都市の生活に溶け込んでいるということであった。建物に入る、それも日本の多くの大学のように正門をくぐって、というのではなく普通の道路の歩道からドアを押して入るという感じなのだ。しかし、ナポリ大学はさすがに中は18, 9世紀そのまま、天井高く薄暗い、歴史的存在ではある。ただ、都市から隔絶せず、町中の一角にあるのである。

このたたずまいは、後に訪れたロンドン大学の、先述した殺人事件現場ロケに使われたユニヴァーシティキャンパスも同様である。地下鉄の駅から階段を上って道路に出るとパブがあり、それが大学の建物の一部であったりする。公園を前にして中規模の教会がある。それもロンドン大学のチャペルの一つという具合である。余計なことだが、こういう大学では学生の体育の授業はどこで行うのだろう気になったほどである。

もっとも、英国でも地方都市ノッティンガムの大学へ、さるローマ史学者を訪問したことがあるが、この大学は正門があり、新しいビル群で構成される、日本の地方大学そのもののような立地とたたずまいであった。それは、先日訪問した韓国の2つの大学で感じた印象である。

英国でも、おそらく定まったパターン化は出来ないであろうが、「都市と一体型」キャンパスという色合いはどうも日本よりも強いのではないかと思わざるを得ない。オックスフォードとケンブリジの両大学は英国においても別格であろうが、それぞれに2つの町が大学そのものというありようはよく知られるところである。現在は大学の建物と関係のない市街地エリアが広がってはいるが、町が本来大学の学寮群として始まったのがこの二大学である以上、当然だろう。これはボローニャ、ハイデルベルクなどの欧州諸国の古典的の大学についても言えることだろうし、カンタベリーやモンサンミッシェル、日本の門前町も似たような歴史によって現代の町と一体化したたたずまいを持つことの説明になると思われる。

日本の大学は19世紀後半になってようやく出現し、大半は国立大学として国家権力の政策的意図によってたたずまいを定められたから、城やら大名屋敷やらの巨大な敷地をあてがわれることにならざるを得なかったし、戦後に生まれた大学も、それなりの広い土地を囲い込む門と塀とが必需と思込まれたということではあるまいか。私立大学には、一部には庶民の町の一角の民家からスタートしたものもあったろうが、多くはすでに定まっていた国立大学のたたずまいを継承した。「大学の権威」を持たなくてはならなかったからだ。

私が属するキリスト教学校について言うと、19世紀後半、欧米のミッションによって建てられたものが多くを占める。建築家も欧米人で、キャンパス構想も建物も、日本の19世紀の町の中につくることになった。国立大学とはまた異なる、キリスト教のプレゼンスを印象付け、学生を確保するための美しさが追求されたが、それはしかし一種の権威主義の現れではあった。だから、町並みの中の学校ではなく、門を入り、瀟洒な建物を仰ぐ、そのよう

な学校となったのだらうと思うのである。

それが過ちであったというのではない。ほぼどの大学も 60 から 100 年の歴史を経た現在、大学のたたずまいは、隔絶的ではあれ町の中に安定したプレゼンスを主張している。老朽化した部分の取り替えや、新たな社会的ニーズに対応する手直しは当然のこととして、そのままのたたずまいを守ってゆくに如くはないのである。

とはいえ、新しい大学の設置は至難の業であるが、新キャンパスや新校舎の建設は行われる。それも各大学競って急ピッチの観すらある。その流れの中では、これまで述べてきた「町の一角にある大学」が基本理念となっている。門や壁は設けない。建物は駅の近く。コンビニをテナントで入れ、カフェも、またしばしば開く音楽などの学生、プロ問わないパフォーマンスもまた近隣住民に公開するというコンセプトである。学内の設備でも、「喫煙室」はない方がいいが、受動喫煙を避けるためにはまだ不可欠だし、自動ドア、パソコン設備、最近話題になっている「パウダールーム」なども、この大学の公開性・開放性推進のために避けられない。否応なく各大学が対応することである。

大学は白い巨塔ではないと言われて久しい。まだそんなことが、というのではなく、英国のオックスフォードタイプの大学、すなわち大学が町そのものであり、町と一緒にある大学が日本の大学の現在のトレンドという風に考えるのが、私には多少心休まるころなのである。

3. 大学改革に欠けているもの

2014 年、私立大学をゆさぶったのが「学校教育法の改正」であった。学長ガバナンスの遂行を効率化ならしめるための規程を大学において整えるために、かなりの時間とエネルギーを費やし、寄附行為まで含めて多くの規程が改定された。具体的には、本学では全学教授会というものを廃止したから、実質的にこの法律改正の影響は大きいと感じられた。しかし、この改正の仕事は規程と制度上のことであるから、学長が突然物事を独自に決めるようになったというものではなかった。たとえば学長選考の方法にしても、教員全員の投票による選出自体は認められなくなっても、その結果を法人は参酌するという追認できる、としたから従来と変更はなく、実際にいくつかの大学で従来通りの方法で学長の選出が行われたと聞く。

むしろ、大学に実質的改革を急がせたのは「改革支援事業」、例の「タイプ 1～4」認定のための改革ポイント制であった。単に規程制定にとどまらず、会議録・表彰・評価表などのエビデンスが求められたから、全教員にも作業が求められることになった。しかもポイントがとれなければ補助金カットというペナルティがつくから、わかりやすいとか無理矢理効果を引きずり出すものだった。これはしばらくは毎年の仕事になりそうであるから、一層きついということである。

そこに 2015 年の 6 月 8 日の「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」なる下村前文部科学大臣の通達である。もっぱら「第三 1 組織の見直し(1)」後段「教員

養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、一八歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう」の部分を取りざたされ、国立大学協会をはじめ始め多くの分野から一斉に反発が起こったのは周知の通りである。

これに対する文部科学省の弁明でも、懸念は失われず、わが日本私立大学連盟インテリジェンスセンター政策研究部門会議の「提言」が、私学が重視する人文社会科学分野でのリベラルアーツ教育を擁護し、国立大学の識者たちは『IDE 現代の高等教育』575号（2015年11月）で「文系の危機」というキャンペーンを行ったことについて、ここで論を重ねる必要はない。ただ、文部科学省というより首相の全体的な政策姿勢への懸念、不安、不快感は募るばかりである。「苛政は虎よりも猛し」である。私たちは私たちの意志を常に発信し続けなくてはならない。

現下求められているかに見える大学改革への視点に欠けているものは、学生へのまなざしのみならず、大学教職員へのそれ、要するに「人間・人格・精神」を包摂する視野、思いやり、である。

ホーイ記念館献堂式式辞（2016年3月28日）

本日ここに、ホーイ記念館の献堂式を挙げるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

東北学院創立130年の記念すべき年に、このように壮大で美しい校舎が与えられたことを神に感謝します。本記念館完成のために誠心誠意お働きくださった方々、この式典にご参加くださった皆さんにも、厚く感謝申し上げます。

土樋に全学生を集中させ、都市型キャンパスにおいて4年間一貫した教育を行う、という構想が打ち出され、校舎の建設地を求める努力を払ってきました。その過程で3.11の東日本大震災が起こり、計画は水泡に帰した感もありました。しかし幸いにも関係者のお働きと協力の思いが相俟って、東北大学より片平校地の一部の土地購入の運びに至りました。

その後法人、大学一体となって新校舎建設のプロジェクトに取り組みました。講義室・演習室・教員研究室の確保は、2, 3, 4号館など、改築が急がれる老朽棟からの移転をみこんでのごことで、入試・就職キャリアなどの事務部門のいくつかを移すことも同様でした。しかし、新棟には、これまでの本学にはなかった魅力的な要素を盛り込むことで皆一致しました。主要なテーマは二つと言ってよいと思います。

一つは、大学教育の質的転換が求められている時代状況で、授業スタイルのIT化に対応することでした。学生がパソコンを駆使して、主体的に研究テーマを定め、データを集め、プレゼンする、いわゆるアクティブ・ラーニング展開の場としての「ラーニング・コモンズ」の設置がそれです。そのためにWGをつくり、図書館長らが他大学を訪問調査して、本記念館の「コラトリエ」を構想したのです。

二つ目は、新棟は「地域と共に生きる大学」の建物として、近隣の住民にも開かれた要素

をもつものとする、ということでした。数千人集まる学生たちを受け止めてくださる住民と交流できる大学でありたい、との思いから、ここ3年ほど、小中学生音楽クラブを招いて大学の吹奏楽と合同演奏会など行っていますが、その延長線上で、新棟には人気のパン屋さんにも参入願って、市民公開のカフェテリアを設けることとしたのです。このほか、地下の小ホールも、音楽や講演などを市民に広く提供する機能を果たすことでしょう。

2014年、新棟の構想を固めて、設計会社の応募を受け、三菱地所設計さんと契約する事となり、更にプランをブラッシュアップさせて、工事は大林組さんをお願いしました。大林組さんには全工期18ヶ月、という他社を遙かにしのぐ短い工期を提案してくださいました。着工は同年の10月でした。それから三菱地所設計、大林組一体となって作業を進めていただき、毎月1回報告会が開かれて、工程表通りの進捗状況と完成部分の説明を逐次我々も知ることが出来ました。

かくしてまさに予定通り、18ヶ月を経て竣工引き渡し、献堂式挙行、に至ったわけであります。見るからにモダンな21世紀風の透明な輝きの新棟の完成であります。学院として大いに誇りとするに足る建物であると確信するものです。工事に携わられた両社のお仕事ぶりには感嘆と感銘を覚えずにはられません。改めて感謝申し上げる次第です。

もちろん、新棟完成のために協力され、調査や実務作業にあられた学内外の関係者は多数に昇ります。ありがとうございました。

因みに新棟の「ホーイ記念館」との名称ですが、言うまでもなく東北学院創立の三校祖の一人からとられました。シュネーダーは旧図書館に、押川方義は8号館のホールに、それぞれかぶせられていますが、ホーイを掲げた施設はありませんでした。従って、名称の公募も行ったうえで、副学長らと選択するのに異論はありませんでした。

ホーイ記念館が、これからも仙台の中心にある都市型大学として発展してゆくシンボルとして機能し始めたことを何より幸いに思います。その新棟を機動力として、東北学院大学の教育研究が進化し、地位と共生する理念が広く知られることを願います。また130周年記念事業の柱の一つである土樋キャンパス構想が、これによって第一歩実現を果たし、これも今年から始動したTG Grand Vision 150の遂行に勢いをつけることを切に願うものです。

改めて本日、ホーイ記念館を神さまに捧げることが出来たことを感謝し、ご参列いただいた皆様に感謝し、ご健勝をお祈りして、式辞といたします。

2016年3月28日

学校法人東北学院 理事長・学長

松本 宣郎

「生きる意味」

『大学礼拝説教集』第20号

7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。8 わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、9 虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。10 わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。11 わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。12 こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることとなります。13 「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおりの、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。14 主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。15 すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

コリントの信徒への手紙 II 4:7-15

私たちは苦労や失敗が絶えず自分にまわりつく、と思うのではないのでしょうか。楽しいこと、幸せだと思ふ時間はすぐ終わってしまい、また新たな困難さが起こってきて苦しむのだ、と。人間のこのような気持ちを、イエスもご存じでした。「主の祈り」には、「我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」とあります。つらさや痛みは試みなのだ、しかし出来ればそのような経験はしなくてすむように、神に願いなさい、ということです。

私たちだけではありません。イエス自身も苦しみを感じ、悩んだのです。逮捕を目前にした夜、ゲッセマネで、「イエスはひどく恐れてもだえ」、「わたしは死ぬばかりに悲しい」、と言われました(マルコ 14:34)。イエスはこの後間もなく捕えられ、裁判の場に引き出され、死刑を宣告されて十字架を背負わされて、丘の上で処刑されたのです。これほどに苦しく悲惨な時間を体験することを讀むと、私たちの苦しみなど取るに足りないものに見えてくる、と言えるかも知れません。

しかし、残念、というより悲惨、と言うべきことに、新聞やテレビその他のメディアを通じて、想像を絶する苦難に遭遇している実に多くの人たちがいることを私たちは知らされています。その苦難はしばしばそれらの人々を死に至らしめることも少なくないのです。

差別やいじめ、虐待にさらされている幼い子どもたち、貧しさのために過酷な労働を強いられているシングルマザーたち、宗派と政治の亀裂から引き起こされた戦争と暴力の犠牲となっている人々、住む国を失った難民、また大都市の中心でテロに傷つけられ、命を奪われた人々、飢えに苦しむ者、いわれのないヘイト被害にさらされているグループ、深刻な病

が進行している患者、等々。

もちろんこれは現代人だけのことではなく、全歴史を通じて、人間たちが経験したことであります。たとえば、第二次世界大戦中、ユダヤ人たちが受けた迫害の中で、ユダヤ人精神医療学者ヴィクトール・フランクルの残した記録があります。我が国でもよく読まれています。『夜と霧』『死と愛』などがそれです。フランクル自身、ナチスのユダヤ人収容所に長く拘留されました。彼自身は生き延び、終戦後解放されたのですが、彼の妻は別の収容所で命を落としました。そして彼は収容所で過ごす間、多くのユダヤ人が極限状態の中でどのように生きたか、また死んでいったか、を観察し、記録しました。

飢えと寒さ、拷問、動物同様の扱い、希望のない日々、人々はわずかな食物を大事にし、歯磨き粉をパンに塗って甘さを感じ、かつて過ごした楽しい日々や食事を思い出してそれで気をまぎらわします。また、かすかな解放の兆しに希望をたくして過ごします。しかし、状況は変わらず、仲間が次々に死に、あるいは殺害されてゆくのです。

人はこのような状況で生きざるを得なくなると、一体自分が生きることによってどんな意味があるのか、と問わざるを得なくなるでしょう。苦痛と絶望に圧倒された人間は、自ら死を選ぶ方向へと追いやられてゆくでしょう。ユダヤ人の中にもそのような人々がいました。どのような時代にも、またどのような民族の間にも、その例は見出されます。

私が想起するのは、1903年、日光華厳の滝に投身自殺した、当時17歳の一高学生藤村操です。彼は木の幹を削って遺書めいた詩を書き残しました。当時一高で教えていた夏目漱石から彼が叱責されたことも話題となり、社会にセンセーションを巻き起こしたのですが、要するに藤村は人生は不可解だ、と判断し、死を選んだと思われまます。

人生に意味を見出そうとし、状況がそれを不可能にした、とその人が思い込んだとき、行き着くのはニヒリズムであり、究極的には自死、ということにならざるを得ないでしょう。しかし、そうであってはならない、とあのフランクルが断言するのです。

フランクルはナチス敗北後、収容所の体験について語り、各地で講演を行います。その記録が『それでも人生にイエスと言う』です。この表題からうかがえるように、彼は、いかに悲惨な状況で生きることを強いられても、そのような人生に意味があるのか、と問うな、と言うのです。そもそも人生に意味のあるなしを見出そうとしてはならない。発想を転換しなくてはならない。「人生が君に何を期待しているか」、と考えよ、君には生きる責任がある、君が生きてはじめて、人生に意味が生じるのだ、と。

私たちは、フランクルを受けて、「私たちは神によって生かされている」、だから意味がある、と言いたいと思います。いかに厳しく、つらく、絶望しかないと思っても、現に私が生きているのなら、それは神がそう命じておられるからだ、私は生きなくてはならない、ということなのです。

まさにその通りに生きようとしたのがパウロなのです。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」という彼の確信には、神の子イエスが人類の罪のために死に、復活され

たという、何物にも代え難い保証があることを知らなければなりません。死の恐怖にさらされているかのようなわたしであるけれども、死んだが復活して生きているイエスが私と共に生きている、だから行き詰まらない、失望しない、滅ぼされないのです。

私たちの苦難など物の数ではない、というつもりはありません。苦しいことはない方がよい、というのもその通りです。重要なのは、私たちもまた神の力よって生きている、否むしろ、生かされていることなのです。必ず死ぬ私たちだとしても、「イエスの死を体にまとして」いるのだから、「イエスの命がこの体に」現れていることでもあるのだ、ということなのです。

祈り：主イエス・キリストの父なる神さま、様々な苦しみを受けている人々に、
できますならば安らぎを与え、あなたに生かされていることに意味を見出す信仰を与えてください。そして私たちが、イエスの死と復活による命にまとわれて生きていることを確信させてください。主の御名によって祈ります。 アーメン

2016（平成 28）年度

「時評 波濤を越えて」『私学経営』No.502

私が勤める東北学院は、神学校として仙台市に創設されたのが 1886（明治 19）年、新制大学として出発したのが 1949（昭和 24）年、併設する高校 2 校、中学、幼稚園からなる学校法人である。学生生徒園児数合わせると 14,000 人、東北地方では最大規模であり、学生生徒定員は現在のところほぼ満たされていると言ってよい。

全国の私学の世界において見るならば、まずまずの実勢ではあろう。もともと、少し突っ込んで点検評価してみるならば、受験生数は漸減し、偏差値も下り坂、就職実績は首都圏大学の数値を下回り、退学者もなかなか減らない、職員の数不足しがちで、建物は築 40 年を経て老朽化が目立つ、バリアフリー化も追いつかない、等々足りないことだらけの学校法人の面も併せ持っている。

もちろん、これらの欠陥に逐一对策を講じようとしてきたのであるが、学校法人経営そのものを考えるとき、そのような単なる弥縫策では何の意味もない、そういう状況に日本の私学は直面している、と認識せざるを得ない。

そこで、東北学院大学は最近購入した 8,000 m²ほどの土地に地上 5 階建て地下 1 階のビルを完成させ、この秋から稼働させた。このビルに私たちは、これからの本学の将来構想のための戦略アイテムのシミュレーションの意味を持たせたことになる、と今思うに至っている。

ビルの名称を「ホーイ記念館」と名付けた。130 年前、本学院を創設した一人 W.ホーイに因んでのことである。ここには私立学校がよって立つ「建学の精神」の確認、というアイテムがある。

1階と2階に「ラーニング・コモンズ」を配置した。多数のPC、大スクリーンのディスプレイ、可動式のデスクとイス、そして専門の特任助教を置いて学生指導の体制も整え、アクティブ・ラーニング展開の環境とした。ここには「教育の質的転換」を進めるというアイテムがある。

地下の「多目的ホール」は250人分の座席を有し、市民公開のフォーラム、音楽会、演劇に供する。ここには「社会と地域に貢献する大学」というアイテムがある。

このアイテムをより鮮明に打ち出したのが、1階のかなりのスペースを占める、ちょっとおしゃれなパンとカフェの店を参入・営業させたことである。道路側は全面ガラス張りで、ここだけはこれまでのフェンスのある大学のたたずまいが一変して、一挙に町が目抜き通りの光景が開けた。ビルを道路からセットバックさせ、もちろんフェンスもなくしたから、市道が2倍に広がったわけである。日曜日は近隣のファミリーで賑わっている。

このほか、きれいなトイレ、パウダールーム、自動ドア、自由に憩える空間、などは「学生にやさしい、学生の滞留時間の長い大学」というアイテムとして付け加えられるかもしれない。

このようにホーイ記念館は、本学院が持続する学校法人として生き残る戦略の先行モデルを提示したものとなるべきだ、と考えるのである。先に挙げた通り、学校法人として当然果たすべき作業をまだ多く残している我々である。ましてや新しい建造物が完成して既存インフラとの格差が顕著になってしまった。しかし、多少前のめりとなるのを承知しても新しい構想へと進まなければならない、と考える。その際の戦略アイテムが先の4つであるが、それでは十分でない、と我々よりも文科省と、財界・マスコミも加わった審議会は考えている。それが具体的な形をとって、ことに私立学校に突き付けられるのである。

ときにその要求は、インフラとか教育方法といった形ではなく、「学長ガバナンスの強化」というような学校の運営ソフトまで含むことがある。「差別解消法」がそれに続いて（これは学校だけに求められたわけではないが）インフラと共に障がい学生への配慮の制度整備というやや複雑な作業を学校に求めた。そして2016年度から、大学に「3つのポリシー」策定が要請された。このポリシー要請は、これに先立って謳われた「高大接続」、連動しての「大学入試改革」の遠大にして煩瑣な構想とつながっている。これと並んで「高度な教育研究」「グローバル化」「世界をリードする大学院教育」「特色ある共同研究拠点整備」「女性の活躍推進」「高度な職業人養成」「中高教員のレベルアップ」などの要望事項が、消えたかと思うと前と異なる表記で再浮上する。これまでもつぱら大学のレベルで述べてきたのだが、中高校、幼稚園の将来についても似た状況が迫っていることは言を俟たない。

もちろんこれらの要請は、不合理な圧力として忌避できるものではなく、理の当然の要請であることに概ね間違いはない、というのが、不本意ながらの我々の実感ではある。ではどこが不本意か、というと、これまた明快に、これら要請には「経費」への温かみがほとんど感じられない、と言うに尽きるのである。荒き波濤に立ち向かうにやぶさかではな

い、しかし支える力、はやはり必要である。

東北学院創立 130 周年記念式辞

本日ここに、東北学院創立 130 周年記念の礼拝を共に捧げることができました。ご多用にもかかわらずご参集くださったご来賓の皆さま、本学院同窓生の方々、そして本学院の務めにあたっている教員・事務職員、加えて今本学院で真摯な学びに励んでいる学生生徒代表諸君、これら皆さまに感謝申し上げます。また、東北学院のために 25 年にわたってよきお働きをなされた永年勤続者皆さまに感謝の意を表しえますことをも幸いに存じます。

改めて、東北学院のこれまでの歩みを守り導き、ここにお集まりの皆さまと、130 年の間本学院に関わりを持たれたすべての方々を慈しみ、祝福をお与えになっておられる、東北学院のまことの創立者であられる神をほめ称えます。

この礼拝堂には、押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダー、の本学院にとって大切な「三校祖」の肖像が掲げられています。彼らそれぞれの、東北学院創設のためになした働きの大きさ、想像を絶する苦難と、それと格闘した熱誠というものを私たちは学び、彼らへの感謝と敬愛の念を、今新たに覚えるものです。

東北学院は 1886 年仙台神学校としての歩みを始めました。最初は 2 人の教師と 6 人の生徒だけの学校でありました。福音主義キリスト教に基づく人格教育を施す普通教育をも理念に加え、1891 年に東北学院と改称し、その名称が今に受け継がれています。東北日本、仙台という地に確たる歩を占め、「地の塩、世の光」となれ、というキリストの教えにならい、人に愛をもって仕える、そのことを教育の基本として来しました。

130 年という区切りの年を覚えて、学院では 2 年前に記念事業を立ち上げ、土樋キャンパス構想、奨学金の充実、などの計画を進めてきました。あわせて、教育共同体として基本的なビジョンを打ち出すこともできました。TG Grand Vision150、がそれであります。「ゆたかに学び、地域へ 世界へよく生きる心が育つ東北学院」との新しいモットーを定め、学院こぞって、20 年先を見据えて年ごとの、魅力ある具体的計画を策定し、着実に実行してゆこうと決意したのであります

そして今日この日、記念の祈りの会、記念礼拝を迎えることが出来たのであります。長く、恵みにあふれた 130 年の歴史に感謝するものです。

また、この 1 年という一区切りの中でも、いくつか心に刻むべき出来事があったことを思い起こします。

昨年秋、KYB という企業の方々の訪問を受けました。その会社の歴史を掘り起こす作業そしておられ、創業者が東北学院の関係者であることから、訪問されたというのです。KYB とは、「かやば」の小文字、創業者は萱場資郎氏なのでした。萱場さんは第二次大戦時、キリスト教学校であるがゆえに国家に敵視され、廃校の危機にあったときに本学院の理事となり、工学系の学校を敷設し、そのための設備をも提供して下さって、辛うじて本学院が戦時下も存続する支えとなってくださった方であります。思いも寄らぬ訪問者を迎えて

改めて東北学院の不思議な運命の巡り合わせを知ったのです。

また昨年は、土樋北校舎の建築が順調に進捗を見た年でもありました。三菱地所設計、大林組さんその他関係者のお力により、きわめて短期間で工事が進み、さる3月15日に竣工、28日に献堂の式を執り行うことが出来ました。この建物は3校祖の一人、ホーイの名を冠することとなりました。瀟洒でモダンな外見は有形文化財としての歴史を体現する土樋本館、礼拝堂と対峙して、存在感を示します。講義室・演習室・研究室に加え、学生の主体的学びを行わせるラーニング・コモンズを備えた教育の館となります。

このホーイ館を起爆剤として本学は学都仙台の中心にあって、地域に溶け込み、研究教育の成果を社会に発信する都市型大学として成長してゆきたいと思えます。

キリストの与えられたいのちと、光と愛を現す LIFE LIGHT LOVE の 3L 精神を胸に刻み込み、また「地の塩、世の光」としての生き方を大切にしてきたのは中学校高校、榴ヶ岡高校も、また幼稚園も同様であります。それぞれの学校に昨年度豊かな実りが与えられました。高校野球や水泳で活躍した生徒がおり、大学進学でも成果を挙げました。生き生きとした教育実践を行いつつ 130 周年を迎えています。

卒業生総数は 18 万に達そうとしています。これらの方々が、本学院での学びを結実させ、社会においてよく生き、奉仕し続けておられること、このこともまた神さまのお恵みであります。そしてこの群れは、これからも 1 年を経るごとに確実に増えてゆくのです。今、学院の教学の務めにある者として、その任の尊さと重大さを思わざるを得ません。神さまの更なるお守りと、祝福を願うものであります。

しかし、現今の社会、私立学校が直面する状況にはこの上なく厳しいものがあります。あらためて私たちは建学の精神に立ち、まず何よりも「主を畏れること」を第一として、教育内容の改革充実に専心し、学院の名を高くし、130 年目を歩み出したいと思えます。青年に社会的スキルを教えると共に、キリスト教に立って心と教養・人格を育てる業を担い、実践してゆくこと、その単純なことをひたすらに守りたいと思えます。ただ万物の創造主にして私たち学院の真の創立者たる神を信じて邁進したい、そのために教職員の皆さん、卒業生、関係者皆様のお支えを心より願うものであります。

最後にパウロの言葉を持って結びといたします。

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。」(コロサイの信徒への手紙 3:12, 13)



学長見聞録 Vol.5

「古代遺跡の魅力と若者たちへの期待」

ゲスト：青柳正規東京大学名誉教授（前文化庁長官）

松本 青柳さんは、どうしてローマ美術の研究に取り組もうと思ったのですか？

青柳 最初はルネッサンスをやりたいかったんですが、当時の作家の人間性や生まれた環境までも知らなくてはならなくて、これは大変だと。また、大学3年の夏休みに乗鞍の学生村で古代ローマも勉強してみたら面白くて、そこからですね。

松本 きっかけとなった書物などはありましたか？

青柳 その頃の美術本でスキラ版というスイスから出版されている素晴らしい美術全集があって、ポンベイを中心としたローマ絵画に魅了されました。

松本 最初にイタリアへ行かれたのはいつ頃のことですか？

青柳 24歳のときにイタリア政府奨学金を受けてローマへ行きました。現地で見えた遺跡は、なんて大きいんだろう！二千年も前のものがどうして残っているんだろう？と感動しましたよ！

松本 そこから深く研究されて、結局ローマ人はどんな人間だったのですか？

青柳 科学が発達しているわけではないから神様に対してかなり臆病な部分があって、何かあればすぐに占いに頼ったり。プラグマチックできびきびと物事を進めていくんだけど、どこかで弱さも持っていて、そういうものがどうして残っているんだろう？と感動しましたよ！

松本 そこから深く研究されて、結局ローマ人はどんな人間だったのですか？

青柳 科学が発達しているわけではないから神様に対してかなり臆病な部分があって、何かあればすぐに占いに頼ったり。プラグマチックできびきびと物事を進めていくんだけど、どこかで弱さも持っていて、そういうものがどうして残っているんだろう？と感動しましたよ！



松本 これまで見てきた遺跡の中で、これだと思う場所を教えてください。

青柳 やはり、リビアのレプティス・マグナですね。中心にあるバシリカの建築装飾は、トルコのアフロディシアスの職人たちがあつた場所へわざわざ行ってつくったんですよ。

松本 古代の人たちは意外と移動していることに驚かされますね。ところで、青柳さんは東日本大震災後に文化庁長官になられたわけですが、被災地の文化財はどんな状況だったのですか？

青柳 津波被害を受けた地域で遺跡が見つかったのですが、「復興の妨げになるから早く調査を終わらせてほしい」という要望がありました。しかし、いざ調査を進めていくと歴史的価値の高い遺跡ということがわかり、その場所は公園になりました。町としては再建が第一だけれど、遺跡調査や文化財を修復することで、そこに暮らす方々の生きがいの一つになったことは嬉しかったですね。

松本 今の若者たちに何か望まれることはありますか？

青柳 我々の時代のように単純な将来を描くことができなくなっていると思います。やさしい気持ちで目配りができて、みんなと良い方

松本 向へ歩いてけるリーダーが、今の社会では求められているのではないのでしょうか。しなやかさをもつ広い人材ということですね。最後に青柳さんの夢をお聞かせください。

青柳 ポンベイの遺跡から少し離れた場所に、手つかずの遺跡が見つかったんです。そこを調査しても良いという話を受けて、でも約20億円の費用がかかるんです。若い頃なら先考えずに始めてしまったでしょう。しかし、この年齢になるとさすがに慎重になってしまいます。遺跡発掘というのは誰にでもできることではなく、現地で信用されるまで何十年という時間がかかってしまう。費用については私から働きかけてでも、他国と共同で行うグローバルな発掘を若者たちにぜひ経験してもらいたいと思っています。



青柳 正規（あおやぎ まさひこ）
大連出身、1944年生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業後、ローマ大学に留学。古代ギリシャ・ローマ美術史研究の第一人者として30年以上にわたって地中海各地の遺跡発掘調査を実施。東京大学文学部助手、筑波大学を経て東京大学教授。東京大学副学長、国立西洋美術館館長、文化庁長官を歴任。現在、東京大学名誉教授。「皇帝たちの都ローマ（中公新書）」など、著書多数。

「キリストの平和」

『東北学院大学教職員修養会・キリスト者教員研修会報告書』第 17 号

今年も恒例の大学の教職員の修養会の時が巡ってまいりました。リトリート、引き退いて、しばしの間、想いを一つにして学院のこと、また学院がよって立つキリストについて考え、あるいは話し合う時が与えられたことを大変うれしく思っています。開会の礼拝を担当する大変大事な務めを与えられておりますことを改めて感謝し、共に聖書に耳を傾けたいと思います。

毎年日本では8月になると、平和ということを否応なく強く意識し、思い起こします。今年には特にそのことを考えさせられ、それもかなりの不安の念を持って考えさせられている、そういう状況に私達はあるのだと思います。今日は旧約聖書のイザヤと新約聖書のパウロの言葉が与えられました。救い主のことを預言した、しかしそのことを目の当たりにできなかったイザヤの平和にかかわる言葉と、キリストを知りキリストの復活を信じ、知って理解したパウロの言葉の対比の中で、平和の持つ意味を私なりに考えてみたことをお話ししたいと思います。

まず、イザヤ書であります、彼は紀元前 700 年頃のイスラエルの預言者であります。ですからイエスが現れる 700 年～ 800 年前の人であります。苦難の中で、いつ滅びるかかわからないイスラエル・ユダヤの国に必ず救い主は来るということを確信し、預言した人があります。その預言の中のこの言葉は、まさにその時がきたらこうなると語っている一節だと思います。2章の4節に「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」、つまり彼が生きていた国が近辺の強国の脅威にさらされて襲われ、あるいはイスラエルそのものが戦いを挑むということもあった歴史の繰り返しの中で、イザヤはこのような戦いの

中で、しかし戦いが止む時が来ると語るわけです。その時には、これまで人と戦いあるいは人を殺していた武器がその目的を果たす必要がなくなる、だから刀は土を耕す鋤、槍は草を刈る、あるいは小麦を刈る鎌にしているのだという、大変印象的な言葉です。平和という言葉こそありませんけれども戦いの必要がなくなる、平和だ、このことを詩人である預言者は語っているわけです。

人類の歴史の中でおそらく最初にあったことの一つが争いだと思います。戦いだと思います。それは数十人規模の小さな群れと他の群れとの戦いであれ、あったと思います。略奪であり殺戮があったと思います。しかしそれが止む時もあったと思います。ですから人類の歴史の最初からあった戦い、その戦いのない状態が、その言葉はまだなかったかもしれませんが平和でありました。ギリシャ語にもラテン語にもローマ字の言葉にもそしてもちろん聖書の言葉の中にもエイレーネーであるとかパクスであるとかシャロームであるとかそういう言葉は古くからあるわけであります。特にこのイザヤの言葉は非常に有名でよく使われます。やはり人類が歴史の中でどの時代を通じても平和がありがたいということはわかりきっていたわけです、しかし戦争は起こる。そんな中で語られる言葉であり続けたと思います。

この言葉に関して、この夏から秋口にかけてこのことと偶然一致する出来事がありました。今は福岡に移動しているようですが、大英博物館展というのが東京を始めとして開かれています。ウルのスタンダードという昔のメソポタミアの都市国家の祭らしい様子をきれいなラピスラズリの青を地にして、人間や動物などで描いた大英博物館のお宝の一つが来ていたりします。その展示物の中の一つに、ある像があります。あまり大きくないようですが、この像は何かというはずいぶん新しいもので、アフリカのモザンビークというところの方があるだろうと思いますが、激しい内乱が 1976 年から 15 年程続きました。何十万という人たちが殺戮されるようなことが起こっていました。しかしその無残な紛争も 1992 年に終結をみて、まさに争いが終わりました。モザンビークの子供たちは平和を確信することができました。それ以後他の国ではまだ激しい内乱やら争いが続きますが、モザンビークでは比較的落ち着いた状態が続いているようであります。そのモザンビークでは内乱のさ中、巨大な先進国から、武器がものすごい量で流入していたわけですが、戦争が終わってその武器を没収する、集めるということをやったようであります。これがなかなかできないのが先進国ではありますが、武器を集めて破棄していったということなのです。破棄した武器を使えなくするための作業、これは大変な作業だったと思うんですけどもどんどん壊していきました。カッターで、銃やミサイルそういったものを切り裂くそんな作業をしました。その壊した武器で造ったのがこの彫刻です。「母」という題名の彫刻で、なんと申しますか、ロボットの感じではあるんですけども、骨組みだけで出来たような。しかし銃の台座の木の部分がありライフルの銃口の部分があり、あるいは引き金の部分があって、それが組み合わされて女性の像になっている。しかしこの女性が手に持っているハンドバッグ、あるいは袋は銃で出来ているわけではないようですけども、そういう像でありま

す。ジャコメッティという有名な彫刻家がいるのをご存じかと思いますが、この人の彫刻にちょっと似ています。針金というか、鉄骨というか、ぎりぎりまで人間の像をデフォルメしたそういう像にちょっと似てるんですけど。要するにこれはまさにイザヤの言葉のような気がします。武器はらない、平和がきた。いらぬ武器は別の役に用立てるということでもあります。平和はこの世に戦いのない状態を指して用いられる、そのこと自体はそのとおりだろうと思いますし、そのような平和はもちろん望ましい訳であります。

戦争の多い人類の歴史であります。しかし何度となく戦争が起こり、平和がほしいと言って平和がようやく実現する、しかしそれがまた破られる。ということが人類の歴史の中では繰り返されてきました。そんな中で戦争に加わった人たちから平和が必要なんだということもまたよく語られるわけであります。ところが戦争が起こった時はこうしようと準備しておかなければならないから、その時のための法律が今現在日本では審議されているわけでもあります。それは平和のための法律だと言うのですが、国民の安全と平和のために、戦争がいつでもできるような準備をして保障される平和だということになろうかと思ひます。極めて限定的であります。モザンビークのように今ある武器を全部鋤に換え、今風に言うところのパソコンの器具に換えという発想は起こってこないのであります。

古代ローマの歴史の中で思ひ浮かぶ話があります。紀元一世紀ローマの勢力が今のイギリス、ブリテン島に進出していきます。現地にはケルト系の人たちがおりましてローマの勢力と軍事力に激しく抵抗します。ブーディカなどという女王が戦いました。この女王が反乱に立ち上った理由は彼女の娘たちがローマの兵士によって凌辱されたという、そういう出来事がきっかけにもなっていたわけですが、燎原の火のようにブリトン人たちの反乱が広がり、これを制圧するローマ軍との凄惨な戦いが展開されたわけです。そんな中でローマはいくつものブリトン人の街を、焼き尽くしていきました。逆にローマ軍の兵站、軍営地にブリトン人たちが戦いを仕掛ける、そのようなことが繰り返されます。徐々に徐々にローマの支配領域が増えていきます。住民を虐殺しあるいは追い出し、あるいは捕えて捕虜にしてそこはともかく戦争のない状態になると、こういう状態の地域がだんだんと増えていきます。そんな中でブリトン人の反乱の首謀者、首領のひとりであったカルガクスという人が、ローマ人との戦いを最後までやろう、と仲間に訴えた演説を、面白いことに、ローマ人の歴史家タキトゥスが記録しています。その演説のなかでカルガクスは「彼らローマ人は破壊と殺戮と略奪を偽って支配と呼び、荒涼たる世界を創り上げた時それをごまかして平和と名付ける」と語る、有名な箇所です。これはタキトゥスが書いたアグリコラという人の伝記の一節であります。ある意味残酷な平和です。力があつての平和という概念がローマの場合にも表れていたことがわかります。このような平和がわたくしは人類の罪あるいは人類のどうしようもない限界だというふうに思ひます。先程ちょっと言ひましたが、ともかく平和が歴史上求められはすると、しかしそれはもろくも破られるということの繰り返しが一つと、それから平和とはいへその平和を確立したのは力であつて、その平和確立の過程で抹殺されていった弱い人たちが無数にいたと、そこにあるのが人類のどうしようもない現実

であった、そうである以上このような平和はこれからも生れはするでしょうけれども実に危うい平和、あるいは偽りの平和ということになる。それしかないのではないか、少なくとも人間の平和である限りはそのように思います。

さて、パウロの言葉であります。パウロという人自体が最初はナザレのイエス・キリストの宣教に反発し、彼を神の子と信じるキリスト教徒たちに戦いを挑んだ人であったということは象徴的です。しかしその後、彼は幻のキリストと出会うという劇的な体験をして、キリストの教えを述べ伝える大伝道者となったわけであります。そして彼はたくさんの教会を建て、あるいは強め、多くの教会を励ます手紙を書いた。新約聖書の半分はパウロの名を冠する手紙です。その中にはパウロという名前がついているだけで後から別の人が書いた手紙もありはするようではありますが、そのような大きな存在であったパウロが、やはりしばしば語るのが平和であります。しかしキリストを一度は否定し、しかし逆にある意味でキリストに圧倒され、あるいは自らの存在を否定されて死んで生まれ変わったと云ってよいパウロは、キリストこそ平和である、今日のエフェソの箇所にもそうありますが、そう断言する者となったわけであります。

パウロが言う平和はどういう意味であるのか、彼はそれがキリストなのだというわけがあります。キリストがおいでになり、神の言葉を述べ伝えられ、しかし十字架で処刑されて三日目に蘇った、このことを受け入れる、信じる群れがキリスト教徒であります。パウロもそれを受け入れたわけです。最初は十字架で死んだ者を神の子だなどと言いふらす者はけしからんと迫害する立場にあったパウロがそれを受け入れたわけであります。そのパウロが言う平和であります。これは読めば分かるように単に戦争がない状態というあやふやな平和、先程述べてきた、大事ではあるけれども大変もろい平和とは違う平和である。それは、キリストそのものが平和だと言ってもいいのです。パウロは、キリストがおいでになったことによって戒律はなくなった、敵対する者の間の差別の壁もなくなった、どこにあらうと、霊によって結ばれて一つになって人間は神に近づくことができる、もはや外国人も寄留者も区別はない、すべて神の民、聖徒としてひとつ足りうるのだ、これはキリストのおかげである、そうパウロは言うわけです。それが平和だ、と。隔ての壁が取り壊されるわけですから戦争をすることはなくなるという含意はあります。しかしその最初にパウロはキリストのおかげである、キリストが来られたからであるということをもまず付け加えるわけです。とても大事なキリスト理解をパウロは打ち出して、たぶんペトロとかイエスの直接の弟子たちとかが思い至らなかった深みまで彼はキリストを理解したのだと思いますし、彼のキリスト理解がのちのキリスト教の土台となっていたことは間違いないのですが、その一つがキリストをこのように平和と捉える、人と人との中垣を、壁を取り除く、人類を一つにする、もちろんキリストを受け入れる信仰ということが前提になるわけですが、その理解を示したということはパウロの非常に大きな功績でしたし、それはパウロをとおして神が人類に教えられたことだと思えます。

そのキリストが平和だということの根拠、パウロはここでは述べていませんが、そこには

イエスの十字架の死と復活ということがあると思います。十字架に架けられる前にキリストは裁判にかかります。それまでキリストは、暴力的な行為はしないけれども、人々に悔い改めを迫るということをされ、ユダヤの神に固執し、律法に固執し、救い主がくるということは分かっているけれども、キリストが救い主だということは一切認めない、そういう勢力に対する激しい批判をしました。そのことがあって彼は捕えられ、ローマの権力に引き渡されましたが、これも象徴的なことです。ユダヤに来てローマの権力は、ユダヤの人々を押さえつけてこれが平和だと語ったのだと思いますが、とにかくローマの総督の手に委ねられてキリストは死刑を宣言された。そして彼は殺されたわけです。しかし、復活した。神の力によって。これがあるから本当の平和がキリストなんだ、とパウロが言えたのだと思います。大きな犠牲、果てしもなく大きな犠牲がキリストの死であった。しかし彼は復活した。これが平和だ。そうである以上、人類はこのキリストによって、平和になり得るのだと、ひとつになり得るのだと、という保証が与えられた。ここにはさらにまた、この平和というのは本当に大きな長いものであり、且つ究極的な神の国を先取りするものであって、今この世を生きている私たちは死んでも本当には死なない、この究極の平和へとつながる、永遠の命を生きるというところにまで、私たちの平和理解は発展しつなげていくわけであります。少し大袈裟なことを言ったかもしれませんが。キリストを受け入れるということの難しさということもあるかもしれません。しかし、現実のあまりにも脆い平和、何か薄いベールを被っているだけの平和にしか出会わない私たちにとって、ここにキリストの死と復活に本当の平和がある。そうである以上この地上にも薄いベールがやがて厚い絨毯となって、先程の武器ではないですけれども、現実にもそういうことも起こって、武器はいらない、武器を使って平和の芸術作品を作るという、そういうことを私たちもまた、可能性として、いや確信として希望として与えられているのだ、その希望の中に私たちも生き、東北学院も生きている。そう確信をもっていきたい、感謝していきたい、そのように思います。

お祈りをいたします。

神様、今年の東北学院大学教職員の修養会を豊かなめぐみから始めさせていただき、ありがとうございます。どうぞ上辺だけでない、不安でない本当の平和を私たちに与えてください。平和の確信をもって私たちが世に生き、またそのメッセージを、個人を通じて、あるいは学校を通じて発信していくことができますように。この願いと感謝を主の尊いみ名によって御前にお捧げいたします。アーメン

2017年 年頭所感「2017年 年頭のことば」

2017年を迎えました。新しい年を健やかにお迎えになった、東北学院に連なるすべての皆様にお慶びを申し上げます。この1年の皆様の歩みが、私たちの導き手である神の祝福のうちに守られますよう、お祈りいたします。

昨2016年は、学院創立130周年の年でありました。3月に本館正面のホーイ記念館が竣工し、秋には本格的に始動しました。アクティブ・ラーニング教育展開の場として、研究の充実のため、さらには地域の市民にも公開して利用いただく、まさにこれからの大学の社会的あり方を体現する建物であります。

5月には創立記念式典が、また秋にはラーハウザー記念礼拝堂ステンドグラスの美術史的価値を再発見出来たシンポジウム、その他の催しが数多く行われ、記念の年を彩りました。大学と共に、中学校・高校、榴ヶ岡高校、幼稚園にも豊かな恵みが与えられ、新コース制を打ち出したり、文化活動にめざましい成果を挙げたり、またこれも130周年記念の合同の合唱と音楽のフェスティバルに幼稚園児も参加するなど、活発な動きの1年であったと言えます。

それにまして、本学院に連なる学生・生徒・園児、そして教職員の多くが、その課題に立ち向かい、躓きや痛みを経験しつつも克服し、学びとそれを支える働きを全うできたことを感謝します。キリストが弟子たちの足を洗う謙遜さを示したように、互いが互いを尊敬し、仕えあうことが大切にされた結果であることを確信するものです。

これらの業を継承して、131周年のこの年は、さらに一つ上のステージにいく東北学院でありたいと願うものです。昨年掲げたTG Grand Vision 130-150の進展です。

「建学の精神」は、「地の塩、世の光」と「3L精神」としてわかりやすく謳われています。今年はいよいよ本院の歴史を記した『東北学院史』が完成します。大震災後の私たちの対応と再建、復興、被災者支援の働きをも盛り込んだわかりやすい書物となるでしょう。「建学の精神」の遂行の営みを、自ら確認し、社会に発信する手がかりとなるでしょう。

教学においては、最近の流行に乗って、私たちも「学生ファースト」を打ち出しましょう。もちろん「生徒、園児ファースト」でもあります。彼らの未来を、ひいては命を育てるために、学院は彼らに寄り添い、見守り、傾聴し、支援することを約束します。

そのための働き人を学院は宝物としています。「地の塩」を進んで実践する教職員です。教学の充実のためには新しいポリシーの実行、アクティブ・ラーニングの浸透、カリキュラムの見直しと点検、諸々の教育改革プログラムの取り入れ、と課題は急増しています。そのために求められる働きに追われる教職員を、学院として支援しなくてはなりません。そして働きの現場が、よい人間のきずなで有機的に機能し、学生ファーストが実現できる体制を常に整えていかななくてはならない、と思います。

インフラ整備に関しても、将来構想を、確固たる財政見通しを立てて立案し、実現させていかなければなりません。少子化もさることながら、厳しい政府の姿勢による補助金の

抑制にも対応できる学校法人の存続戦略のために、知恵を絞り、総力で立ち向かわなければなりません。学生・生徒・保護者、同窓会、学生を受け入れてくださる自治体、企業などステークホルダーに理解と支援を求めることにも力を注ぎたいと思います。

2017年は、マルティン・ルターがヴィッテンベルクの城門に95箇条の提題を掲げて「宗教改革」の烽火を挙げた1517年から数えて500年目となります。ルターは史上初めて、キリスト教学校の必然性を説いた人でもありました。我が国でもプロテスタントキリスト教学校は150年の歴史を重ね、百の同盟校を持つに至りました。東北学院はこの、神が導いて来られた歴史において用いられてきた学校です。これからも守られ、用いられるキリスト教学校であるために、ありったけの努力を傾けたい、と思うものです。

「千年も一時」

『大学礼拝説教集』第21号

詩編 90編 1～6

1【祈り。神の人モーセの詩。】

主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。

2山々が生まれる前から

大地が、人の世が、生み出される前から

世々としえに、あなたは神。

3あなたは人を塵に返し

「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

4千年といえども御目には

昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。

5あなたは眠りの中に人を漂わせ

朝が来れば、人は草のように移ろいます。

6朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい

夕べにはしおれ、枯れて行きます。

マタイによる福音書 10章 26～31

26「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。27わたしが暗闇であなたがたに言う ことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。28体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。292羽の雀が1アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。30あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。31だから、恐れるな。あなたが

たは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

東北学院が「仙台神学校」として創設されたのは1886（明治19）年のことでもあります。従って2016年は130周年にあたります。この節目の年、学院は様々な記念の行事を催して、130年を振り返り、学院がこのように長い年月神に守られて歩んでこられたことへの感謝の意を表しました。

その一つに大学の新しい建物、「ホーイ記念館」の竣工という出来事がありました。130周年を企図して建てられたわけではありませんでしたが、東北大学片平校地の一角を購入することが出来て、新しい構想を盛り込んだ建物として2年前に建設に着手し、記念の年に完成にこぎ着けることが出来たのです。この建物には特別の呼称をつけたい、と考えました。そこで学内で名称の公募を行いました。五〇ほどのアイデアが寄せられましたが、私も加わった担当者は、三校祖の一人であるウィリアム・E・ホーイに因んで「ホーイ記念館」とすることで評議一決しました。三校祖の二人、D・B・シュネーダーは旧図書館に、押川方義は8号館5階のホールに、それぞれその名を冠せられています。残されていたホーイが選ばれるのは自然の流れでもありました。

さて、ウィリアム・E・ホーイは1858年アメリカのペンシルヴァニアに生まれ、青年期に当時のアメリカに燃え上がっていたキリスト教の海外宣教の奔流のような運動に加わってアジアに向かい、一八八五年たまたま横浜に寄港して、そこで日本、それも仙台を自らの宣教の使命の地と確信したのです。その翌年から彼は仙台において押川、数年後に来仙したシュネーダーと共に、東北最初のキリスト教学校の運営に働きました。ホーイの東北学院への思いは強く、熱く、時に押川の方針と対立することもありましたが、学院のその後の歴史は、彼を抜きにしてはありえなかったでしょう。盗難にあった学校の大金のために、持ち金も給与もはたいて、ほとんど独力で弁済したことも忘れてはなりません。

喘息を持病としていたホーイには仙台の気候は合わなかったのでしょう、病状の悪化で彼は、東北学院の働きに一区切りをつけ、転地療養もかねて中国に渡ります。元気になってホーイは上海などで宣教し、成功を収めます。1926年病気が再発してついに帰国を決意、横浜に寄港した後、アメリカに帰ろうとしたのですがかなわず、船中で没したのです。69才、人生の大半、身も心も外国伝道に捧げた生涯でした。

今、ホーイの名は私たちに記憶され、墓はシュネーダー、押川らと共に北山キリスト教墓地に残されています。けれど、東北学院と関わり、日本と中国の伝道にかけた年月、ホーイには苦難のみ多い半生であったでしょう。しかもその年月は東北学院130年の歴史のごく一部にすぎない長さでありました。

人の働きにはこういう性質、というか限界があるものだ、と思わされます。ホーイだけではありません。東北学院に関わり、あるいは学生生徒として、あるいは職員、教師として籍を置いた者は20万人を超えるでしょう。しかし誰一人として、130年関わり続けた者はいません。

「詩編」は、主が、この世界の初めから今に至るまで、すべてを計らいのうちに置かれる神であり、わたしたち全人類が主に宿り、そこから生まれ、そこに帰って行く、と言います。人間には想像も出来ないほどの時間を神は支配されておられる。しかしわたしたち一人一人がすべて漏れることなく、その時間の中に受けとめられ、神によって覚えられている、ということでしょう。神の時間と人間のはかないほどに短い時間のこの壮大な懸隔、それを詩編は「千年といえども」神にとっては「昨日が今日へと映る夜の一時にすぎ」ない、と見事な比喻で歌うのです。

わたしたちにとって東北学院の 130 年は、とても長い時間と言ってよいと思います。これだけ長い年月、学院が存続し、教育機関として健全に働いて来られたことに喜び、あるいは誇りに思うこともできるでしょう。しかし、その 130 年はすべて神の慈しみ、憐れみのひとときのうちにあるのだ、ということをもまたわたしたちは詩編から知らされるのです。その、「神のひととき、あるいは一瞬」である東北学院の 130 年が神に守られており、そこに関わった、そして現に今関わっている者すべてが神の計画の中にしっかり置かれ、神はそのことをご存じであることに改めて感謝し、そうである以上、やはりその「神にひととき」に加えられるであろう、東北学院のこれからの 50 年、100 年もまた神に安んじてゆだねてよいことを確信したい、と思うものです。

祈り：父なる神、あなたの目にはほんの一瞬である、130 年の、しかしわたしたちにとっては長い年月、東北学院の歩みにお与えくださったはかりしれない慈しみとお恵みに感謝いたします。その中で、ホーイ、押川、シュネーダーを初めとする多くの人々に力を与え、聖霊を注いでよき働きをさせてくださったことをも感謝いたします。そしてさらにこれからの、あなたの目にはひとときの数十年、百年を東北学院にお与えくださり、これまでと同じように慈しんでくださいますように。主の御名によってお祈りいたします。アーメン。

『東北学院時報』第 737 号 体育会弓道部を訪ねて 全国制覇女子チームに聞く弓道の神髄

「体育会弓道部を訪ねて」

全国制覇女子チームに聞く弓道の神髄

本学体育会弓道部女子チームが平成27年11月伊勢神宮で開催された大学弓道最高峰の「第39回全日本学生弓道女子王座決定戦」で優勝し、平成28年6月には「第28回全日本学生弓道選抜大会」でも優勝するなど目覚ましい活躍ぶりを見せています。今回は東京ヤマトキャンパスを訪問し、全国制覇を成し遂げた女子チームの皆さんに弓道の道についてお話ししました。

学長 今回、快進撃を続ける弓道部のみさんとお会いする機会を与えられました。まずお伺いしたかったのですが、座右の銘としておられるのは動かない、心が動く、そこに到達するためにはどんなことを心がけていらっしゃるのでしょうか。

高木 弓道はサッカーや野球とは違い、敵が居ない競技となるので、勝負を左右するのは自分の心になります。動かない目標に向かって動いた心で挑んでも勝てないから、目的は動かない、心が動く、そこに到達するためにはどんなことをしているかについては、まず、自分を信じていることが大切だと考えています。心掛けていることは一つです。心掛けていることが何点もあるのは心が動く要因となってしまいうので一つに絞ることもまた大切だと考えます。

学長 「弓道」という語の中で「道」が意味するものはどんなことでしょうか。また日頃の練習で「道」を意識していらっしゃいますか。

三浦 弓道に限らず、他の武道などにおいてもその技術によって心技体を鍛え、人間性を高めるといのが道であると思います。中でも弓道は特に心に重きを置いており、心を動かさない不動心をつくるということが大切になってくると考えます。そのため自分には、練習は勿論ですが日常生活においても、未

来の自分が今の自分を見て後悔をしない行動をとること。そして感謝の気持ちを忘れないことを意識して過ごしています。正しい礼儀や態度



女子チームが勝ち続けているのには何か理由はあるのでしょうか。部員数は女子が多いのですか。

学長 実は前学長時代のことですが、学長室に立派な矢が飾ってありました。マイアローというのでしょつか、みなさんもう自分の矢をお持ちなのですか。素材はどういうものを使っているのでしょうか。

高木 みんなそれぞれ自分の矢を持っていますが、弓道場にまとめて保管してあります。ターキー(七面鳥)を使っている部員が多いと思います。素材としては黒鷲も

学長 七面鳥ですか。七面鳥がのめがけて脱落(おと)キ口で飛んでいくんですね。みなさんは近々また大きな大会を控えていらっしゃいます。弓道部のますますの活躍を期待しています。今日は大変勉強になりました。ありがとうございました。

学長 私、あまりそう言う才能がないみたいで、あたってみないところからなんです(笑)。タンって言う音が聞こえて初めて実感はわきます。

学長 「これはいい」ともありませんか。

小林 それにたまにありますが(笑)。「調子がいい時はいい、悪い時は悪い」と思っています。

小林 私は基本的には心をどうしたらいいかを深く考えず感覚で引いています。これなら大丈夫だろう、また、逆に外しそうだというのとはなんとなくわかります。その感覚が「調子がいい」ということになります。

学長 その感覚を試合に持っていくのは難しいのではないのでしょうか。



写真左より三浦文華さん、高木千穂さん、松本学長、小林愛美さん、門脇悠さん



2017（平成 29）年度

『古代教会と「学校」-ローマ帝国と初期キリスト教史の一側面-』

2017年6月9日キリスト教学校教育同盟第105回総会特別プログラム講演

I. ローマ帝国の「学校」

古代地中海都市市民も教育の重要性をよく知っていた。ソクラテスが若い市民たちに語りかけ、多大な影響を与えた、という逸話は、彼がまさに教育を行い、彼と、これを聴く若者＝学生との間に「学校」という現象が存在していたことを示す。そしてプラトンはアテネ市郊外に教育のための施設＝アカデメイアを創設したのである。アカデメイアは弟子たちに引き継がれた。おそらく他のポリスでもこれに似た施設は生まれていたであろう。ローマは前3世紀によりやうく哲学などという高度な思索に接し、これを伝えたギリシア人学者を教師とする学校が貴族邸宅などに設けられ、増えていった。ローマ人がギリシアの学校に留学する習わしも盛んになった。アウグストゥスもその一人である。

これら高等教育の前提となる幼少時の学びについて、ローマはギリシア都市と同様公的にはほとんど認識しなかった。いわゆる「読み書きそろばん」は市民個々の家庭の問題であった。母親の監督下、男女の奴隷が子どもたちの手ほどきをした。男の子はある程度成長すると、奴隷に連れられて町の広場に行き、父親を含む市民たちの活動を見学し、演説や都市の外からもたらされるニュースが広場で告知されるのを聞いたりして、成人市民のあり方を学ばされた。

ローマ帝国東方から広がっていったキリスト教徒たちも、学校とか教育とかいう面ではこれら都市の現状にならっていたであろう。最初の伝道は成人に向けられ、個人の家の中でなされたと思われる。信仰を教育するという観念と実際の教えも最初から行われていたであろう。やがて教会が生まれ、礼拝の形式や聖書の原型となる諸文書、祈り、祝祷などが整えられ、教会内部の職制も出来、などして、それらを教え伝承すること、教師のような人材、学校の原型のような教育の場、なども備えられたのであろう。

これらのことは初心者、求道者向けの意味で教会の初等教育というべきものである。これとは別に、キリスト教の教理について思索し、論じあい、講義し、執筆する教会学者、後に教父と称されるインテリ教徒の活動も生まれていたと思われる。いうならば初期キリスト教の高等教育機関へとそれらは発展していったであろう。帝国の首都ローマに彼らが各地から多く集まり、研鑽し、学園的な組織がうまれたことが十分推測出来る。ユスティノスはそのリーダーの一人であった。

このように初期キリスト教の1～3世紀の歴史において、教育と学校という切り口で想定できることは、資料の支えもあって十分出来るのではあるが、その詳細はあまり知り得ない、というか調べられていない。さらにどのような状況を考え得るのか、を論じてみたい。

以下、本講の参考として、角度を変えて論じた初期キリスト教とローマ帝国の社会史的側面に関する文章を掲げる。

II. 最初のキリスト教徒

キリスト教はユダヤから地中海東方に広がってゆくが、まず都市のごく少数のグループとして存在した。原初期からキリスト教は実数の小ささに不釣合なほど多数の文書を生み出している。そこから小さい都市の教会はかなりの知的エリートが中核となって彼らが教理上も教会組織の上でも強い指導力を発揮したものと思われ、社会的にも教養ある階層の出であったろう。その他の教徒は比較的下層の職人・商人・労働者そしてその妻、娘などの女性であったのだろう。解放奴隷も少なくなかったと思われる。偶々その都市に寄留している他の都市民もいたろう。

キリスト教徒はごく小さい群で、しかも都市のユダヤ教徒をはじめとする市民たちから冷ややかな目で見られ、時に迫害を受ける危険があった。この状況は、教徒数が少しずつ増えていったにしても、3世紀半ばまでは基本的に変わらなかったろう。そのような背景でローマ帝国社会ではやや異質な心性と行動規範をもつグループが形成されていった。

イエスの弱者に対する評価の教え、パウロの「ガラテヤの信徒への手紙」3:28 などに見られる、ユダヤ人・異邦人・男女のへだての排棄の主張はある程度実現されていた。教会には使徒、監督（司教）らを頂点とする、のちに位階制として定着する上下の関係が当初からあり、決して民主政的ではなかった。しかしその序列は都市の社会的階層にはよらず、いわば信仰の序列を原則としていた。徐々にではあれ都市の富裕層やその妻などが入信するようになっても、教会で有力者として遇されたわけではなく、初心者には訓練の時間が課された。女性が差別されずに礼拝を共にしたのはもちろん、解放奴隷たちの役割は自由人と変わらず、奴隷も正規の教会員であったろう。社会一般における身分のちがいが、性差が教会では全く排棄されていたとは言えないが、神の前における平等が建前とされ、実効性をもっていたことは間違いないだろう。一世紀末ローマ教会の教父クレメンスは解放奴隷であった可能性が高い。2世紀初の小プリニウスはポントスの教会に女奴隷で何らかの役（ミニストラエ）を担っていた教徒を拷問した、と記している。177年ルグドゥヌムの殉教者にもかなりの数の女性がいた。原始教会の共産制は実現したわけではないが、献金は勧められ、その財的基盤で極貧者や病者への施しや奉仕も意図的に行われていたと思われる。3世紀のアレクサンドリアのクレメンスは『救われる富者は誰か』においてマルコ（10:17-31）などを引用して富者が施しにより貧者を救うことが自らの救いにつながる、と論じた。これがキリスト教全体の、公式見解だったであろう。このことはキリスト教が都市の貧者に対して、一般市民とは異なる姿勢をとったことを示す。富と貧の問題を人間の罪と結びつけて構造化したと言えるのである。ギリシア、ローマの都市において貧しさが一貫してさげすみと不安の対象であったことが想起される。

キリスト教の死の観念も都市民のそれと異質な特色を示した。死を最期ではなく、間もな

いと認識された終末の時までの一時の眠りと考え、カタコンベと総称されることになる都市外近郊の地下墓所に死者の遺体を置き、そこに信者が集まって共に礼拝をすることを習慣としたのであろう。このことと関連して、迫害に際して教徒があえて信仰に固執し、殉教の死を恐れなかった、という事象が殉教伝などの文書に記録されている。このことをもってキリスト教に死を美化する傾向があったと一般化するのには早計ではあるが、そのような死に対するキリスト教的イメージが喚起されるに至ったことは否定できない。そのことは2世紀のガレノスやマルクス・アウレリウスが軽侮あるいは嫌悪の念をもって気づいたように思われる。

キリスト教が霊と肉の別をうたって、肉体、とくに性的欲望を罪の最たるものと捉え、禁欲を守るべき倫理としたことも、ギリシア、ローマの都市社会においては独特であった、とはしばしば言われてきたところである。イエスは心の中のみだらな思いすらもつな、と言いつつ（マタイ 5:27,28）、離婚・再婚にも拒否的であった（同 5:31,32）。パウロは個人の禁欲を勧めた（I コリント 7）。肉欲への嫌悪と不安の観念は強まっていった。人間の罪をもっとも端的に示すのが性欲であり、禁欲行為は罪に対する克服をもっとも明瞭に示しうるものだった。教会内部では若い女性には処女たることが勧められ、正規の結婚が尊重されるものの、子を産した夫婦が性的交わりを断つことが評価され、寡婦ややもめには生涯独り身を通すことが評価された。禁欲も童貞も厳格に規則とされたわけではなく、それを守らない信者も存在したが、一種の理想とされ続けた。

このことの背景にいくつかのことが考えられる。ヘブライ・イスラエル以来の伝統としてユダヤ教の性倫理の厳しさがあった。同性愛（ソドム、創世記 19）と自慰（オナン、同 38）の忌避は、少数民族として子孫をつくりつづけようという民族的意志がその淵源にあったと推測される。キリスト教は旧約を受容し、ユダヤ教的倫理の一つとして禁欲をも受け継いだのである。ローマ社会における超マイノリティとしてのキリスト教にもこの倫理は整合的だった。少女たちがキリスト教徒の配偶者を求めることも、寡婦ややもめが再婚することも困難であった。また、タキトゥスやステニウスの記述に反映しているように、伝聞だけによるキリスト教観は、反社会的な行為にふける集団というものであった。それが性的紊乱という中傷へと拡大してゆくことは2世紀のキリスト文書から知られる。教会が性倫理を特に重視せざるをえなかった状況がこれだったのである。新約の使徒書簡中にはしばしば信者同士の接吻の習慣に信仰的な意味づけがなされていたことを示す記述があらわれる。それが3世紀以降の教父の文書では男女間の接吻を慎むように、との指示が現われるのも、教会外からの視線を配慮してのことと思わせるのである。

キリスト教の教えが一般の心性に対し異質であったこととして、偶像と皇帝への礼拝の拒否、それらを伴う都市の共同体的祭礼への不参加という、明確で反感を招きやすい行為が

挙げられる。小プリニウスが教徒の信仰の在否のテストとして用いたように、このことは社会的に知られ、時々生じる迫害の口実となり、教徒たちに厳しい決断を迫ることになることもあつたらう。ただパウロ（ローマ 13:1）を初め、キリスト教リーダーは、ローマ帝国と皇帝への批判、反抗の意志はないことを、内外に表明しつづけていた。この姿勢はユダヤ教徒にも共通するものではあつた。数的に多いユダヤ教徒をローマ帝国はいわば契約を結んでその反偶像的信仰行為を黙認し、キリスト教に対するのとは異なる政策をとった。それでも、皇帝の意向とユダヤ教徒と一般市民との騒擾を契機に彼らへの弾圧がしばしば生じた。そこには彼らの皇帝像を含む偶像拒否が常に背景としてあつたのである。

この他、キリスト教の“敵を愛せ”という教えが古代世界では殆ど例を見ないものだったこと、「神の国」という観念によって、地上の社会帝国に第一義的価値をおかなかつたことも同様であつた、と指摘される。

しかし、キリスト教徒の心性が古代地中海都市市民の心性と重なる面が多かつたことも無視されてはならない。彼らが皇帝に敬意を表し、最高権力者として請願し、裁判を願つたのもその一つである。このようなキリスト教の社会との妥協的側面を強調する論者も *de Ste Croix, MacMullen* など、近年少なくない。以下、いくつかの論点を見てゆこう。

イエスの「神と富とに兼ね仕えることはできない」や、らくだの針の穴の譬えが文字通り実践されなかつた、つまりキリスト教徒も富んで豊かになることを求め、富者が教会において発言力をもち、教会の富裕化、ぜいたくをも防げなかつた、という指摘がある。教会が富者に門戸を閉さず、むしろ社会の上層民のキリスト教への改宗を喜び、これを宣伝としたであろうことは想像に難くない。彼らは集会のために自邸を提供したり、多額の献金を捧げるなど教会のパトロンとして振舞うこともありえただらう。アレクサンドリアのクレメンスの書物で論理化される以前からこの構造はでき上がっていただらう。2世紀から3世紀にかけて教会の教職には手当てが支払われるようになり、迫害を受けた教会に献金を送るなどのことも行われた。教会が富を用いることをタブー視しなかつたのは間違いない。しかし、他方で教父たちはイエスの富に対する戒めを繰返したし、財産をすべて捨てて修道士になる教徒は増えつづけたのである。

キリスト教徒がローマ帝国の軍団に入隊した、もしくは入隊していた兵士がキリスト教徒となつた、ということは2世紀後半に確証される。文書の上では争いが否定され、平和を主張しながら、そして多神教の儀式を不可欠としたはずの軍隊にキリスト教徒が存在したことは一見矛盾する、と指摘されることがある。事実として3世紀には将校の教徒マルケリヌスが神々への祭儀を拒んで処刑された例など兵士信者の殉教の記録が散見されるようになる。他方ですでに3世紀後半に、ローマ軍団にキリスト教徒兵士の部隊があつた、という伝承もある。事実かどうかよりも、そのような伝承を教会が称揚した、ということがここで

は重要である。教会が反戦、反軍隊を教義として主張したことはなかったのである。マルケリヌスや、新兵の徴募を信仰ゆえに拒んだマクシミリアヌスのような教徒がおり、同時に軍隊で戦う教徒もいたということである。

この他、血なまぐさい剣闘士のショーや戦車競争、演劇などの市民たちの享樂的な生活に教会が全面的に拒否ではなかった、あるいは教会の司教などの地位をめぐる買収が行われた三世紀のカルタゴの事例、社会的な不正行為、教会政治をめぐる暴力行為などから、一般社会と変わらないキリスト教の現実的側面も見べきだ、とされることもある。奴隷制についても、自由人と差別なく受け容れたとされはするが、教会は奴隷制そのものを排棄させようとも、また非難することもなく、奴隷所有者としての立場に甘んじ、のみならず奴隷解放にも消極的であって、キリスト教公認の時代になっても奴隷使役の緩和の方向の立法もなされなかった、と言われるのである。

キリスト教の心性、ことに一般社会と関わる分野では独特で異質な面を示しつつも、それは教義上か、突出した教徒の主張や行動に限定され、普通の信者の行動のレベルではローマ帝国市民として存在しようとした、ということである。

「歴史は積み重なる」

『東北学院大学教職員修養会・キリスト者教員研修会報告書』第 18 号

年に一度の教職員の修養会を迎えることとなりました。今年は 130 年という当学院にとっても節目の年です。特別の想いを持ってここにわたしたちやってまいったところがあります。ある場所で、神の目、神の庭にとっては、「千年も一日のごとく」という聖書の言葉を引用したことがあります。長い人類の歴史の中で、私たちの学校の 130 年はほんの短いものかもしれませんが、しかし地上を生きる私たちにとってはこれはかなりの時間です。そしてその時間私たちの学校は守られ、あり続けたということ、あらためて不思議に思い、また感謝をもって受け止めます。そのようなことを覚えつつ、この修養会でも、建学の精神を振り返り、当学院のために働いている者たちの学びの時としたいと思います。

さて、私は専門が歴史であって、その話題へ思いがいくのでありますけれども、歴史というのは要するに、川の流れのように流れ去っていく、絶えず変わりなく、今のものは過去になり、未来のことがやがて今になり、そして過去となって流れて去っていくという、そういう捉え方があります。わりあい日本人の歴史のとらえ方には、こういう傾向が多いのではないかと友人の哲学者が指摘がしています。鴨長明の「行く河の流れは絶えずして」という言葉は典型です。そういえば日本の首相がそう言っています。第二次大戦の中で日本がアジア諸国に対して過ちを犯した、そういう反省の念とか、謝罪の言葉は、もう我々以後の若い世代に負わせるべきではない、彼らに責任はない、そういうことをはっきり言ったと思います。その首相の歴史観自体が歴史は流れ去るもので過去のことは忘れ去られるだけだと思って

いるかどうかは別として、このようなレトリックを使えたということは、過去のことはもう過去のこと、我々が直接見聞きしなかったことはあまり関係ない。未来志向という言葉をよくこの首相は使いますが、このような言い方はわかりやすく響くかも知れません。一方でその同じ哲学者は、歴史というのは、そのように流れ去ってしまっただけで、今あることとは関係ないというふうな見方だけで済まされるものでは当然ない、人間の感性の上でもそれは理解できない部分がある。つまり歴史はある意味で「積み重なる」、そういうふうな見方をします。私も、その今日は「積み重なる」という意味で、歴史を捉えたいと、そのような思いでいます。

この哲学者はいわば人間にとって過去の歴史は、ガラスのように重なり、その積み重ねの上に私達に乗っかっていると言うのです。もちろん刻一刻とそのガラスは付け加わっていくわけです。だんだんと我々は積み重なるの増えていく上に乗っかっているんだ、そういう見方をします。そのガラスは透明なので、下の方をじっと見ていると、過去の、つい先ほどあったリオ・オリンピックでの選手の活躍は割合はつきり見ることができるし、5年半前の大震災についても、あるいは第二次世界大戦の悲惨ないろいろな世界の状況も、積み重なったガラスの底の方に、下の方にあるけれども見ることはできる。更にその下には、江戸時代が見える、というそういうふうなイメージで歴史を捉えるのです。となると、流れ去らない歴史、積み重なった思い出の上に、私達はいる。そのような捉え方になります。

少し話は飛びますが、フィリピンの北の方にペリリュー島という島があります。名前はお聞きになったことがあると思います。つい2年ほど前テレビなどで取り上げられ話題になり、特に今年は後に述べます理由で私たちの耳目に新しい印象を残した島であります。南北9km、東西は3kmと小さな島ですが、第二次大戦、太平洋戦争の時期には日本にとっては重要な軍事拠点となった。やがてそこにアメリカも上陸することになる。アメリカ軍の侵攻に伴い、このペリリュー島にいた日本軍はその攻撃にさらされてほぼ全滅したのであります。大きな悲劇でありました。生き残った方が34名、この方々は戦争が終わってからもかなりゲリラ的に、戦いを永続する意思のあった人たちであったようではありますが、捕虜となった。捕虜となって辱めを受けるなという日本軍の掟に逆らって、あえて捕虜になった人たちもほかにいて、その人たちが202名、しかし驚くなかれ、この島で戦死し、あるいは自決した日本兵は、10,695名だったという記録が残っています。一方アメリカ軍の戦死者は2,336名、しかし精神的に病んだアメリカ兵たちもたくさんいた。われわれはテレビ番組ではありますがこのような事実を知らされることができたわけです。いま現在この島は、小さな太平洋の独立国パラオの一部となっていますけれども、今年の4月9日に天皇、皇后がこの島を訪れたわけです。第二次大戦のこの痛ましい出来事があった場所を天皇は訪れたのです。天皇にとって、歴史は流れ去らない、そういう意識なんだろうと思います。彼にとって、第二次大戦、特に日本人が味わった苦難の歴史というのは、積み重なってその上に天皇もいると、そういう意識だろう。ここに私は彼と首相のちがいを思うわけです。私としてはこの天皇の想いに共感を持ちつつ、私達もまた積み重なった歴史の上にある。何

万枚という過去のガラスの上に私たちは乗っかっていると、そういうことをイメージしたい、それですべての歴史の流れが説明できるわけではありませんけれども、そのような観念で観ることの大切さということを、私は思っています。

さて、聖書の、旧約から新約まで通しての考え方はどうだろうかという、やはり積み重ねの上にあるという意識で聖書の言葉は語られ続けている、というふうに思います。旧約の創世記から論じますと長くなりますから、イエスのことでお話しますと、彼は宣教の間、たびたび自分の行動なり言葉なりで、旧約のイザヤ書などの預言の言葉が「成就する」ということをよく言いました。終末の時についても聖書に語られている。あるいは、「わたしが来た、神の子たる救い主がきた」、このこともまた旧約以来の律法が成就した、長い歴史の中、この時点で神の計画が成就した、というふうに何度か語ります。そしてキリストは十字架につけられて死ぬということを予告して、その時を全うしたわけですが、そこに至る神の救済をまさに歴史として、積み重ねの歴史としてイエスは語った、と言ってよいと思います。そしてイエスが十字架に死に、復活したと信じて生まれたクリスチャンの群も同じだったと思いますし、その度合いはより強く表現されていると思います。それは、使徒言行録によく表されています。使徒言行録の 2 章の 14 節から 36 節を、後でご覧いただければいいと思うんですが、ペトロは旧約の昔、アブラハムの時代まで引用しながら、いかに長い歴史の中に我々がいるかということ強く意識し、そのことを訴えています。またステファノは同じように説教あるいは演説をした挙句に、ユダヤ教徒たちによってリンチにあって殺される人ですが、使徒言行録 7 章 1 節から 53 節、これは時代的なスパンも一番広いと思いますが、アブラハムがメソポタミアを出発して、地中海にやってくる。その後については預言者について、語り続けます。長い歴史を流れ去らせず強く意識しそのことを訴えていく、その歴史の果てに神の救いもたされた、と語ったわけです。

さて、今日の箇所でも、パウロは使徒言行録 13 章の 16 節以下、モーセという名前はないにせよ、エジプトからの脱出の記事から始めて、歴史を導く神によって、ダビデ、ソロモンを経ながらついにアブラハムの末、ダビデの子としてイエスが来られる。神の言葉を宣べ伝え、十字架で殺され、しかし復活した、そのことを訴えるわけであります。ステファノと違ってパウロは、伝道場で殺されることなく、これを語ったのはピシディアのアンティオキアという小さな町ですが、他の場所においても同様の言い方で、神の救済の歴史の末に我々が、いよいよキリストによって救われるのだ、そのように伝えたのであります。

さて、このように積み重ねる歴史の上にあるということが、パウロによっても語られ、それを我々も受け止め、我々もまた過ぎ去らない歴史、私達の下に積み重なっている歴史として捉える。そしてそれはなによりも歴史があるから我々が立っていられるというふうに考える、ということなのです。パウロが告げ、ペトロが告げたようにキリストの到来、十字架の死と復活によって、その積み重ねに意味がある。いやそもそも、積み重ねの一番下にある神の創造からこの今に至るまで、その積み重ねが神によってある、神の導きによって積み重なっている、そのことを思うべきであろうと考えます。

東北学院の存在はその意味で、積み重ねのガラスの中では一番上の方になるでしょう。地球が生まれて 45 億年とまで大袈裟なことは言わなくとも、人類は生まれて 600 万年とか、あるいは現世人類せいぜい 5 万年とかいいますがけれども、本当に想像を絶する積み重ねの中ですけれども、キリストの十字架という出来事が起こってからでも 2,000 年、そしてその 2000 年のうちの 130 年、東北学院の歴史がある。私たちの足元に積み重ねられている。そのことを思いつつ、改めて神の計画の壮大さに思いをいたしたいと思ひますし、そのことを思いつつ、この修養会の時を過ごしたいと思ひます。

お祈りをいたします。

神様、今年も東北学院の夏の終わりの修養会の時を与えてくださいます感謝いたします。ここに集まりました者たちに、どうかしばしの間あなたに思いをいたし、あなたが建て下された東北学院の 130 年の歴史に思いをいたし、そして与えられたこの学院をよりよくしていくために私達にあなたが何をせよと命じておられるかということを考える時としてくださいますように。そしてこの修養会のために、励ましのメッセージを携えておいでになった先生もあなたが絶えず励まして語らせてくださいますように。東北学院に連なる者たちは本当にたくさんいます。あなたによって生かされ、この東北学院に学び、働き、あるいは卒業していきました。それぞれの人々の上に与えられた恵みを感謝しますとともに、これからもまたあなたがその者たちの導き手となってくださることをお願いいたします。これらの感謝と願いとを、私たちの主イエス・キリストのお名前によって御前にお捧げいたします。

アーメン。

2018 年 年頭所感「すべてのことに感謝しなさい」

『東北学院時報』第 743 号

東北学院につながる皆さんと共に新しい年を迎えることができました。どうぞよろしくお祈りいたします。

去る 2017 年も本院は豊かに祝福を受けた歩みが出来たと思ひます。2 月には星宮望前院長・学長が、7 月には田口誠一元理事長・院長・中高校長・幼稚園長が、それぞれ神の身許に召されたことは大きな悲しみでした。しかしこのお二人始め多くの先達の主にある働きが、今ある学院を造り上げてきたことを、感謝をもって思ひます。

もう少し昨年を振り返りますと、3 月に旧仙台市立病院跡地の取得が市議会で決定し、購入手続きを完了しました。これを「五橋キャンパス」と称し、土樋と合わせて杜の都の中心に「東北学院大学アーバンキャンパス」を置き、全ての学部を統合する壮大なプロジェクトを打ち出しました。2023 年度完成を目指して六年間、大変な事業を推進してゆくこととなりますが、それは大いなる夢に向かっての心弾む事業でもあります。

COC と COC+の大学に文部科学省から付託された事業も、宮城県や仙台市、諸大学、企業と協力して地域活性化、復興のための人材育成のために順調な進捗状況です。ブラン

ディング事業も予算措置を得て、ラーハウザー礼拝堂のステンドグラスの研究と修復を、市民の皆さんをもお招きして展開しました。

中学高校は新「コース制」をスムーズに滑り出させ、よい成果を見ることが期待されます。榴ヶ岡高校も教学のガバナンスを強化し、今年が改革スタートの年となります。

そして昨年の本院史資料センターの活躍も忘れてはなりません。第二次大戦の我が国の過ちを薄れさせようとする風潮に対して平和憲法を守ろうという意識も根強くあります。現行憲法の国際平和の理念を、外国人の手ではなく日本人の力で原文に盛り込んだこと、その立役者のひとりが東北学院元理事長であり、指導的な国会議員であった鈴木義男であったことを明確にした何度かのシンポジウムを盛会裡に実現させたのです。また10月には同センターのメンバーが分担執筆した『東北学院の歴史』が刊行されました。200頁足らずの小冊子ですが、学院創立から130年を経た学院の現状まで、誰にも読みやすく、卒業生には懐かしく、学生生徒には自校への知識と愛着が得られる、よい書物が出来たと思います。これからも大いに活用してほしいものです。

さて新しい2018年、これらのことがすべて発展的に受け継がれてゆくものと確信しています。五橋キャンパスの、ホールなど4つの建物の基本設計が年明け早々出来上がる予定です。6,000人の学生が内容も革新的な教育を受け、地域の市民の皆さんと常に交流し、地元企業とのコラボも行われて魅力的な成果を発信してゆける、すばらしい大学キャンパス創造の事業が本格始動することになります。もちろんかなりの財政上の準備が不可欠です。現在の力で十分担えますが、少子化と学生定員の厳格化、社会的な状況などは私立学校の安定的経営の将来を不確実なものとしています。大学は今年度文学部教育学科をスタートさせます。また学生の定員増も実施します。厳しい状況下にある私立大学の生き残り戦略とも言えます。アーバンキャンパス構想はまさにその高度戦略です。十分に練り上げた計画、それを実現させてゆく、一致した勇気と熱意が不可欠です。是非とも成功させなくてはなりません。学院が建学の精神に立つ学校を継続させ、地域と共生し、質的に豊かで高度な教育を学生に施す魅力ある大学としてのプレゼンスを高め、継続させる保証となるからです。

教育内容の改革も継続されます。ITの活用で授業方法がより多彩になり、学生たちの主体的学修力も強まるでしょう。課外活動とかボランティアへの参加意識ももっと高まってほしいと思います。「ゆたかに学び」、人間性に幅をつけ、対社会適応力が身につく、「教育の質保証」です。これは中高校、大学等しくなすべき課題です。

昨年はルターの宗教改革から500年、本院のルーツを振り返り、記念の催しをいくつも開きましたが、今年も建学の精神に根ざして、礼拝を守り、福音的な講演、シンポジウム、また出版などを果たしてゆきたいと思います。

東北学院に関わる者たちが、神によって生かされていることに感謝し、愛をもって学生生徒、同僚、そして地域の人々に奉仕する、真に「地の塩、世の光」の実行を誓い合いたいと思います。(テサロニケ I 5:18)

「放蕩息子・その父、そして兄」

『大学礼拝説教集』第 22 号

ルカによる福音書 第 15 章 11～32 節

11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。

15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18 ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。

29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31 すると、

父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。³² だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

人間は生まれながらにして罪を負っていることを私たちは教えられています。そのことを素直には受け入れられなくとも、自分自身を見つめるとき、自分の弱さ、愚かさ、他人をねたんだり、憎んだりする心を持つことを認めざるを得ないのではないのでしょうか。そのような自覚を持つ人がいるからでしょうか、今お読みした「放蕩息子」の物語はイエスのたとえ話の中でも引用されることが最も多いのではないかと思います。絵画で描かれることがしばしばです（たまたま二〇一八年のキリスト教カレンダーの一枚がムリーリオの「放蕩息子の回心」です）、プロコフィエフやドビュッシーなどクラシック音楽のテーマにもなっています。

さて、ここに出てくる父親は大富豪というのではないのですが、堅実な農業経営者のようです。息子が二人。弟が自由な人生を夢見て、父親に自分が受け継ぐべき財産を前倒しで、今もらいたい、と要請します。いわゆる「生前贈与」です。本来は父が死んでから初めてもらえる財産です。ここに「死」の観念が関わっていることは興味深いところだと思います。

弟は多額の財産を手にして遠く離れた土地に旅立って、おそらくは親たちとは音信不通の状態です。「放蕩」三昧の日々を過ごします。必然的に彼は金を使い果たし、極貧の状況に陥ります。ここでも弟が飢えたことが「死」の状態を暗示していることを指摘したいと思います。

弟はおのれの愚かさ、つまりは罪に気づき、心を入れ替え、父の許に帰ろうと決意します。「息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と告白して赦しを願おう、とまで思い詰めます。

ところが、帰って来た彼を、まだ遠く離れていたのに父は目ざとく見つけ、「走り寄って首を抱き、接吻」するほどに喜んで迎えました。祝宴を命じ、最良の衣服を着せます。その理由を父は、「この息子は、死んでいたのに生き返ったからだ」、と明言します。弟の家からの離反は「死」と同義であったことが確証されるのです。

最後に、初めてもう一人の息子である兄が登場し、父の、弟の帰還に注ぐ喜びを、理不尽なことだと強く抗議します。父と共に生き、働いてきた自分に対する父の接し方と比べて何という不公平か、と。父は兄の不平、あるいはひがみに対して、弟の死からの生き返りがどんなに大きな喜びであるか、と前の言葉をくりかえして、物語は閉じます。

一見とてもわかりやすい物語のように見えます。もちろんわかりやすく受けとめていいのです。たとえ話ですから、自分のことになぞらえて理解することが求められていると言ってよいでしょう。そしてこの物語を読む者は、まずは「弟」を自分の生き方に重ねて考える

でしょう。神への信仰、そうでなくとも人間として自分が正しい生き方をしてきたか、を振り返って、神、あるいは親の愛情を裏切り、厳しい状況に自ら落ち込んでいった経験に思い当たるかもしれません。その時、この物語の父、あるいは神が、悔い改めれば無条件で喜び祝ってくれる、そのような存在があるのだ、ということに考え及ぶことは自然です。ルカ福音書は、読む者に、人間の罪とそこに気づくなら、その罪は神によって赦されることを教えます。

それに加えて、繰り返し記しましたように、弟にたとえられる私たち人間が間違った方向に行ってしまう、つまりそれは罪を持っているということであり、私たちは「死」に直結する生き方をしている、ということはこの物語は示してもいることを見落としてはならないと思います。父の許に帰ろう、神の許に帰ろう、ということは、「死からの生き返り」すなわち「死からの復活」だ、ということです。キリストの死と復活、が物語の伏線である、ということなのです。

最後に、「兄」です。読者として、「弟」を自分に置き換えて読む人がいる一方、「兄」を「自分」と考えてみてはどうでしょう。まじめに父に背かず生きてきて、不自由はありません。しかし、不満を抱え、家を捨てて勝手な生き方をしたあげく凶々しくももどって来た弟を大喜びで迎える父に、彼は不満を爆発させます。

私たちは、日頃自分のごく正直に、よい人間として生きていると思いき、過った行動を起こす人々を冷ややかに見がちではないでしょうか。散々自分勝手な行動をしたにもかかわらず、大変な幸運に恵まれた他人がいたとしたら、なんとなくひがむ気持ちを抱いて、なげちをつけたくなったりすることがあるのではないのでしょうか。

この「兄」は、罪とか愚かさの自覚、それを悔い改めること、そのような者を心から喜ぶ父の愛情、を理解できていないのです。

父の心、すなわち神の、罪ある者にそそがれる愛、を知り、この父と共に、弟の生き返りを喜ぶ兄、になることもまたこのたとえ話から学びたいと思います。

祈り・・・神さま、放蕩息子の物語から、父なる神が罪人の悔い改めを喜び、死からの復活をも示してくださっていることを知らされ感謝いたします。どうかあなたの愛を信じ、喜んで生きる者として下さい。主の御名によって祈ります。アーメン

2018（平成 30）年度

入学式告示

本日ここに、2018(平成 30)年度入学式を挙げるにあたり、新しく入学された 2878 人の皆さんに心からお祝いを申し上げます。またご臨席の保護者・ご家族の皆様にお慶びを申し上げますと共に、ご来賓の皆様にも厚くお礼申し上げます。

入学される皆さんはそれぞれに高校での学びを終え、選ばれて入学の権利を勝ちとられ、ここにおられます。今東北学院大学の一員となられました。お迎えする大学としてこの上ない喜びであります。わたしたちは皆さん方一人一人を、かけがえのない人格として尊重し、受け入れます。これからの 4 年間、全力でサポートすることをお約束します。

東北学院大学は 6 つの学部と 6 つの大学院研究科を有する、東北最大の私立大学であります。この仙台の地で、1886 年(明治 19 年)にアメリカ人宣教師ウイリアム・ホーイ、D.B.シュネーダー、そして日本人初代のクリスチャンの一人押川方義らの働きによってキリスト教学校が設立されました。これが東北学院の前身、仙台神学校であります。5 年ほどで仙台神学校は東北学院と改称し、現在の名称となりました。大学の設立は 1949 年です。

創立以来、東北学院は総計 18 万を超える卒業生を世に送り出してきました。仙台で、東北で、のみならず世界各地で、あらゆる職場で、また家庭で、よい働きをしています。今日楽天イーグルスの先発、岸孝之投手も東北学院大学の OB です。

まず学院の教育理念の基盤、これを建学の精神と言います。それは、「聖書の示す神に対する畏敬の念とイエス・キリストにならう隣人への愛の精神を培い、文化の発展と福祉に貢献する人材の育成を目指す」、と定められています。よりわかりやすい表現で、私たちは「地の塩、世の光」として生きる、というイエスの言葉をスクールモットーとして来しました。

この精神によって、大学の 3 つのキャンパスでは、毎朝 10 時台に、短くはありますが礼拝が必ず行われます。静謐な礼拝堂で、ステンドグラスを見上げ、聖書を読み、それに基づくメッセージを聞き、学院の根幹の精神を知ってほしいと思います。

次に教養教育ということです。6 つの学部にはそれぞれの専門性がありますが、いかなる分野の知識を身に着けるとしても、何より社会での生き方を知るためには、専門分野の基盤となり、背景となる学問を大学前半期を中心に学ぶのです。それは外国語であり、政治・法律・経済・科学・芸術などの諸分野の基礎的知識であります。

これに加えて東北学院大学には「TG ベーシック」と呼ぶ、学生の人間性の陶冶と社会的能力の育成に配慮した、キリスト教や日本語、コミュニケーション能力、などの内容の科目があります。これらによって一層皆さんの実際的な、予期せざる事態にも適応できる能力がつくだろうと思います。

大学では、これらいくつかの要素からなる教育を、皆さんが過ごす 4 年間の在学期間中どのように受けてゆくか、をカリキュラムで示します。すでに始まっているオリエンテー

ションで、先輩のリーダーや教職員から、皆さんそれぞれのカリキュラムを構想し、大学生活の過ごし方を教わってください。そのオリエンテーションキャンプの機会に、ファーストコンタクトがよいスタートとなって、新しい友人もできればよいと思います。

大学はすべての学生が、手助けを必要とするとき、支えたいと準備しています。授業やキャンパス生活の助言をするコンシェルジュとか、学生支援のセンターとか、また先生方のオフィスアワーなどを利用してください。

課外活動も大学生活の潤滑油です。そこでのスポーツや趣味との出会いは人生一生に関わることも知れません。また東北学院大学では伝統的にボランティアの社会活動が盛んですが、大震災の後は復興ボランティアステーションが全国の大学ボランティアのキーステーションとなって活躍しています。どうぞ助けが必要な人々のために奉仕する機会を広げてください。

毎年授業の方法については工夫し改善を行っています。学生自身が考え、調査し、報告提案する、アクティブ・ラーニングという方式を多くの授業で取り入れています。パソコンなどを使いこなせる、最新の IT メディアを備えたラーニング・コモンズという学びの施設を準備しています。授業は今、先生が教え与える、という一方向のものではなく、学生が主体的に授業に関わり、調べ、考え、まとめたことを発表し、討議し、評価し合うような、能動的な学修が求められています。

大事なものは、皆さん自身が、大学生活をどのように展開してゆくか、その意志を明確にもつことです。皆さんが自分の希望を明確にし、それを教授たちに示し、教えを請う、皆さん自身の言葉です、説明力です。聖書の言葉を加えるなら、「求めなさい。そうすれば与えられる。・・・門をたたきなさい。そうすれば開かれる」（マタイ 7:7）であります。皆さんはこれらの主体的学修によって知識を深め、洞察力を養い、社会への視野を広げてください。ことに難しい問題が山積している現代世界を見つめ、平和と寛容を実現し、差別や貧困をなくす立場に立ってください。

東日本大震災から 7 年が経ちました。復興は、津波の被災地と原発事故のあった福島でとりわけその道に厳しいものがあります。復興のための人材が求められています。ボランティアでのみならず、研究成果による貢献や、地元への就職、それらもまた大学は期待されています。東北学院大学は東北日本という地域の大学として、その社会と人々と共に生き、共に創造する大学であることを明確に打ち出しています。皆さんも復興について学び、震災を風化させない、という意識を持ち続けてください。

東北学院大学は、「アーバンキャンパス構想」を掲げています。元の仙台市立病院の跡に五橋キャンパスを建設し、2023 年には泉と多賀城のキャンパスを移転させ、学都仙台の中心にある大学、地域の市民にも開放的な大学像を実現させようと計画しています。

皆さんも、このように地域社会と共に生きる大学の働きに、主体的に関わっていただきたい、その覚悟を共にしていただきたいと思います。

厳しい時代の中で大学生活を始めようとする皆さん、東北学院大学は、これからさらに豊かな構想を持って発展してゆこうとしています。皆さんも共にこの4年間を、計画的に、着実に、しかし心は高く、快活に、過ごしてほしいと思います。そのキャンパスライフを大学はいつも見守り、支援を惜しまないことをお約束します。

以上をもって学長の告辞といたします。

2018年4月3日

東北学院大学学長 松本 宣郎

学長見聞録 vol.7

『東北学院時報』第745号一人ひとりの内に備わる『未来の扉』をひらく／ゲスト：郡和子
仙台市長



昨年8月、本学出身者としては初の仙台市長が誕生しました。母校への誇りを新たにした在校生・卒業生も多いのではないのでしょうか。郡市長とは会議などでお会いする機会があるものとの対談は初めて。さて、どんなお話が伺えるのでしょうか。楽しみです。(松本)



郡 学校には地域における「広場」の機能が期待されていると思います。子どもを核にして地域の大人がつながる小中学校に対し、大学には「自立した個人」がテーマごとに集い、異なる価値観を共有し、知を深め、行動へとつなげる結節点のような役割を果たしてもらいたいと切望しています。
松本 皆様の温かなご支援を源泉に、未来に向けた勇氣ある挑戦を続けていきたいと思っています。

一人ひとりの内に備わる『未来の扉』をひらく

出会いや経験が成長を導く

松本 郡市長はどのような学生時代を過ごされたのですか。
郡 私が学生だった1970年代後半は、日本はまだ貧しく、もちろん若者の多くも物質的に恵まれていたわけではありませんでした。しかし、右肩上がりの経済動向にあって、頑張ればより豊かになれるという希望が持てた時代だったと思います。学生の自分は学業であるかと思いますが、私は学問の世界に没頭するというよりは、「社会」を学びのフィールドとしていたような学生でした。

松本 学問は机上と実践の両輪でこそ成るものですかね。
郡 故・五十嵐之雄教授のゼミに所属し、街に出てマーケティング調査をしたり広告の効果を評価したりしました。私の興味と志向性にマッチした研究スタイルだったと思います。

松本 放送部でも活躍されていたようですね。
郡 五十嵐教授に「(就職は)マスコミ志望です」と申し上げたら、もっと時事に関する知識を深めなければならないとおっしゃってレクチャーをしてくださったのです。それも英字新聞の社説をテキストにする方法でしたから、なかなかタフな就職試験対策となりました。先生方の温かなご支援のおかげで、将来の道を拓くことができました。松本学長の学生時代にも、いろいろなお出来事があったと拝察いたしますが。

松本 私の母校(東京大学)では、大学紛争が苛烈を極めました。そんな“嵐の季節”が過ぎ去った後、大学院に戻り、念願だった「キリスト教史」の研究に取り組み始めたのです。しかし、学生運動が激しかった時代の、同じ空気に触れた者としては深く考えさせられ、「権力と人間」の関係性に思いを致すようになりました。これは私の研究の根底を支える主題です。

郡 私たちはさまざまな出会いや経験を通じて、自身を成長させる新しい

気付きを得ているのです。私も報道制作を通じて多くの現場に臨むうちに、問題を抱え、自分の力で苦境から抜け出せない人々がおられることを知りました。個人の努力ではいかんともしがたい壁、つまり社会の慣習や制度があるのだとしたら、それを変えられるのは政治の力しかないと思いました。
松本 私の研究テーマである初期キリスト教使も社会的マイノリティであり、古代ローマ帝国の中で迫害を受けながら生きなければなりません。しかし、帝国も弾圧一辺倒ではなかったというのが私の結論であり、それまでの歴史認識に再考を促すものでした。何事も一方的な見方ではなく、多様な視点で見つめることが大切ですね。それがお互いの理解や寛容につながっていくのだと思います。

歴史のうえに築かれる未来

郡 仙台は「杜の都」として全国に知られていますが、「学都」としての歴史と潜在力を備えた街です。中でも明治初期に相次いで創設されたミッション系の私立学校が果たしてきた役割は、非常に大きいものがあると思います。

松本 「仙台神学校」を源とする東北学院は130年以上の歴史を誇っています。現在の地域を代表する教育機関に成長することができたのも、キリスト教の教えを導き、苦難の時代を乗り越えてきた先達の努力と忍耐があったからこそでしょう。そして今、次なる100年を見据えた新しい風が吹いています。

郡 「五橋キャンパス」ですね。
松本 いよいよ今年度から実施設計に入ります。テーマは「地域と市民に開かれたキャンパス」で、土樋・五橋地区を一体的なキャンパスとして整備していきます。泉、多賀城の両キャンパスを集約・統合することにより、約12,000人が集うエリアになります(東北学院大学アーバンキャンパス計画)。仙台の都心南部に新しい街が誕生することになりますね。五橋キャンパス内には、地域や産業界との連携・協働の拠点となる「未来の扉センター」も設置する予定です。

「学都仙台」ブランドの進化発展を

松本 これからの大学は「教育の質保証」を前提としたうえで、時代や社会の要請に敏感でなくてはならないと考えています。そのひとつに「人生100年時代」に向けた学び直しの機会の提供があると思います。複線型のキャリア形成のための継続的な学びと高度な専門教育は、大学こそ果たせるものです。

郡 知識欲というのは何處になっても衰えることはありませんね。私自身は年を重ねることに増しているという実感があります。「学都仙台」は学校が多い街というイメージを超えて、「学びの機会が多様で豊富な街」という都市ブランド色も深めていく可能性がありますね。

松本 東北学院にはまた、地域の発展を担う人材を輩出するという大きな使命があります。東日本大震災後は復興を先導する人材の育成に力を入れています。復興はまだ途上にあります。東北学院が掲げる建学の精神である「地の塩、世の光」の下、私たちに何ができるのか、を問い続けなければならないと思います。

郡 震災時、東北学院はいち早く災害ボランティアステーションを立ち上げ、学生ボランティアの拠点的作用を果たしてきました。卒業生として大きな誇りを感じ、心強く思いました。このように他者を思いやるマインドを持つ社会員が増えていくことは、豊かでよりよい社会づくりの原動力になると思います。

松本 被災地の持続的再生にあたっては、6学部16学科のそれぞれの専門性を活かすことができます。まさに総合大学の強みです。

郡 学生時代は気力体力が充実し、自身の可能性を試すチャンスと時間に恵まれています。勇氣をもって一步を踏み出し、新しい分野に果敢にチャレンジして欲しいと思います。

松本 そうですね、一人ひとりが自身の内に備わる『未来の扉』を開いてほしいと願っています。

郡 和子 (こおり・かずこ)

宮城県仙台市出身。東北学院大学経済学部卒。1979年東北放送(株)にアナウンサーとして入社。解説委員・報道制作局部長などを歴任。2005年第44回衆議院議員総選挙で初当選(比例東北)、以後2017年7月まで4期務める。第35代仙台市長(2017年8月～)。



「赦してやりなさい」

『東北学院大学「宗教活動報告」』第 19 号

今年も、恒例の東北学院大学の夏の修養会を持つことができ、大変幸いに思います。

「ゆるす」という聖書の言葉について、考えたいと思います。そう思わせるにいたったのも、この現代、特につい最近、大変不安を覚えることが私たちの周りに、あるいは世界に見出されるからです。人々の、人類たちと云っていいほど、その行動に何とも言えない、不安や嫌悪の念をかきたてることがあまりにも多いと思います。「きれん」という言葉がありますけれど、思い当たる節が多いと思いますが、本来はナイフが切れるとか頭が切れるとか、いい意味で使う言葉、ごくごく普通の動詞であったんですが、今は違います。人に対して怒りを一挙に爆発させる、非常に不寛容・狭量な思い、そしてその思いが爆発して人を攻撃する、傷つけるにいたる人間の行動を指しています。本来とは違う言葉になってしまっています。ちょっとしたことで、まあ言うなれば頭にきて、自分の運転手にとんでもない暴言を吐いてしまった国会議員がいました。それをまた録音するというところにも、録音する人の切れた状態を感じないわけではありませんでした。いろいろなところでそういう面は見出されます。ある地域に子供たちのための保育園を作ろうとして、周辺の人に聞いてみたら、子供の声はうるさいから絶対嫌だ、という、まあこれは切れたというところまではいかないんですけど、非常に不寛容な反応をした高齢の方々が多くいたという話もあります。

何かあると SNS で映像をあげる、それはそれでいいんですが、踏切に立ち入って自撮りをしてそれをあげて、いかななものかということで、途端に次に起こったことはツイッターでの炎上です。これも切れる現象です。そのためにブログを閉じるとか、場合によっては職を辞する、タレントとしての生命を半分断たれる、そういうようなことすら起きるわけです。あるいは生徒の行動なり言葉に、急に怒りを覚えて、明日からくる必要がないとか窓から飛び降りろなどということを平気で口にする教師のことも聞かされ、我々も胸が痛む思いがします。

単に市井の人々だけではなくて、世界的に影響のある座にある方々が、ツイッターなどでいきりに攻撃をする。すぐそれを取り消したりもするんですけど、非常に浅い思いで思ったことをすぐ口にしてしまう。それが世界に与える影響力とか、人を傷つけるということまで思い至らないということです。挙げれば本当にきりがありません。

どうしてなのか。昔もちろん切れることはあったわけで、殺人事件は前からあったし、秋葉原の大きな殺人事件も 10 年くらい前にありました。世界で戦争とか紛争とか、絶え間がありません。それでも人が我慢できなくなる、切れてしまう事例が、先ほど私が申し上げたように、近年目立ってしまうということです。一つには、さきほど SNS ということを申しましたが、IT が高度化して、非常に発信しやすくなったし反論もしやすくなった、しかも匿名でそれができる、だから抑制が効かない言葉もつい文字にしてしまう、言葉にしてしまう、映像にしてしまうことがあるだろうと思うのです。とても楽にそういうことができるようになった。昔ならテレビとかラジオでしかできなかったことを、普通の人間・普通の

子供ができるようになったということが一つあるだろうと思います。もちろん良いこともあ るわけで、そのために人の命が助かったとか、ほのぼのとした話題も出てきたりもする んですが、その逆が非常に多い。先ほどいくつかのたいへん不愉快な事例を話しましたが、 その 背景にあるのはやはり、これもよく指摘されることですけれど、時代の閉塞状況では ないか。 SNS で発信できるんだけど、だからといって生活がよくなるわけではない、自 分の内にあるわだかまりが晴れ晴れとするようなことはほとんどない、こういう風な状況 に多くの人間がおかれている。その度合いが深刻になっている。それをやわらげるとか、も うちょっと穏やかに、寛容になろう、人々の痛みを想像する力を持ちなさいとか、そういう ことをもっと言ってほしい。そういう寛容さがないので、ミサイルが飛んだだけで、考えら れなかったような暴挙だ、とすぐそういう反応をしてしまう。世界の指導者がそうなんです から。

さて、そこで何を我々は言わなければいけないのか。どういう風に考え直せと訴えなけ ればいけないか、ということです。そこで聖書を見なければいけない、イエスを見なければ いけないと思うのです。福音書から知られる彼の行動はどうであったでしょうか。今日のと ころでも、前半はちょっと飛ばして、後半は、あなたの知っている人が、あなたに攻撃をし かけてきたとしても、「ゆるして」といったら許してやりなさいということ。それは何回あ っても、7 回というのはもう何万回あったって許してやりなさいという意味の 7 回でしょ う。もちろんこう申しますと、皆さんの頭の中にはすぐに、例えばマタイによる福音書の 18 章 21 節・弟子がイエスに「許してやれとおっしゃいますがいったい何回許してやればいい の ですか、7 回はまあなんとか我慢しますがそれでも」イエスは「7 を 70 たび、490 回は許 しなさい」という風におっしゃったという有名な言葉が浮かぶと思います。そのようなイエ ス の言葉とか行動は枚挙にいとまなく福音書に出てくるのではないのでしょうか。ブドウ園 の主 人が朝労働者を雇う、昼労働者を雇う、午後また雇う、夕方になってまた労働の市場 に出て 行って仕事がない人がいた場合には、「あなたも来なさい、朝の人と同じだけの給料 で雇ってあげる」というブドウ園の主は、どんなに寛容な雇用者であるか、という例もあり ます。「汝の敵を愛せ」という究極的な言葉もあります。切れるなどほんでもない、ゆる してあげなさい、たとえあなたを攻撃し憎むものがあっても彼を愛しなさい、何かいさかい があるなら ば和解しなさい、という言葉も何度も見ることができます。

そのイエスは、どのような生涯をおくったかということでもあります。このように許しを主 張し愛を主張し寛容を主張し、それを実践したイエスは、寛容でない、切れた人々、ユダヤ 人・ローマ人によって捕えられ、裁判を受け十字架に追いやられ処刑されたわけです。しか しイエスはそのような仕打ちにあう中で一言も弁明せず抵抗せず、それを聖書は屠り場、殺 されにいく子羊のように従順に黙ってその死を甘んじて受けた、そう記します。それはイエ スが聖書の言葉によれば神の子であり、神の命じるままに生き、死んだからです。神が命じ る以上、一切抵抗せず、人を責めることなく、十字架にかけられて苦しみの中にあるイエス は、彼に槍を刺そう、あるいははからかって水を飲ませよう、あるいは彼が着ていた服を奪い

取って切り裂いてたがいに分けようとする人たちを前に、「神よ、彼らを許してやってください」というそのような言葉を、十字架の上の言葉の一つとして残したわけです。そのようなイエスの姿勢・生き方です。先ほども言いましたように、私たちが今この世界、不安・懸念の中でのとるべき、あるいはとるようすすめるべきことは、そのイエスは十字架の死を引き受けたのち 3 日目に復活したということが、私たちにとっては大きな励まし、支えになると思います。攻撃されそのことを許す、ということはなかなか辛いことでもあります。しかし私たちは許す。なぜ許すか。イエスがそのようにされたから、イエスがそのように命じておられるから、そしてそのイエスは究極まで人を許しそして殺されたけれどもよみがえられた、そのことを我々は知っているからです。条件があるから、許しても大丈夫だとかそういう浅薄なことではなくて、そのイエスの例があるから、私たちは許さなければならないということでもあります。

私たちの先達であったイエスの弟子たち、ペテロのことを思い起こします。ペテロも実はある意味では切れる人だったという事例はいくつか聖書の中にあります。イエスを逮捕しに兵士が取り囲んできたときイエスの身を案じたペテロは、短剣を持ってその兵士に襲い掛かって耳をそぎ取った、そのペテロをイエスは叱り、そのようなことをしてはならないと言って傷を負った兵士の耳を癒した。その記述もまた印象的です。パウロはどうでしょうか。パウロはキリストとの出会いを得る前に、厳しいキリスト教徒たちの攻撃者、責める人、いわば切れていた人であったということをご承知だと思います。そのパウロの仲間たちによって、イエスの福音を述べ伝えていたステファノはリンチにあって殺されたわけです。そのあとパウロは幻のイエス、復活のイエスに出会って心を入れ替え信仰者となり、初代キリスト教会 最大の伝道者となったわけです。が、そのパウロもやはり自らの、浅薄で、人を憎むことによって、限度を超えた行動をしてしまった自分のことをおそらくは思いつつ、そしてイエスの生き方、許せといったイエスの言葉をおそらくは思いつつ、様々な場所で、寛容・忍耐という言葉を書いていることも我々は読みとることができます。ゆっくり見る暇がありませんけれども、「コリントの信徒への手紙 I」の 13 章 4 節、愛は忍耐強い。じっと我慢する、それが愛である。人の行動にいちいちいらだってはならないということになるでしょう。あるいは「ガラテアの信徒への手紙」5 章 22 節、霊、これはキリスト、神を信じる信仰の霊です、霊の結ぶ実は平和であり、寛容であり、という言葉も彼は残しています。

このように、キリストのこの生き方、許せというその生き方を私たちは、キリストの生涯、彼の生き方・死に方、そして復活、そのことにあわせて真似なければいけない。寛容でなければいけない。人からの攻撃とかあるいは憎しみに対して忍耐強くなければならない。キリストがそのようであれ、そのように命じられるからだということでもあります。

今日の聖書の各箇所イエスは「赦してやりなさい」という。やりなさいという言葉を使います。イエスだから言う言葉であります。私たちもまた他人の攻撃に対して、ゆるしてやるという思いでいる、まあそうしなさい、ということです。これに対して「やる」というのは結局は上から目線だ、あなたは別に苦しいこともつらいこともない、つらいことがあって

社会に憎しみを持つ人をゆるしてやりなさいという、どこかそこに心の傲慢さがあるんじゃないか、そのような批判的な見方もあると思います。もちろん私たちは他人に対して上から目線で接してはいけないと思います。ただあえて言えば、私たちはそのようなことをしてやるにしても、それはイエスがそうせよと命じられた、それがあから我々がやれる、私たちはイエスを思うから人に対して、知らない人からは上から目線に見えるかもしれないけれど、私たちがしていることはイエスの行いを彼らに伝えて、そのおっしゃったとおりにやる、そういう意味での「やる」、ということであります。そのように私たち、キリストを建学の精神とするものは、キリストに学ぶ、キリストをまねる、キリストのように行動する、思う、そのことを常に忘れないようになりたいと思います。その思いの中に、私たちの学校、大学における人と人との関係の根幹があるし、ましてや私たちよりは目下にあたる学生生徒たちに対する姿勢にも、私たちは「やる」という姿勢で臨むけれども、その根本は自分の方が人間として偉いからするのではなくて、イエスのなされたようにしているという、そういう思いでなければいけない。そのように思います。

天の神様、建学 131 周年の時、大学にとっては 68 年目の夏、修養会を持つことができ感謝いたします。どうか私たちが、人間に対して 安らぎの心・慰めの心・いたわりの心・寛容の心・忍耐の心をもって接し、共にキリストをまねる、キリストにならうことができますように。修養会に派遣された教師をはげましてくださいますように。ここに集う百数十名の者たち一人一人をどうぞあなたがかえりみて、この修養会の最初から終わりまで守り、導き、励まし、いたわってください。この願いと感謝を尊き主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げいたします。

アーメン。

「クリスマス：贈り物の物語」

『大学礼拝 チャペルニュース』143

クリスマスの時節になると必ず話題に上るのが「クリスマスキャロル」に代表される、物語の数々です。英国の人気作家だったディケンズのこの短編は、コミカルなファンタジーという感じで、庶民の家庭の心温まるクリスマスのよさを描いて、世界で愛読されてきました。

『兵士のなみだ』という絵本はヘロデ大王の命令を受けて幼子を襲おうとした兵士がその子の美しい笑顔に心を開かれる、という福音書から想を得た作品。またこれもよく子供クリスマスで引用されるのがヘンリ・ヴァン・ダイクの『四人目の賢者』。ユダヤ人の王の誕生を祝おうと東方からやって来た占星術の学者は三人ではなく四人だったが四人目の学者は道に迷って間に合わなかった、しかし・・・という結構壮大な物語です。

三人の学者は黄金、乳香そして没薬を贈り物として持ってきました。三つはキリストの王としての権威、祭司である神的権威、そして死んで墓に葬られる吊い、を象徴していると解釈されています。「四人目」の物語は、彼バルタザールは「真珠」も持ってこようとしていたのだ、と記しています。これではキリストの意味の説明がつかず、確かに不要なものでは

あったのです。

もう一つ、クリスマスにちなむ短編にオーヘンリーの『賢者の贈り物』もよくこの時期登場する作品の一つです。つつましく愛情深い夫婦、夫は妻の美しい長い髪のために、家宝の金時計を質入れしてべっこの櫛を買い、妻はその髪を切ってお金に換え、夫の金時計の鎖をかう。食い違いのクリスマスプレゼントが織りなす微笑ましい物語です。

クリスマスにちなむ事柄、たとえばクリスマスツリーとか七面鳥料理とか、がどうしてそうなったか、考えることがあります。O・クルマンという有名な神学者が『クリスマスの起源』という掌編でクリスマスの礼拝と並んでツリーの起源についても語っています。

「プレゼント」はどうなのでしょう。東方の学者たちの三つの捧げ物がそのルーツなのかもしれません。もちろん「贈り物、贈与」というならわしは人類が古くからしていたことです。その本質は、「自分が損をしても相手に利益を与える」行為です。そこには「見返り」が期待されているということでもありました。

理屈を言わなくとも、私たちのクリスマスプレゼントも、「利益の相互授受」という面を持っています。オーヘンリーの小説の夫婦も贈りつつ、もらうことを想像していたでしょう。私たち、親が子にプレゼントする場合は、もらったときの子の喜ぶ顔が十分な「見返り」です。

では、東方の学者のプレゼントはどうか。神がくださった御子キリスト誕生への感謝という神への「見返り」ではなかったでしょうか。このことは、私たちすべての人類に神が贈ってくださったプレゼントがキリストであるということ、しかも神ご自身はなんの「見返り」をも期待せずにその贈り物をくださった、ということをも意味しているように思えるのです。

教養学部 30 周年記念誌

1889年に東北学院大学教養学部が設置されて、2019年の今年は30周年にあたる。学院創立以来133年、大学としては1949年設置から数えて70年、その歴史の中での教養学部30年は、それらの年月と比較すれば長いとは言えないかもしれないが、泉キャンパス建設という気宇壮大な事業と軌を一にしてはじまったこと、この間に生じた世界と仙台地域の、あの東日本大震災を含む、激動と言い得る状況に鑑みるならば、これは深甚の敬意をもって祝するに足る30年である。心よりお祝い申し上げる次第である。

創設時の構想策定と実際のキャンパス移転に関わられた教職員はすでに数少ないとは言え、今も現役を続けておられるだろうし、本学でかなりの長期間、教養学部で過ごされた方も少なくないであろう。これら諸氏の感慨を思い、ねぎらい申し上げたい。

そもそも教養教育を掲げてきた大学である。そして実際1, 2年次の学生の教育を「教養部」として担ってきた方々が教養「学部」を立ち上げたことの意義とそこに至るまでに要した構想力と努力には大きなものがあつたであろう。改めて尊敬の念を覚える。

1989年、教養学部教養学科、人間科学・言語科学・情報科学3専攻として発足し、2005

年に人間科学科・言語文化学科・情報科学科、そして地域構想学科を新設して現在に至っている。文科、理科の共存融合の理念を維持し、学生のキャンパスライフ、なにかんづく課外活動に、また地域社会との交流にも力を入れる、ユニークな学部としての位置を発展させてきた。大震災後の被災地被災者へのサポートのために発信力も評価されている。まことに充実し、本学として誇るに足る学部の歩みと申せよう。

現在本学は「TG グランドビジョン 150」を導きの糸として次代のステージに入りつつある。「アーバンキャンパス」構想がそれである。教養学部もそのステージに向けて、さらなる新展開を、他の5学部と共に実現させていってほしい。学長としての切なる願いである。

卒業式告辞

本日ここに東北学院大学を卒業される皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご出席くださった保護者の皆様にも、お祝い申し上げます。

さて、本日卒業される学部生2589名、大学院生44名の皆さんは、今から4年あるいは大学院の方は6年前、東北学院大学に入学されました。神さまがあなた方一人一人を選び、招かれ、ここまで見守ってこられた、と信じ、感謝したいと思います。その皆さんは、今日大学での学びを終え、卒業の日を迎えられました。それぞれに思い出が脳裏に浮かんできていることでしょう。

学んだ授業のタイプは講義、演習、と様々だったと思います。大学は皆さんが学ばれた4年間、教育方法の改革を積極的に行いました。TG ベーシックという、そのときには聞き慣れなかったジャンルの授業は、基礎的で汎用的な、いわば学問の入り口の科目や、時代と社会の要請に応じて工夫を加えた **Critical thinking** やコミュニケーション術、などの新科目を集めたものです。これらはその後の専門科目の学びにも、人とつきあう面でも役に立ったでしょうし、これからの社会生活でもきっとそうでしょう。

先生方の授業方法についても改革を進めました。もちろんそれぞれの学部学科の専門科目を学んで、新しい知識を教えられ、広い世界を見る目が養われたことでしょう。しかし、単に教えられるだけではなく、皆さん自身が自主的に、自己の判断で問題を発見し、調査し、発表の言葉や論文を構想し表現することが求められる、アクティブ・ラーニングの新しい授業スタイルも取り入れられたと思います。パソコンやパワーポイント、あるいはスマホを利用したレスポンス、などの活用される授業が当たり前になったでしょう。それらによって、知識がさらに深まり、それを活用するノウハウにも上達されたと思います。

よき人々との出会いがたくさんあったでしょう。授業を共にするだけでなく、大震災後まだ4年、という時期に入学された皆さんは、復興支援を意識され、ボランティア活動に参加されることもあったでしょう。また、一緒に飲み、スポーツし、自分の理想や悩みを語り合う友も得られたでしょう。とことんまで卒業論文の作成に助言し、ゼミ合宿で親しく付き合ってくれる先生にも出会えたでしょう。

このように皆さんの人生の 18 才から 22 才までの 4 年間は、特に豊かに経験を身につけ、自らの個性ある人格を成長させてゆくために、この上なく貴重な 4 年間であったと思います。この 4 月から始まる社会人としての歩みにとって、大きな支えになるはずですが、

けれども皆さんが出て行くのは不透明で不安も多い社会です。具体例を挙げればきりがありません。戦争が続き、犠牲になる女性や子供たちのことが日々知らされる地域は少なくありません。自分の国、むしろ自分自身の利益あるいは虚栄のために、ことさら攻撃的な姿勢をとる国家指導者がいます。経済的な力を持つ勢力が巨大になる一方、弱い立場のひとびとが虐げられています。アメリカでもヨーロッパでも、先進国と見なされてきた国々において、国民の間で主張の分断が深刻になっています。我が国について言えば、政治の貧困が指摘され、多くの市民は生活状況がよくなって行かないという認識を持っています。民主主義と平和がなおざりにされ、原発事故による福島県民の苦しみも放置されているように見えます。日本社会には閉塞的な現状ばかりが目につきます。

人間にとって最も大切な「幸せ」が世界の人々の間に公平に存在しなくなっているように思われます。それが地球的規模でかたよってしまっているのです。かつてはきわめて不十分ではあれ、富が分散されるシステムがあつて、富者と貧者の格差は今ほどひどくはなかった、少なくともひどくない世界もあつた。それが今は格差が広がり続け、それを止めようとする力が放棄されているのです。そして富んだ者はそれを離れたがらず、益々増やそうとし、貧しい者は飢えるか、富者から奪い取ろうと憎しみを燃やす。そのような構造が出来上がってしまっているのです。

ことに近年、人間の中の多様性が認められなければならないとの主張が強くなってきて、自らの狭い価値観で他者を差別し、さげすみ、迫害する人々も目立ってきているのは憂うべきことです。皆さんもご利用の SNS がそのような攻撃のために大きな武器になっているのも恐ろしいと思います。

そのような社会に皆さんは踏み出してゆかれます。しかしどうか自分の力に自信を持ってください。このような現代社会を生き抜いてゆく基礎能力を、皆さんは東北学院大学での学びの中で身につけているのです。社会の現場では、直ちに問題を発見し、それを解決することを求められるでしょう。仮に大学での学びの分野とは異なる仕事に就くことになっても、汎用的な教養教育と基礎的社会能力を教わっている皆さんには、すぐれた適用性が備わっているのです。

中等教育学校から始まった東北学院が最初の学院卒業生を送り出したときから数えて、すべての卒業生は 18 万人を超えます。その卒業生、TG 同窓生の大きな群れに、新しく約 2600 名余の諸君が、今日加えられることとなります。卒業式に続いて、同窓会の入会式が予定されています。先輩方は東北、仙台を中心に各地域社会に深く広く根を張って働き、貢献し、同窓生の絆をも張り巡らしています。TG 卒業生は能力的にも人格的にも社会から高く評価され、受け入れられています。その力はきっと新社会人となる皆さんの支えとなってくれるでしょう。

皆さんの多くはとりわけ東北地域に関わりを持たれることとも思います。なお途上にある震災後の復興のわざに加わってください。悲惨な状況にある人々、支援を必要としている人々に手をさしのべてください。人と人の格差をなくすよう社会に働きかけ、偏見のない目で他者を見るようにしてください。謙遜と寛容と、愛と奉仕の精神を実行してください。そのために東北学院大学で、聖書に学びキリストに聞いた言葉を、思い出してください。厳しい経験もされると思います。そのときにも聖書のことばが、何よりも皆さんと共におられるキリストが皆さんを支えてくれることを信じてください。

最後に、今日卒業され、社会人として旅立っていかれる皆さんに、次の聖書の言葉を贈りたいと思います。

「そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。」(フィリピ 2:1-4)

皆さんの、力強いあゆみを確信して、告辞といたします。

ご卒業おめでとうございます。

2019年3月26日

東北学院大学学長 松本 宣郎

学長見聞録 vol.8

『東北学院時報』第750号 応援三者「トレフレツチェ」学生の活躍を後押しする“三本の矢”



学長 まずはそれぞれの団体に入ったきっかけを教えてください。

齊藤(以下、齊) 入学時何か人のためにしてみたいと思っていました。入学式での応援団の演奏を見て感銘を受けました。先輩からの熱心な勧誘も背中を押してくれました。

齊(以下、齊) 私は、高校時代はダンス部に所属して、進学後も続けたいと思っていました。東北学院大学は勉強と部活の両立ができそうだったので、進学を決めました。

学長 吹奏楽は、途中で担当する楽器が変わることもありますが、

齊 吹奏楽を始めた当初は打楽器でしたが、高校からフルートを担当しています。楽器が変わった頃はゼロからのスタートで周りについていくのがやっとでした。

学長 他の方も何かと苦労することがあったと思いますが、お聞きください。

齊 もともと不器用なので、踊りの型を覚えるのに一年かかりました。

齊 私は体が小柄で、人の上に乗ることが多かったのですが、体幹を鍛えるのが大変でした。



齊 応援団、チアリーディングチーム、SWE(シンフォニック・ウインド・アンサンブル)からなるトレフレツチェ。イタリア語で「三本の矢」という意味だそうです。私も学内外のイベントでお会いする機会が多く、たくさんの思いが伝わります。今回は、この書に大学にも各団体を卒業される皆さんに話を聞きました。

学長 四年間でどんなことが印象に残っていますか？

齊 一年生の時の青山学院大学の定期戦、校旗と団旗のホールを間違ってしまった。混乱してパフォーマンスが全くできなかったという苦い思い出です。

学長 一年生の時に応援団の連盟祭が東京タワーで開催され、そこで踊ったことです。有名大学のチアの華やかな演技を目の当たりにしました。

齊 そのような場でも物怖じせず堂々と演技されたのでしょね。それにしても東京タワーとはすごいですね。

齊 東京タワーについて、駐車場だったので寒かったです(笑)。

齊 私は現役最後となった昨年十二月の定期演奏会が大好きです。

学長 SWEもそうですね。その団体もそれぞれの活動を通じて地域社会と触れ合っていると思います。とても素晴らしいことで、後輩たちにもぜひ引き継いでいただきたいですね。最後に、その後輩たちに何かメッセージを。

齊 やりたい事は悔いなくやって欲しいと思います。あと、他の団体と関わることが多いので、打ち合わせだけは綿密に！(笑)

齊 人数が増え、出来ることも多くなってきたので、これを維持してもらいたい

▶写真左より齊藤さん、奥山由理さん、松本学長、齊藤えりさん

●参加者●
 ・齊藤(ひかる)さん(応援団II経済学科)
 ・齊藤えりさん(チアリーディングチームII言語文化学科)
 ・奥山由理さん(SWEII人間科学科)

「一緒にあるいてくださるイエス」

『大学礼拝説教集』第23号

ルカによる福音書 第24章 13～16、28～35節

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合っていた。15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

古代ユダヤの地方にはじめて生まれたキリスト教徒たちの、不思議にも心躍る体験の物語です。それは2千年の後の世界に生きている私たちにも真実な物語であると思います。

紀元一世紀の30年頃のユダヤで起こったことです。その頃の時代の数え方で言うと、ローマ帝国皇帝ティベリウスの治世16年ごろ、といえは通用したでしょう。ナザレのイエスという、宣教者が、神の国につき、人類の罪からの救いにつき、人々の心を揺さぶるような発言をし、多くの庶民を引きつけました。彼は当時の一般ユダヤ人の属していたユダヤ教の教義や指導者に対しても平等に悔い改めを迫りましたから、彼を敵視し、危険視する勢力によって捉えられ、権力者であるローマの総督の法廷に突き出され、死刑に処されました。ところが、イエスをかねて神の子と信じ、彼の言葉によってその復活に希望を抱いていた人々の間に、彼の葬られた墓が空になっていた、復活したイエスから声をかけられた、という一部の弟子たちの証言が広まり、そのことを確信する人々が一つの集団を形成することになりました。

イエスの死と復活の意味は、神がかつて予言していた人類の罪を帳消しにする救い主の実現であった、と解釈して教義を打ち立てるのはこの人々のあとのパウロでした。今日のこの物語は、まだイエス復活のうわさしか知らない二人の人が体験した、不思議なことの顛末であります。

イエスの無残な十字架の死という出来事があまりにも強烈で、復活を事実としてまだ受け止められない二人のひとが、エルサレムからエマオという村へむかってとぼとぼ歩いていました。彼らは、尊敬し、親しく傍にいた先生、ナザレのイエスに起こった悲劇的な事件についてこもごも話していたのでしょう。懐かしいイエスの面影やことばについても話したかもしれませんが、彼らにはイエスはまだ死んでしまった人でしかありませんでした。ある人は、イエスの墓は空っぽで、彼は生きている、と言った者がいるとは聞いていても、半信半疑か、ほとんどまだ信じられないか、という認識だったでしょう。

その、あやふやな思いで歩いている二人に誰かある人がふっと近づいてきて一緒に歩き始めたというのです。私たちの経験でも、何気なく見知らぬ人と、旅で一緒になり、名も知らぬまま言葉を交わす、ということはあるようです。

福音書の引用はここで少し省きますが、彼らとその人との対話は深まって、彼らは知っている限りイエスのことをその人に話します。おそらくまだ不安でいる彼らは、その人が事件の詳細を知らないのだとばかり思って、堰を切ったように話したくなかったのでしょう。その人が復活のイエスなのに気がつかない、彼らを責めるわけにも行きません。目の前にあるものが全く見えていない、あるいはわかりきったことがわからない、ということ人間はよくしてしまうからです。

さて、その人は、二人がまだわからないでいるまま、キリストすなわちみずからのことが聖書全体に記されているのではないかと解き明かしたのです。

物語の中で、ふたりはなおその人の正体がわからないことになっています。目的地エマオに着きます。その人はさらに先へ行きたい様子なのを、二人は引き留めます。彼らはまだイエスその人だとわかっていないのですが、道々その人に教えられ、だんだんわかってきた、あるいはその力に引きつけられてきた、ということでしょう。

ひるがえって、その人、復活のイエスはエマオからさらにどこへ行きたかったのでしょうか？エルサレムへ、なら逆戻りになってしまいます。ひょっとして、全世界へ福音を伝えるに？などと私は思い描きます。

さてエマオで一行が休んで過ごす、印象的なひとときで、ようやく彼らはその人が復活のイエスであることに気づきます。レンブラントの絵画を誰しも思い起こすでしょう。静かにパンを割くキリストが食卓の中心にいます。その仕草でわかった、というのです。そうするとすぐイエスの姿は見えなくなりました。物語ではよくある流れではあります。

物語の後をたどると、二人はすぐエルサレムの仲間たちのところへ、おそらくエマオでの喜びの体験を伝えようと走って戻ります。そこにいた仲間もまた、同じ体験をしていることがわかります。大事なのは、弟子たちの間でイエスは復活した、それも共に食事をなさるほど確実に、という認識が広まり、それが共同体の確信となり、最初のクリスチャンの群れが生まれた、ということなのです。この最初の群れが、やがて聖霊が下るといって、また新たな奇跡を経験して教会となったことは、ルカ福音書の続編である使徒言行録に記

されています。それ以来キリスト教の教会の歴史は切れ目なく続き、この東北学院につながっているのです。

このことに付随して、今日の聖書の文章の中で、二人の弟子に起こった二つのことを、私たちの生き方にも共通することとして記憶にとどめたいと思います。エルサレムを離れ、エマオに向かっていた二人は、絶望し、うちしおれていたでしょう。その二人のところへ、「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」(ルカ 24:15) というのです。大きな声で励ましたり、先頭に立って導いたり、ではなく、一緒に歩いてくださったのです。絶望を理解し、慰めるように、です。私たちも、本質的に弱く、頼るものを持たないことを自覚します。常に追い立てられ、他人の評価をばかり気にしています。その私たちに、そっと近づいて、寄り添って歩いてくださる方がいるのです。弱さを私が共に担う、私があなたのことを心にかけている、痛みを癒やしてあげる、と。人類の救いのために死に、しかし復活したイエスがそう言われる。これほど確実な保証はないのです。

もう一つは、イエスが姿を消した後、二人はエマオに来る途中「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(ルカ 24:32) と語り合ったことです。心が躍る、喜びに満ちあふれる、それも深い、体の奥底から湧き上がるような感動。多くの人が最近感じなくなっていることではないでしょうか。そのような現代人である私たちが、心の燃えるような思いを抱かせる同伴者がいてくださる、エマオ途上の二人がそのことを示している、そう信じたいと思うのです。

イエス・キリストの父なる神さま、弱く、罪深く、いつも不安に陥りがちな私たちに目をとめ、近づいて来て共に歩いてくださることを感謝いたします。そのことを思うだけで私たちは、心が躍ります。この思いをすべての人に共有させてください。

主の御名によって祈ります。アーメン

東北学院大学における改革の経緯と現状Ⅳ
(2013.4～2019.3)

発行日 : 2019(平成 31)年 3 月 31 日
編集 : 東北学院大学 学長室
発行 : 学長 松本 宣郎
問い合わせ先 : 東北学院大学学長室インスティテューショナル・リサーチ (IR) 課
〒980-8511
TEL 022-264-6545 FAX 022-264-6364
印刷 : 株式会社東北プリント